

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5

L294
A

林氏卷一



6703

秩父順拜記一名秩父名所誌

文政三十二年九月江戸の文人獨

笑庵竹村立義が石川某と共に

に武藏の秩父三十四所観音靈

場を順拜せる時の紀行なり恐

らく未刊本なるべし立義には

文化十五年三月に川越松山の紀

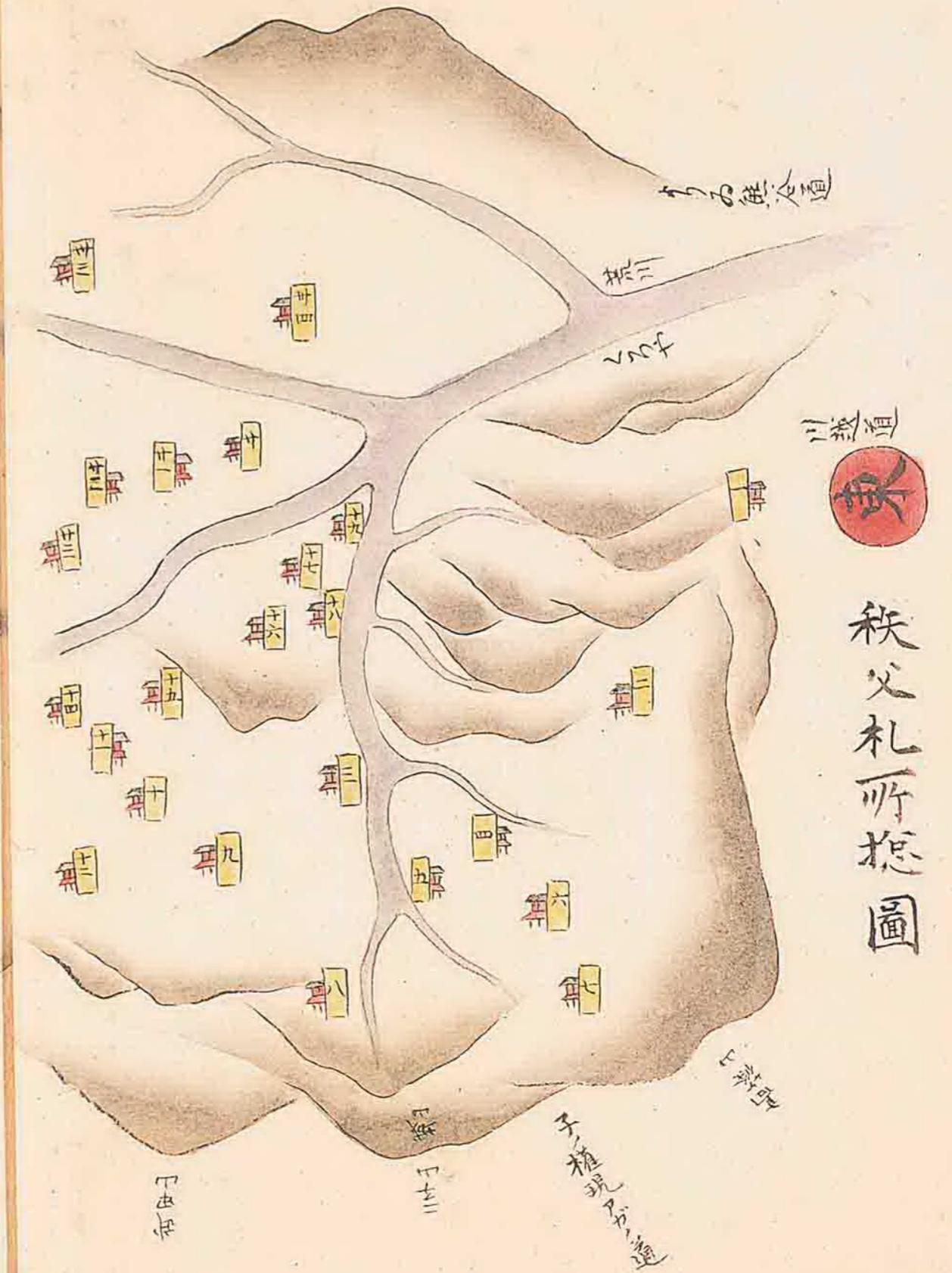
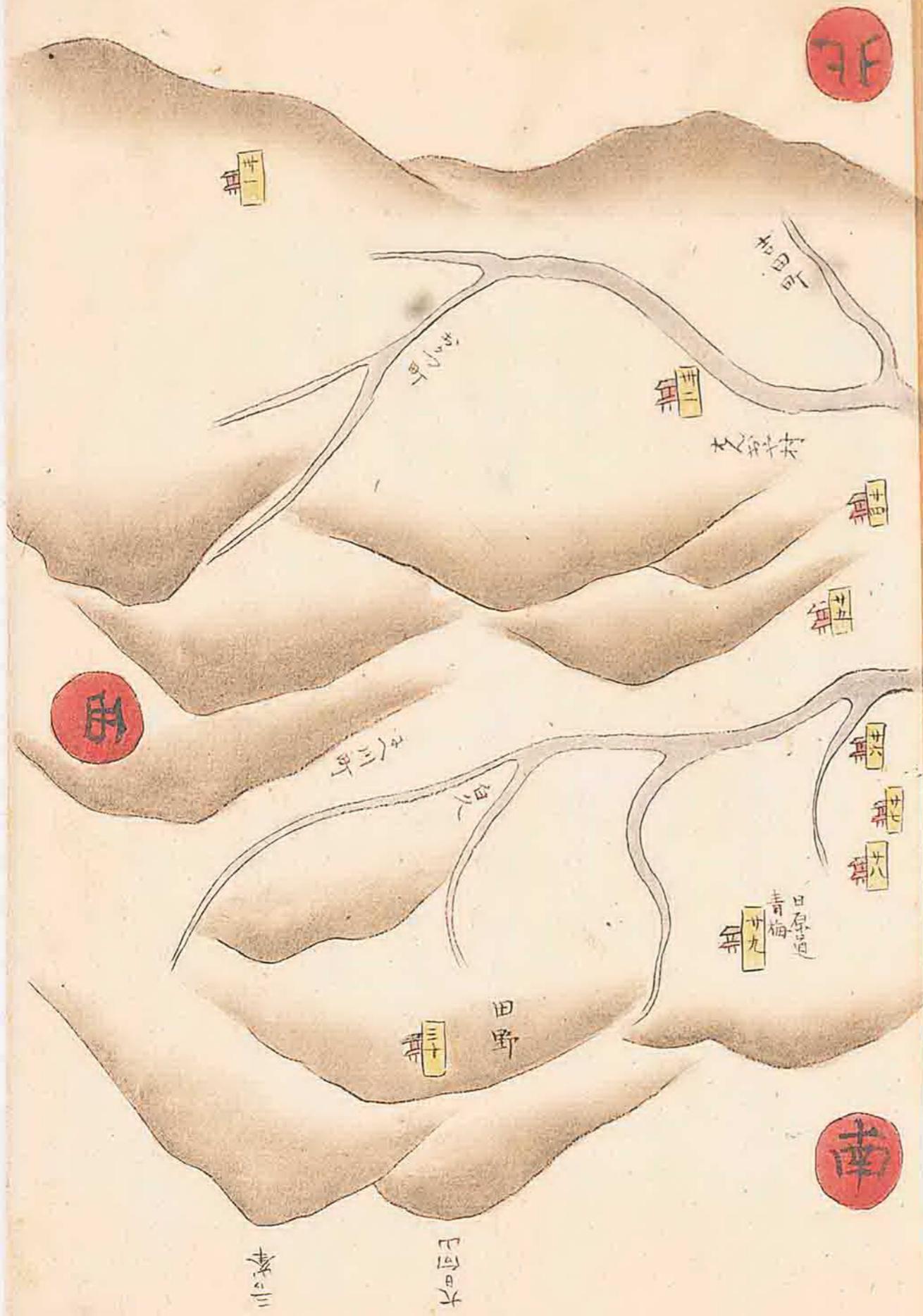
の紀行あり余先に所収書に

収載あり

昭和五年八月日

竹溪編書坦之記





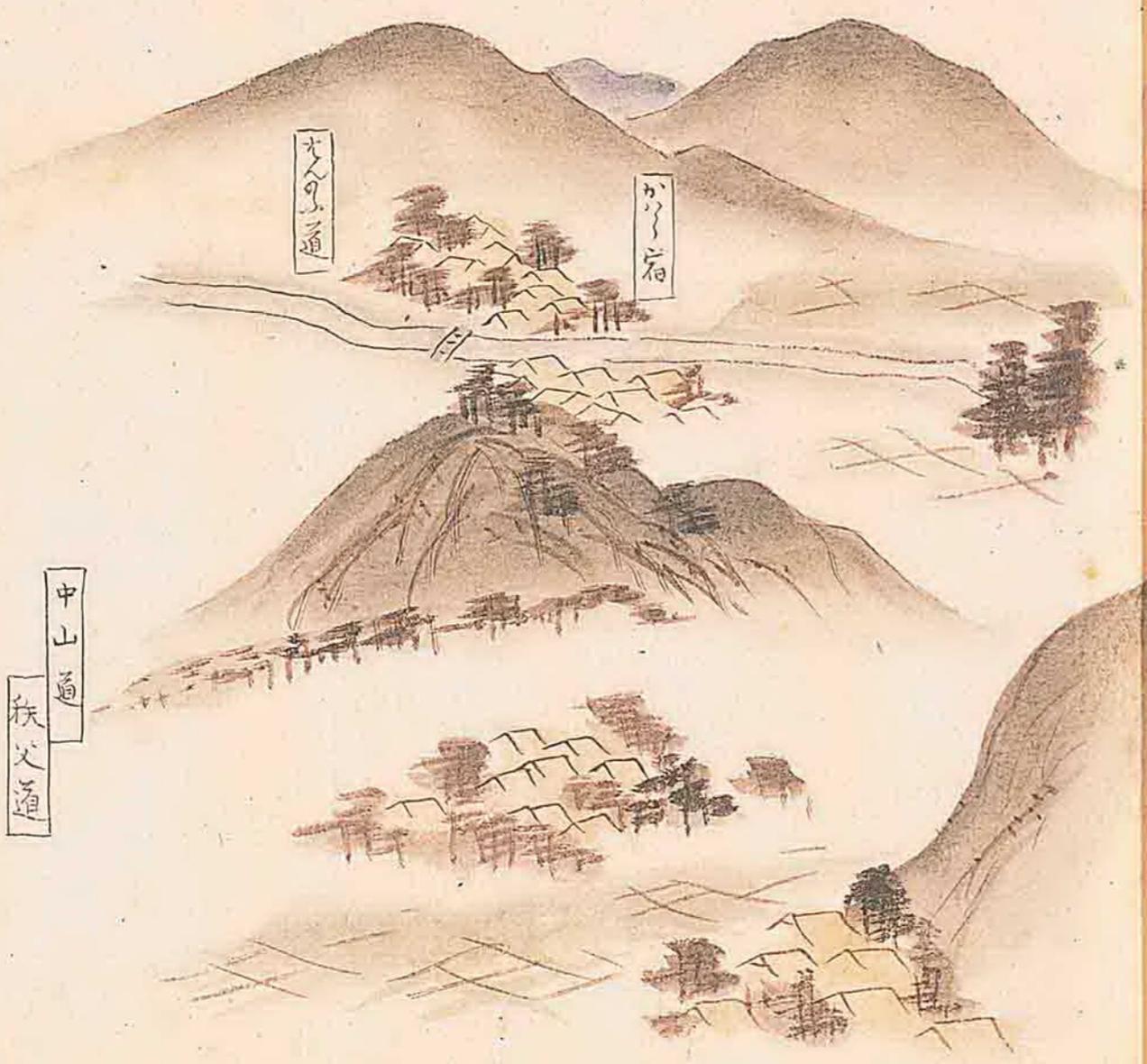
秩父順拜記卷之壹

はまきくそあへんをとうく小あきくくたふぬの
ねとくは強き名をとうくく己きたつ山あそぬの
備何う御まうく自改く耳順く一たつす又生れつ
肉犯者よりかろく多^{たが}くくく軍^{いしよ}あるく産^{いしよ}業^{いしよ}振るるく小
すり^{いしよ}御あきもありるきせず世にうといて山あ^{いしよ}の^{いしよ}御^{いしよ}行^{いしよ}
やこぢひるくくきこの御^{いしよ}行^{いしよ}とくく^{いしよ}御^{いしよ}ま^{いしよ}く^{いしよ}御^{いしよ}こ^{いしよ}く^{いしよ}く^{いしよ}
あふるくくすと^{いしよ}御^{いしよ}たり^{いしよ}十^{いしよ}七^{いしよ}秩^{いしよ}父^{いしよ}乃^{いしよ}山^{いしよ}御^{いしよ}と^{いしよ}と^{いしよ}例^{いしよ}比^{いしよ}
石川のを^{いしよ}は^{いしよ}ひ^{いしよ}く^{いしよ}く^{いしよ}石^{いしよ}川^{いしよ}の家^{いしよ}ま^{いしよ}く^{いしよ}て^{いしよ}順^{いしよ}礼^{いしよ}く^{いしよ}く^{いしよ}の^{いしよ}岩^{いしよ}貞^{いしよ}
かり^{いしよ}御^{いしよ}る^{いしよ}く^{いしよ}高^{いしよ}籠^{いしよ}の^{いしよ}と^{いしよ}秩^{いしよ}幸^{いしよ}ひ^{いしよ}る^{いしよ}き^{いしよ}ハ^{いしよ}世^{いしよ}度^{いしよ}の^{いしよ}用^{いしよ}と^{いしよ}す

内は相州火より北具附木懐中編端抄又の多岐を
 みら合納る用とてそ用とて梅平白砂梅
 あり書考更し其をり〜曲物今〜申〜入〜ふの是
 と改院代を〜枝又通志武新造枝又那武新造改院
 武新造佐武新造経号おと〜
 又取札す〜江平より道三筋を川越通るを日本
 橋よりニリナ丁上板橋二十六丁下練子一リ白子一リ藤折一リ
 大和田一りま大井一りま川越石原所ニり高板村一り荻倉村
 ニリ小川村一リ今あや村一り今坂本村一り一妻礼取に百約三筋
の内中ニ一筋終る吉野通うと云是に此谷より吉野此及日本橋右より

八妻礼取に凡二十三里一筋の一筋を終る毎日日本橋
 一妻礼取に凡二十三里と〜川越七石の蔵取る
 の阿とよの向を吉野を〜代世々終る音鳴ると詢し
 と心す候約ま〜〜〜と出はら答の取らぬをハ
 産せりる〜道分り〜若ま〜成子流松中
 城よりる橋一筋〜道一筋の將軍家中
 し系ありせらるを〜
つま〜又〜竹〜馬ヒ撫救る建は〜
 く集〜萩〜津井村〜下新田軍村〜
 とい〜の〜保谷村

所澤宿略圖



と漸くして一と二階代那を定めてる個度
引らばつて近代体む所の先代之後
に家系た有り建つて收藏道とも
て昔よりハ絶えり一丸成るるの
名有りハ是袋るる家系しつる
之様より一と二階代那の系行
蘭茶と引く又素麵制る家系し
發緒志の夫婦つむる一と二階
言一と二階代那の系行一と二
く引らばつて近代体む所の先代
に家系た有り建つて收藏道とも
て昔よりハ絶えり一丸成るるの
名有りハ是袋るる家系しつる
之様より一と二階代那の系行
蘭茶と引く又素麵制る家系し
發緒志の夫婦つむる一と二階

一と二階代那の系行一と二階
言一と二階代那の系行一と二
く引らばつて近代体む所の先代
に家系た有り建つて收藏道とも
て昔よりハ絶えり一丸成るるの
名有りハ是袋るる家系しつる
之様より一と二階代那の系行
蘭茶と引く又素麵制る家系し
發緒志の夫婦つむる一と二階
言一と二階代那の系行一と二
く引らばつて近代体む所の先代
に家系た有り建つて收藏道とも
て昔よりハ絶えり一丸成るるの
名有りハ是袋るる家系しつる
之様より一と二階代那の系行
蘭茶と引く又素麵制る家系し
發緒志の夫婦つむる一と二階

支より藤沢村是須笹江村並柳村をて般能宿を世より
 般能と云り世に有るは母をてて七甲と云ひ版の赤子
 権現三甲吾野毎々中津毎々いりきて道の程は河一
 りきと吾野毎々いりきて西条川流もきて幾度か我を
 給ひてまのりていれし中津毎々代りす一と云ふも
 中津宿よりふるもせ給ひていれ末の十曾孫といふ事あり
 又又相もせし中津宿よりいれ末の十曾孫といふ事あり
 高くて権現小宿て下山るハ山崎富太守といふ事相
 らせ給ふと細くいれをて打外しと云ふ事あり
 世宿は徳正八律竹の末の寺なり寺ニテ寺某王寺禪宗

実洞院

志 寺宿宿房よりえん
言 神元はよきと云

或新體話曰天正文禪の以て

八幡念みらのより河原小相

今ハ正新井
願次と云相今山と云

居次

小室居せしりい入の後御今の地は移り修村

中々業師堂

今の家
の少

いりまの世よりあるの志をすえん

の後新田義宗公の志をいひらよ傳と成居りいり
 可とゆす給ふ世代より年よりいひぬ道永二十の己月
 新々自性院新英源宗庵といふ世の遺を性よあせり
 此寺といふ東光山業王といふ
曹田久孫村大新山
宗 永源源王末 あり寛永の以
 新小造と云やうし業王の二字を衣といふ事取の業源
 寺といふて名付といえし世村の民家ハ観音院

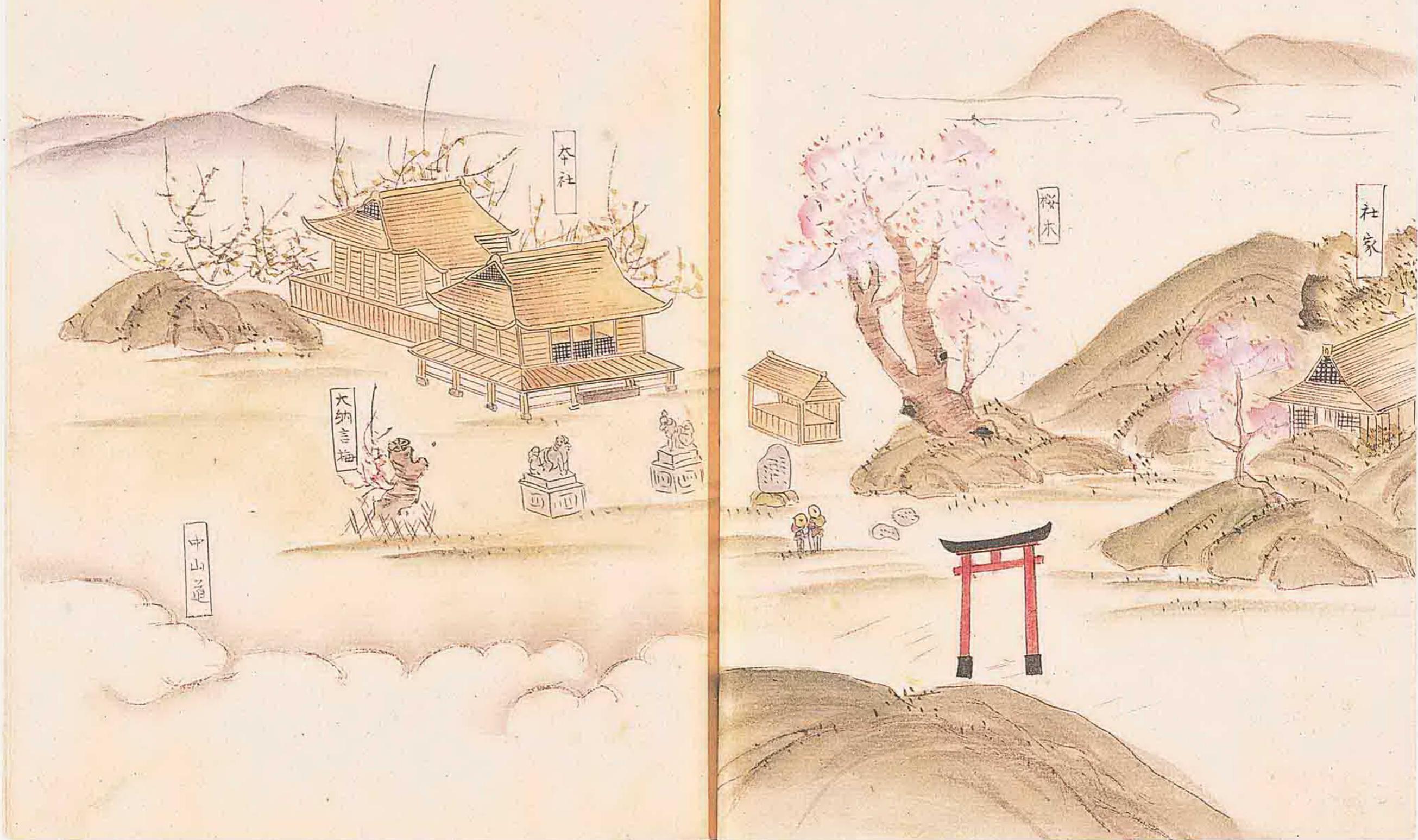
永源寺にて寺持極誠ありしりしを某王と實歴院寺持
の檀越とありぬ 某王とは唐の鬼子の 又曰曰西よよ上新井
村より下新井村まで八丁八村の上新井下新井ありて
其後お村より上新井と取伏との界は河東橋と云地は地
山親喜院新光寺 真 言とて祈基の他の親喜とあり
内兼平 十六 世あるの地を遠くは赤次野及びこの系の特と催
し物ひし時の是會所は飯小倉の終と輕新々より
親喜寺前附きうを後手月と雖も此地と地り
縁地をさしりてとえ弘のころ兼貞鎌倉征伐
し御世地より大寺新新とこの小系とて一凱施の

先小孫のきこり地と兼ひ前附をとも物外寸文相十八
聖復院真准依の記に不詳と云ふなり 寺ハ 出り
後泉より山伏親喜寺 院位 してさうと出り
き此山伏後泉の地絶くるり 寺ハ 後泉坊地とて
村の知の中より此寺の境内に古道と鎌倉道と云
信濃上野より鎌倉への乃に此寺の東南の道
本宿と云え取河の民家も此宿より今ハ江戸
乃の寺ハ皆何す親喜院境内に古き板碑六枚を拜
此の寺ハ 夜以て宿と出 臨城 宿と云ふも不詳 河系宿
小此寺是よりかき 寺ハ 取河道宿よりと云ふ

何れもいささかあれは一所余り立居る人家を問合は
たり又入りしとあるは古細く中廣き及て是れは
又又道二筋ありはさしハあへてあはれはさしは
あきハいさかたしはあはれはさしはさしは
御りて先ず御女あゆむはあはれはさしは
能と問ハ吾是ハ青柳のまはれはさしは
はきたるも版能及て是とあはれはさしは
中しはさしは版のまはれはさしは
とゆて道すはさしはあはれはさしは
ゆまはれはさしはあはれはさしは

御りてはさしはあはれはさしは
あきと種をさしはあはれはさしは
見あはれはさしはあはれはさしは
小出ゆはさしはあはれはさしは
の及はれはさしはあはれはさしは
りあはれはさしはあはれはさしは
まはれはさしはあはれはさしは
問はれはさしはあはれはさしは
さしはあはれはさしはあはれはさしは
あはれはさしはあはれはさしは

小野村天満宮園



為東の功と祈の志と中絶しつゝの事
小石の功と祈の志と中絶しつゝの事
一川神をく富村とくは武野の功と僅
海たるハ飲まぬとあるハ心とくは
あまハ別るハ

古き為東の事太平化を十義貞理の巻
三十一武野の合戦の巻と小石の巻の巻
合戦の事新あ子簡く白石先生小石と神徳
何とらる事と異て委く編く後又青木氏
の四角漢縁と編り事と母を問ふハ他は

す又小石為東此の古く東鑑よんえきと
小山合戦の祈の志と小石の功と
今一物集集る武野小石為東の事
あり

君の志と祈の志と中絶しつゝの事
すてしつゝの事と中絶しつゝの事

うして祈の志と祈の志と中絶しつゝの事
御まの功と祈の志と中絶しつゝの事
いふ事と祈の志と中絶しつゝの事
本社より又板青相敏の額を請ふと中絶しつゝの事

大納言愛親郷の御筆に境内よりと太さる橋を
たふすゆみ有

此のうみやゆり橋より武蔵野に
おろり山片橋ひとみ代

享和二年堀尾庵札通

とる武蔵野の許は古文書より一過りあり
急く通るべきハキリハ

武蔵野路曰折々河橋山野祠より
近十に下つくと云

月云山野大神古久米川より
月云山野大神古久米川より

社名神不知是山武蔵野に云々山野に
るりりありあり神は七橋より大古司栗原

此社を延喜式の物部と神といふと
祠官栗原氏物部系實由國神社百餘社乃

菅原由社七日奉武蔵東征し所を
物部氏といひて神祠と定むゆり

二月廿二日一敷市と云同廿二日二敷市と云

社名大木の橋一市は信長武蔵の極目

本と云毎年九月廿二日奉武蔵野に
白毎年二月廿二日物部神社を同廿二日ハ

と備書のありし物部神社あり武内宿禰あり
伊勢尾張甲斐美濃越前越後信濃丹
後但馬播磨之妻部入石部物部神社あり
是之古ハ此物部の地ニ官邸と建云
地細め並れし由續日本紀神代卷云
二年武内國入間郡の人物部の直廣が
六人性と給き入間の若孫と給すと云
入間郡人物部の人居候と云しと云今
此物部と申すは粟末氏の部也と出云
伊波比の物部國淵地祇と満と物部小倉原

物部は神合殿ありと出雲伊波比の物
部と國淵地祇と物部を合部ありとの事
ともいひたりと廢物とて四地と兼詳由合
殿とありとありとありと備書あり
しと此社と物部と物部と給すゆゑの
物部のと物部と心持遠ひする人多きゆゑ合殿
としてその極ありと物部物部ありと云
たり也一粟末氏の部也古文書之遍あり
意承天文弘治 己上古文書の文を略す本文と
スル也

ぬい取まて版能ハ元の道は廻り廻さうと竹葉
えんのうちらと廻り中橋を道と云う一はれと二
町あり廻り中橋ハ廣き道を有さうと廻り
と云うてあると云う一はれと二の版能ハ元
及こまて()のまゝおだ耕化は世のなか
地先こと民家のとてらよ()のように
す漸行て林の中とあり村のまより
くまらりて石橋をまらりかしの山と
お出も出もあり()ハあまもむ
らとていつてある人だ付らうに
尾州殿江橋場武蔵入間郡中野村と云う

ありて東背有る()の者の東も小関と
北は路を八王子が日光への地と云う管根の橋より
宿町と云う宿次す間あり版のハ向ひ
小治よりとせ給()と云うて中野村と云
まうと云う家一軒編純菓ふるも
外絶く舎和堂ありやも橋打ちあり
て又版能の石と云()と云う村あり
山より石を思はれと云う
ふるやと云うつしを思はれ松皮の理と云

竹とてあつてくまの山とお對してをまはり
 一御堂あり山を削りてせまや一を岩の半はまり
 石に死してあつてあつちをわらひてくまの山と波を
 一山の石を谷深く谷を山あり細く流れてさる御堂川は
 流合ふたのころちうふくま川といふそと岩は砥石の
 村ありてを流るゝを山を畫してや極楽寺と
 及くす山ありあきとらあつてす極樂寺といふは
 ましてあつちを流るゝ魂をといふ一毎何捨皮をさつちの
 うそを流るゝ何ともなめて人ともをせして後の山は
 もる一山とありてあつちを流るゝとありてさるころ

はまとなつてくまの山とお對してをまはり
 やえあつちを流るゝ魂をといふ一毎何捨皮をさつちの
 増えあつちを流るゝ魂をといふ一毎何捨皮をさつちの
 道もあつちを流るゝ魂をといふ一毎何捨皮をさつちの
 漸くありて谷より流るゝ魂をといふ一毎何捨皮をさつちの
 あつちを流るゝ魂をといふ一毎何捨皮をさつちの
 かくて這ひてくまの山とお對してをまはり
 やつちを流るゝ魂をといふ一毎何捨皮をさつちの
 そと岩は砥石の村ありてを流るゝを山を畫してや極楽寺と
 及くす山ありあきとらあつてす極樂寺といふは
 ましてあつちを流るゝ魂をといふ一毎何捨皮をさつちの
 うそを流るゝ何ともなめて人ともをせして後の山は
 もる一山とありてあつちを流るゝとありてさるころ

うさるうたりあるは松の皮のやうにしてるをもしら
あ一王のおはる一あるりと申傳へ侍々と云ねえのた
御うごもききとら眼やうし川よつきてよのた
能神を海もやあうとてまわりのきぬ

扱世松皮の代よりして又何乃耕るあ毎うさ
埋きあるうしうら皮一重のくさうさうとて厚
く重うあきえまうりす又現れうらうとて
木はふりす横よりさあうたらうん厚いああ
あもあうすのあうさうもあうとて西の者を優
さあの根あうさうもあうとてふ人家の埋き

りうらうもて埋きたうさうらうらうらうらうらうら
のあうあうらうらうらうらうらうらうらうらうら
接う接あうらうらうらうらうらうらうらうらうら
すもあうあうあう松皮葉とてあ今の松
皮もて葉うあうらうらうらうらうらうらうらうら
て松皮のあうらうらうらうらうらうらうらうら
りて葉うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
しうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
社あうらう松皮に叶うらうらうらうらうらうらうら

堂中より見あり頼鏡七今ハ松の本皮のらねと云
と三人種らよ切丸能らつてまよ敷きも年
子凡四百餘ハ持つとそよあるれもあむ
の家根昔とをりりく一毛く又押解くたさ
りりくあじあるとをりりく一毛くあむ者す
稀にけよまつても莫太あるとハりりく上るあむし
總念八幡文印社必焼く後再建らるる松
皮は昔用いると中ハ一といりゆく古とてしる者の
家々あむといもあむ日也す西原村の松皮も七人
の玉も持歸くといも西原の云もゆくと云り

續日本紀元正天皇西元二年よる西暦六百七十九
十八人といふは遷一をて代とする西暦初と名
すくゆりくといハそき等の中又採集く教よ
傳しあむ又同書植木とて延暦八年十月之位位
之位言余物后後任薨去病言西暦初の人あり
言西暦初の人後徳綿ことくくく君是等の人の
宅初るや又武人といふ本初の教心集又武初
入向川信ありのりよとまらてめ首といふと海
流まらるるといふりて何よりわかれあむ
りともいりてまらる西暦川は海に地は合川

と云引るる事を入る川は落合のきいささう此供あり
八芒に民屋も流んをくけきいささうす時よ
くすすゆきも院ありて定め流る東邊の川
に松皮之たり和州築白海人藤弁又武士の
家より不造松皮屋皆板屋造りとくす位年
松皮昔の棟おききくす口本代畠畠後一条帝始
化よくすより唐去よもくと本徳孫又くえり
引やう畠畠

くす川よあてよりゆれよりくすくす流る
川向ひより民屋ありてくすくすと流るり人のくすとくす
毛前より流渡りす流るくすくす流るりくす
くす流るり流るり流るり流るり流るり流るり流るり
版能宿合あり

五ノ川朝宗曰く西麻川枝又那上我野村より流出國
入り那芝方村と凡二十里相流またり回國川飛
从起岩村近お流荒川の落合の中くすくすと
くす流るりくすより流出る源よりくすくす
版能宿付也那合の地よりくすくすくすくすくすくす

惡津峽之圖

谷ノ貫山



岩沢村

飯能

高瀬川



あまじり葉賣あまじり樹とく扱はるは販賣家に似
そと同く過純あまじり葉と販賣家と見ゆる向ひ
の権所我邦返の旨に販賣ゆきと市の日あるぬい
ゆじんといふ右の者も似たるる一袋と作の
家の別りし幸ひ販賣あまじり樹と世家の向ひは同部
るそあまじりの若相家の別は換金収るも多かつる益
りりすして世田の同やといふも東海及海防の者次す
るそハ葉とてたとハ杖又大ま可とり江戸小出す織物
そ外の産物るも石くおそ草り久保又と我邦とあま
そ可の同や信じてそ前の了るそ販賣と出す販賣

の同部より取附又さう取附るに石谷新者又さうそ若物
の世作しるは信じてとて同やといふもあまじりの権現
りそ世若と直まゆと申すす口ころうまのゆき
あまじり葉といふあまじりといふ我邦のゆきと葉
是らうみの権現わ中取あまじり樹とあまじり樹
廻るまといふ取附あまじり樹といふあまじり樹
馬よ葉といふは同くあまじり樹とてすしてあまじり
連紗是木のるを口と申すす又流るは馬といふ
あまじり葉といふは同くあまじり樹とてすしてあまじり
あまじり葉といふは同くあまじり樹とてすしてあまじり

武藏演露曰 飯能村之下方と云と今迄言ふ所
余家敷或百軒餘世多建田是前も後此中山
能にも曹洞宗の寺ありて建田家菩提寺
飯能の青梅(或甲)の所麻布々一甲と云

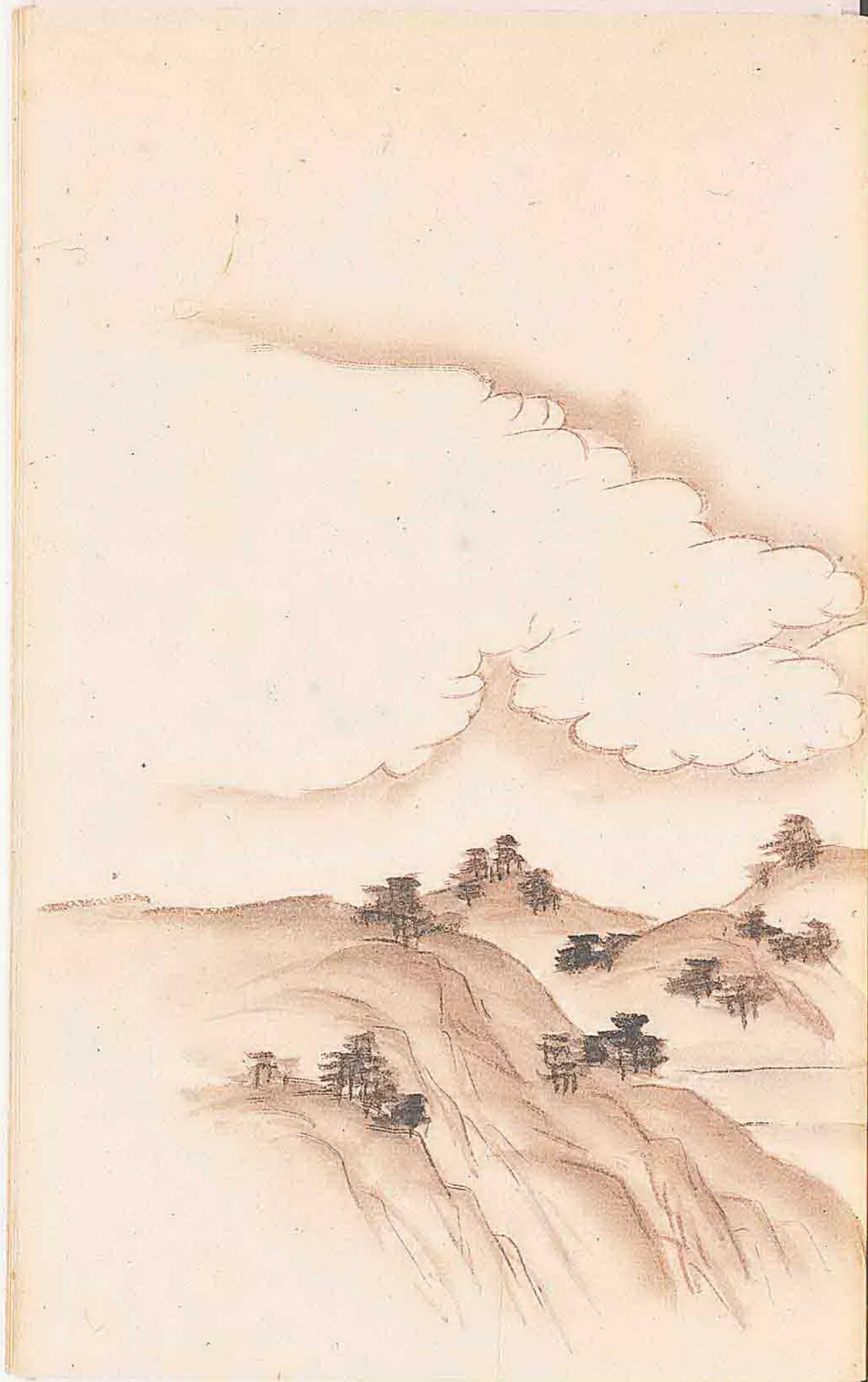
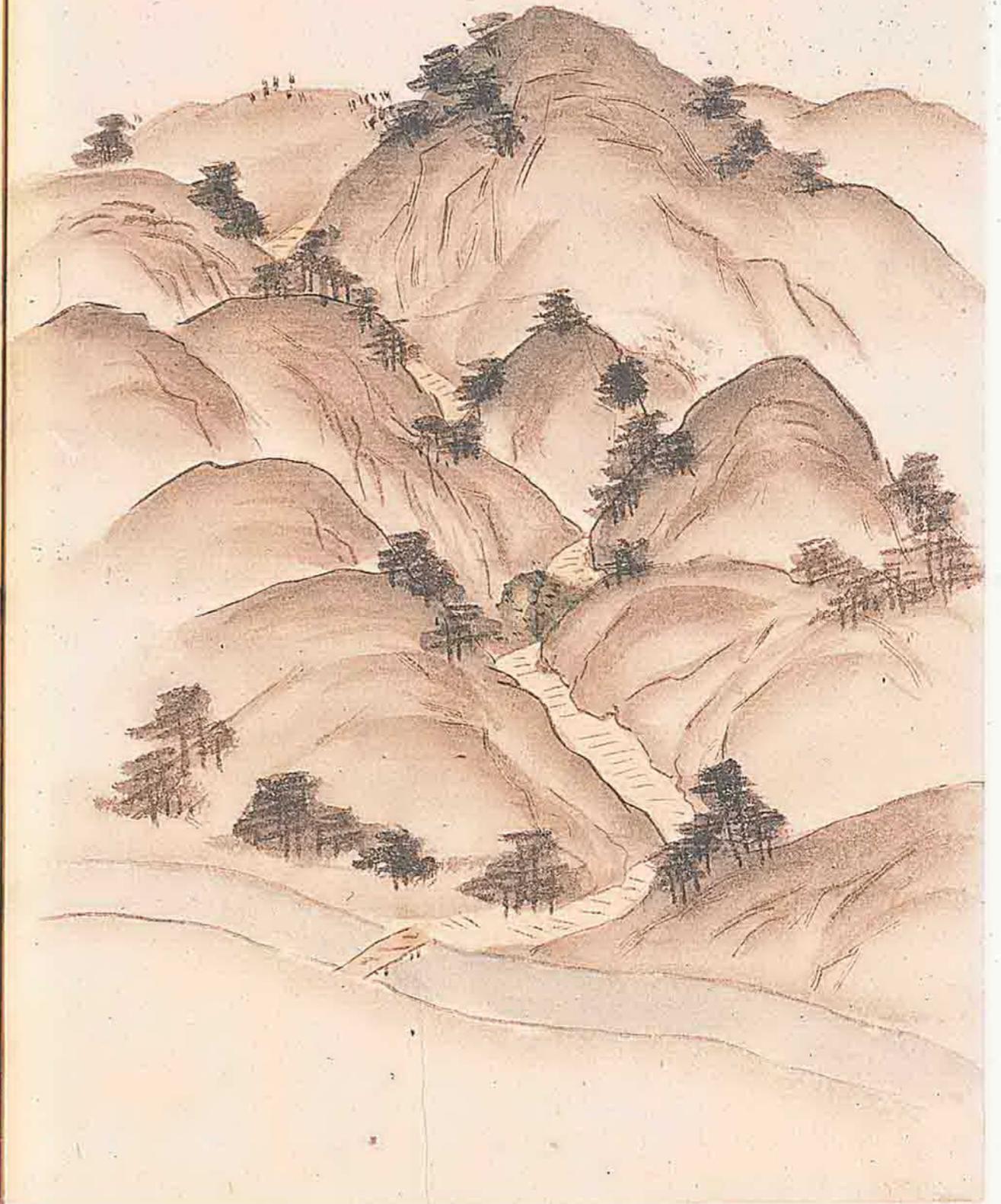
村と出するを以て田畑の合と約は戸と出く是と平
是より次第は先より此邊に田畑も多し
多し約先有るは山より杖又山ありやと
吾高の所麻布々の山と云ふ所を去り古柳防株
下の所と大つた坂と云ふ六丁とある一馬よ
めゆりて山に下りて中と云ふ所麻布の所
あり

別の細き谷間の田圃あり或ハ山の半後日細き民家あり
て平よりある所をわきへて横手村新泉寺と云
志言の寺より西へ平七と云ふ所阿の寺の寺あり
白の村と云ふ所を去りて曹洞宗の寺あり麻布
十と云ふ所と及の所との家ありて掘打りて大と云ふ所
も用をせざる掘打りてありてありてありてありてあり
よりありてありてありてありてありてありてありてあり
杖又那の鎌倉飯と云ふ所を去りて西へ杖又の所後
次に南村と云ふ所ありてありてありてありてありてあり
間をよりてありてありてありてありてありてありてあり

小屈曲村に石文りの乃こる西藤川と渡りすすて十辰
之内に今所を橋する一往渡りて之余九ヶ所九中或は渡
らざる所或は長き板を敷りぬる所一乃ともありあるは
川中より取き出せる石とありあるは一かたう紙をさら
きかふるを悉く舟中と舟馬よみてあふぬきすを
とともにはありあるは又向ひの谷上を御をとおや
よともありす既の己りあふ馬川より上を御つ
きて藤馬せり幸りしてゆめもせさりしは
のみらかり容易のゆふにありすり村は藤秀村
るふひよりあふり出ぬ馬上るる相坤とを悉くし

世乃く御あふり凡糸をいんるるありあひじり
ふい極まふん此のころ愛りて目とよぬこひす
こちりくあふりてふりきりいぬりありし
きつて同やよ入て先物のりこよありぬきなるものを
うあひす家の自らそを充まると象形して物
り寸をまうる僻地は佳れと心をあふると同
きすす又詳也物形一武秀絵景とあり印一稜文形
西折ひらけりすふ是ハ村への折而たふひる
ゆり己れ枝文形の絵景ハハんを傳ふんとて能
したる己れは地へ佳く能く記し傳ふハ大言

大ツク坂之園



ハ遊心ゆすすと云いりさまも子能さまあれ余り
景と校舎をせまのりくろく細書乃物あるをハ
不出来つてまのりぬハ情ろりりつてさうして
中ぬ携りて又た出へて色見字札すまうく高き
ると背負せ給ひききハ大方始ぬれあると云ひ
しうく古跡ありぬる也給きんまのり村の末又忌殿
親善と申すは漢東より六丁余も入古さふて宿の
中又古碑も出てま書ありてハ給残と申人
こりあり過ぬせましくぬれんそとて書
殿下りたりて板碑も携りのせられぬ忌殿の書給

終りて高山の不動をいふ年也給いぬ古跡といふ
蓋後と湯仙といふふの田と名を楽院と申す言宗四乗
甲地常楽院新織志言四乗甲堂風二石田村の種と大種大
種田の門元六ちるは言宗無那あり
権現と崇めいといふとある種も給うけいといふ一里子山
村と申す宿出こり給て右の山といふ山といふ山といふ山
相違すを申す是より種をいぬ比企那小川と申す宿
の近くは古村といふといふ山といふ山といふ山
け穴古く元亭秋書といふといふ山といふ山といふ山
といふといふといふ種も更なりん言んまを給いん
を物といふ種屋と云せ給いんといふ山といふ山といふ山

多にハ却て臨の帝を成高き毎うさうるも、そあつても
 ねれい、これい、と消し、自ら今、外ね、世も、も、も、
 臨人のふさう、まて、や、な、う、う、い、ゆ、近く、目、ま、めて、
 面、の、音、す、い、と、い、ひ、く、れ、い、と、て、也、す、(あ、れ、い、と、
 倉、の、潤、く、て、す、ま、う、) 毎、甲、臨、人、と、た、ま、合、す、世、
 稜、文、大、室、所、あ、く、の、も、の、く、て、い、
 ろ、り、り、利、重、と、應、う、て、稜、の、解、つ、く、
 句、ま、て、白、戸、あ、く、ま、ハ、か、く、と、
 の、か、く、と、
 の、馬、士、と、
 の、馬、士、と、

あり、り、或、つ、る、外、く、を、い、
 夜、せ、て、
 何、ね、の、
 一、山、の、
 止、む、
 与、此、
 根、を、
 の、あ、
 出、さ、
 世、家、
 二、三、
 ち、く、
 高、原、
 川、流、

川幅も日ろくみみ六間程小えぬ若狭くふみ中ま多
く能録めりもきとあつよき色ハそこくよこり奇如
眼く出さう憶光古と云曹洞宗よりそ山系平地あり
とそ臨人のと世ありあやふく後くよと立られ
ううまうう一町余うけハ忠澄庵ありちりり山
殿のたと言ハそまこの細尾より山の登らせぬと云
是ころのありおえとるき人立の細道こそむあき
亦多し面程尾まの相沖是よすといてあゆまう
杖地力にをみはけはと出細く山後の歩ゆし一山
るら山忘山あまは是かあすすあてはたのたに

き山あ細く流るあしきまハ一町と木の葉隠きに民家
りう二町六町とやりり十丁とも一はえ也十安程のた
てハ島代休め幸くやてのやうつさうああのり
立あて山考も何きあ方そ一町ハ山程くる心えは
の立出せあよりあすくハあせといあぬけお格別海
とくすも何しぬとそ後一はああはああ
廣くはは心の居るそんすああのとハあああ
せらるる一かうああはああはああああああ
とああといひあああああああああああああ
平子鏡あうせり御堂の後ろハ忘れあは横屋

斗り深き之間社裏の方ハ薄くし大代おて携へ
端燭より流しを系下に是すやく青志の板のわが
とつの上よりある一た志と同しをて位牌のわが
るふくうが一奥も同しをてた志のるる中
るふの上の目とわく象と中又親る殿と彫る
例と同しをて幅を人より廿三人守御者廿寸余
此碑より 武形地所石碑ニ枚有る廿八寸厚廿
二寸五分とありてははとくも
文字ありとありやくして六百余年成経し物と
次の中よりして兩を踏しうらふりさも
可くハ文字の應城せし 武形地所石碑ニ枚有る廿八寸厚廿
二寸五分とありてははとくも 故のまに彫るる

具文ハ武形地所

當寺者天性岩窟自然寶石目行基菩薩
薩乎刻十一面尊像自安置此靈地已来
六百五十歳始立此石門具結縁者數百人
具記名字納此宝殿大悲照見悉在此偈

具一切功德慈眼視衆生福聚海無量是故應順禮
文和五年丙申二月十日 願主比丘元行

又武形地所今を及て同し御るるしをて又ハ武
州の西麻那の地志敏山陽嚴祿寺山田寺大止於土野
之の志とありて記せうけ一段の碑ありしをて



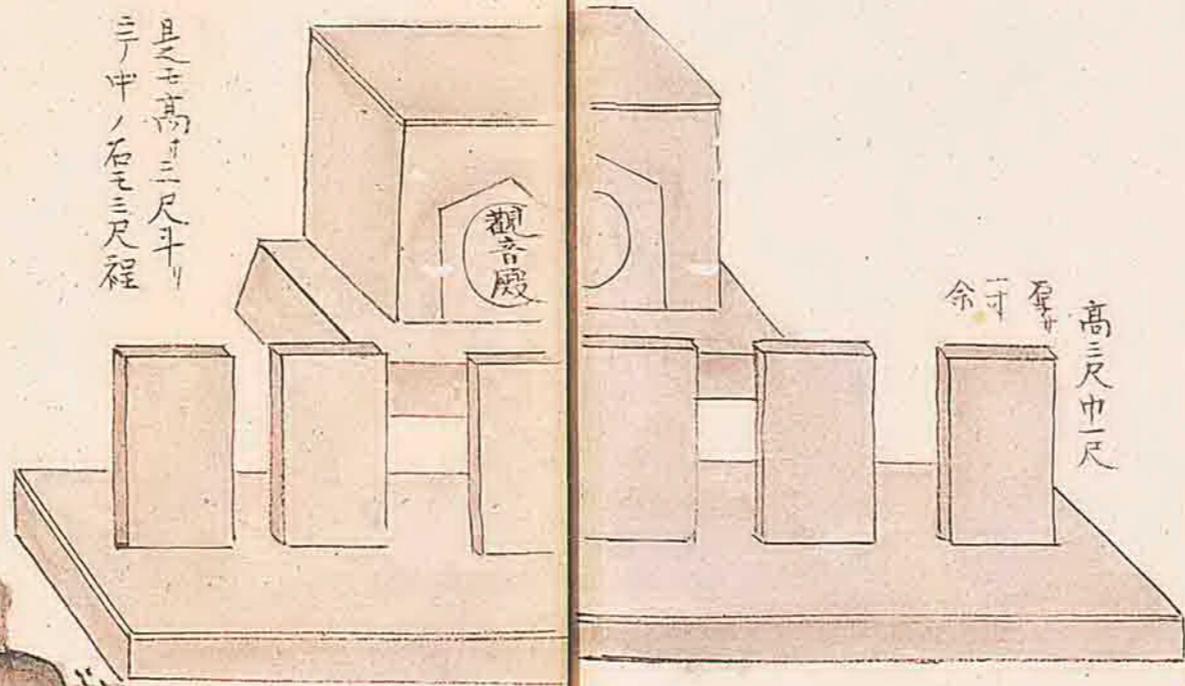
忠澄庵并岩屋觀音之園



忠澄庵

此辺は
坂石村云

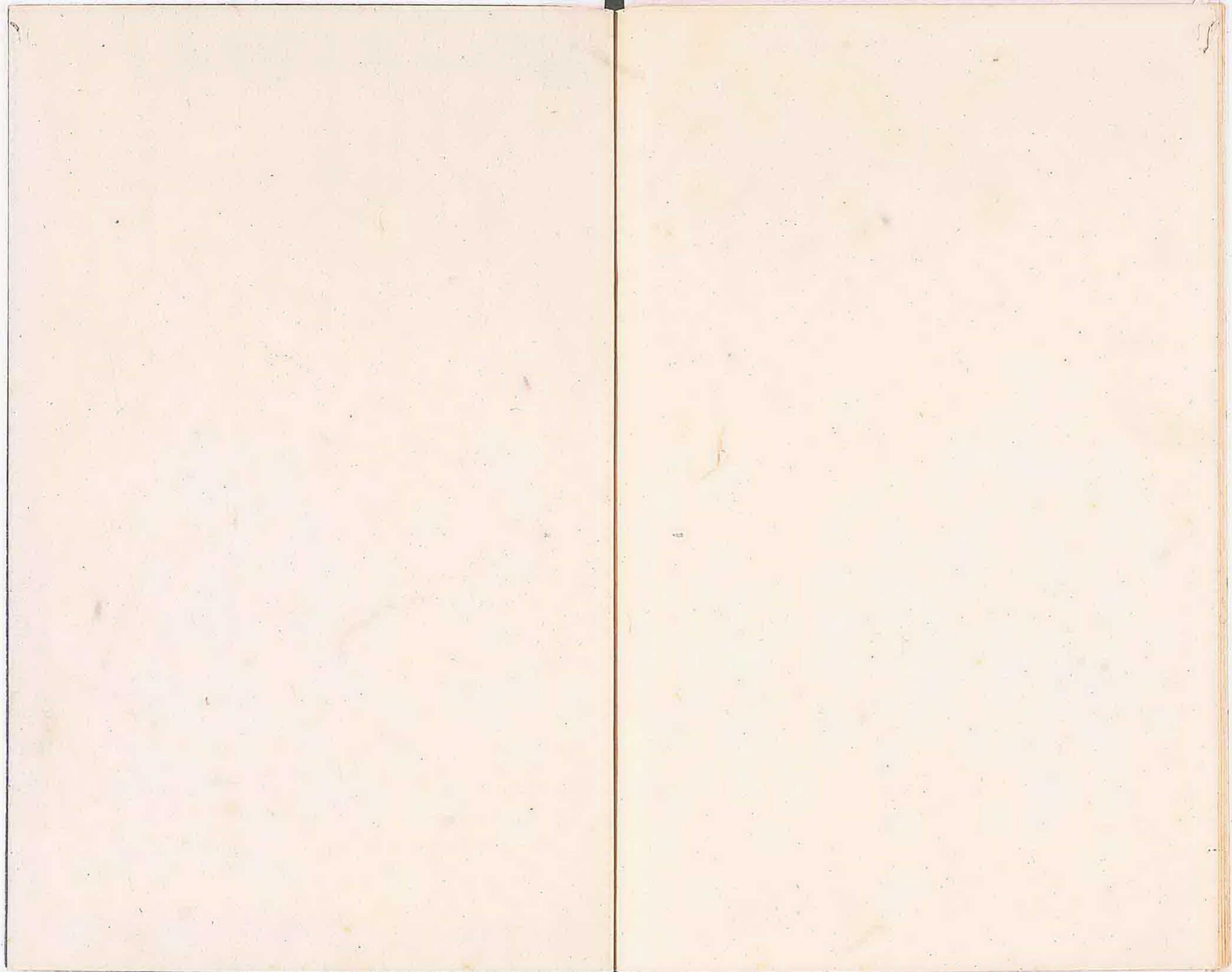
岩屋之圖

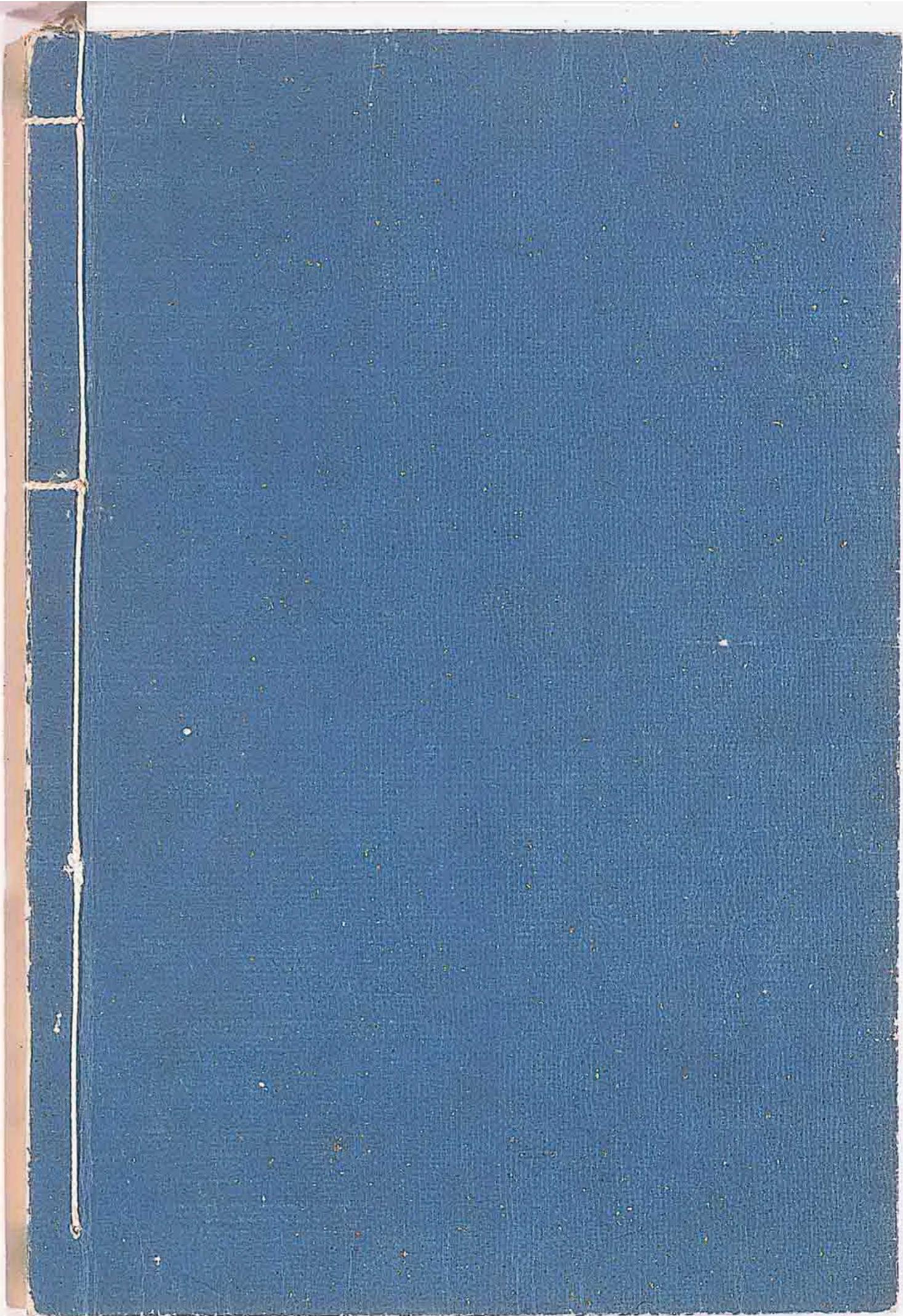


足す美友に立あへりての内なるよめと表裏相をて
ては見えしとも文字あり何れ一を相約しうる内
一物一を末詳是非あり互出えの道と云は沈庵の孫と
なり

表裏相約云者し父をて見えは古くして表那し
といふ所の改めりるる下極念大双成
く表那次節といふる世代不産の人ら那も今ハ枝
父那して瑞徽祥吉も慶吉の後吉言とあり同那
高山常樂院来とあり観音院といふ同而改る村小
曹洞宗といふ是約也沈庵として是約六係也四跡と

云傳ふ多如く此少那言忠言し碑はも改るる
を是那氏也四跡るる也





秩父名所誌

L294
7

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5

吾野出口白鬘之社



忠隆庵入口

高麗川

阿波み種一丸を揚と敬度とあり古み誠なるは遷り
或を老りの名ひらり中漸うして民家阿り五よとて葉
ゆへひて志るく忍小面程やまず妙造子程坂の村の
内ごとく是と申子の程現と申町ことと云ふく約く不動
るごとく一多程現の程一也きり也り口山程と坂す
て十二丁道幅六尺斗うた志大木の程のひらりとい
るも物ぬり一由一本の根と足くくくして少くこと葉を
まかり入て骨きと体ひ女房にけり程きり喰つと物とハ
強飯まると云ふ下は先活く喰つさ又志うすもくこと
着の程程程く清の程一集う程程程程程程程程程程程

此すといひく象も有る葦酒と禁す此碑阿り并り
句碑も一龍吟やまを極の吟くくくくとる名程
より一は如先小老程程程程程程程程程程程程程
を大井山とるえり大鱈山るうーや何きの何より改
わしとがー約く二王門るう今くも程程程程程程程程
昔くこく物あうて本の葉也又厚
腰下の處も別南
一程の程も

付る苗より一杯盛切の飯とよふと信
梅るりの盛と云ふは多程の程程程程程程程程程程程

武藏村演路と云子の程現上お程々南村の中は
村家聖町第一里淳和天皇天長九年壬子のひの
子日子の阿波破のうなり阿のく子聖と云ふ家々能

伊弉天理の如く人世俗天の聖と云妻村百半巖上
桑院本和元子の壬子年十月廿五日甲子の日
控現と宗比大賢と海き又腰下の病るるもの
海と海一形より登壇を別か苗大辨山を新
古と云天台宗の室物は新辨して龍の辨後よ
るたるふく鳥の形より大松の二本を是と云
揚枝松といふ林兼の村代妻村と云世ある松
人と海は

白洲の上より甲の海飯食ひく能くうら物洞一節
といひうらまはま登壇の形よりうらまはま流るる妻徳

きくすれは物賣る處のうらまはまといふ人といふ物
うらまはまをゆめかき一形洞一形ゆめかきと云梅山松
尾先なるを新より物入の島と云こころよ妻せぬ
と案のす打連を登りうらま東南のうらま山を妻と云
小ゆめぬる女持とて彼可くゆめかきゆめかき能く
をり日と海川の海面より入る又海に火災の時むい信の
あると云と苗山のおよよとほくゆめかきのゆめかき
のまひもあつたと云に目とく見えてえきと只渺々
とくといふ布は少致むうらまのゆめかきと云と云
とあると云と云と云と云と云と云と云と云と云と云

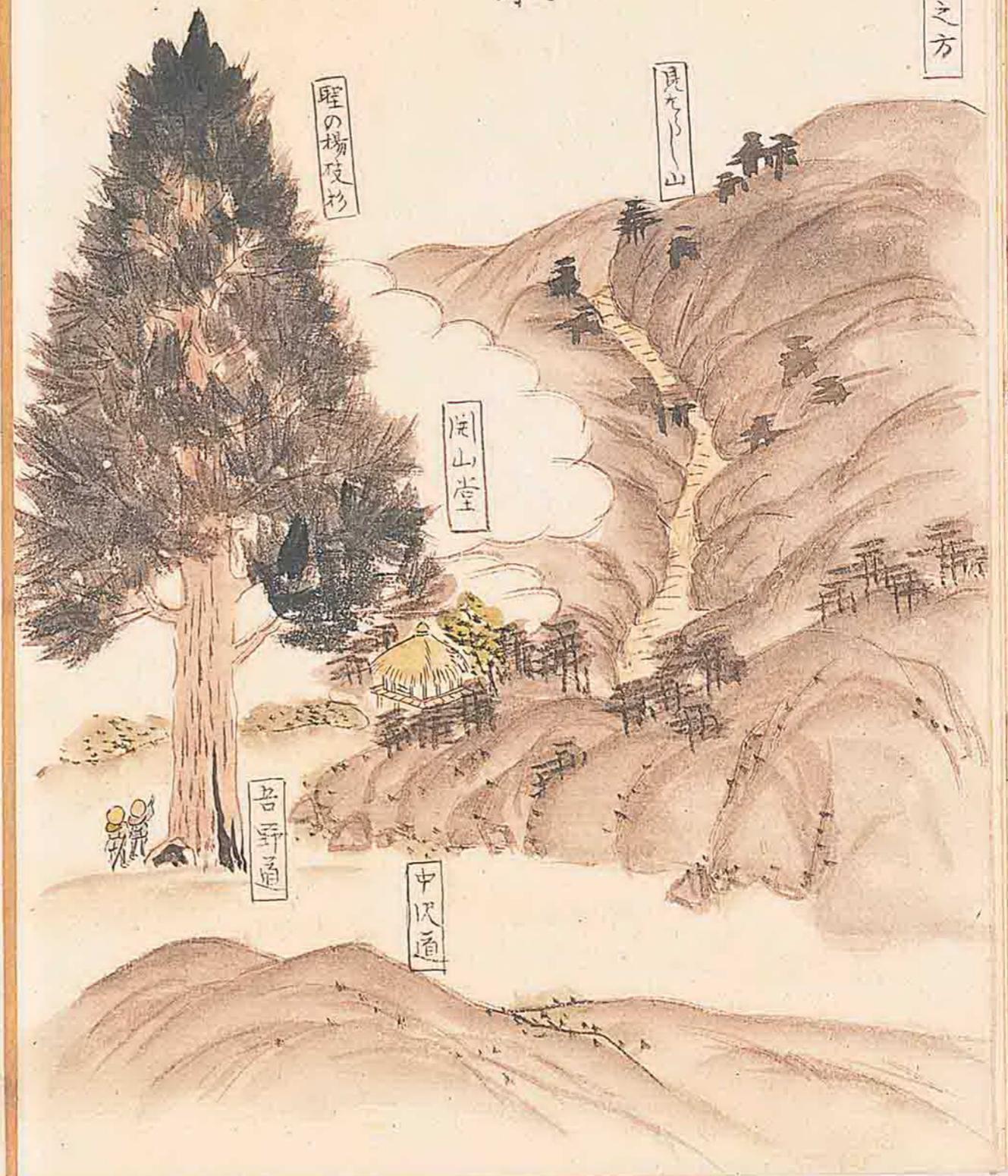
右の山は山お連の中又すくもさくわい東やううなる山也
のきの山とも同ハ書物なる御嶽山のうめをいふさそ
武甲山ともいふ所やといハは西より麓も見え物す
山合より頂上見えぬとてうて教中此山よりなる山を
らねといふの事より言物あるはいさういふさくせうえは
坂といふ丁もいたはすよ札所ハの道より此方ハ坂路す
て十町直なるよりとて舊生村見たり又此方ハ山を
りも始メる迄より入一谷川も同ハ極よて川是も是も
舟中又思ふ多々此方の川をりかゝ流も廣くあり
の事よりさく同とよりいふさくしび画んとていふ事より西也

此止まらる南川村といふ小なわらうの家一海軍
難ありきりるよ今日本に御入るき智う例は此方
りの者二人海方を飛らる今船何なるを乗せぬ
しといふ御神より事ありといハは村外よりいふ事
せぬといふことなるふさくいふ事なら草や宮庭にありといふ
道といふ一の宮泊と定められは是北よりけ小泊更
こよのちいふやといハは是より十二町よりといハは同といふ事
傳ひと尋ねる宿もやといと教よりうせ彼處にありといふ
形はこつ山定宿と申されはにめ形とありたればは
も瑞人の宿と申すといふ事と立寄りて一宿と求る

子権現頂上入口之園

東

江戸之方



聖の場
夜杉

長崎山

洞山堂

吾野道

中沢道

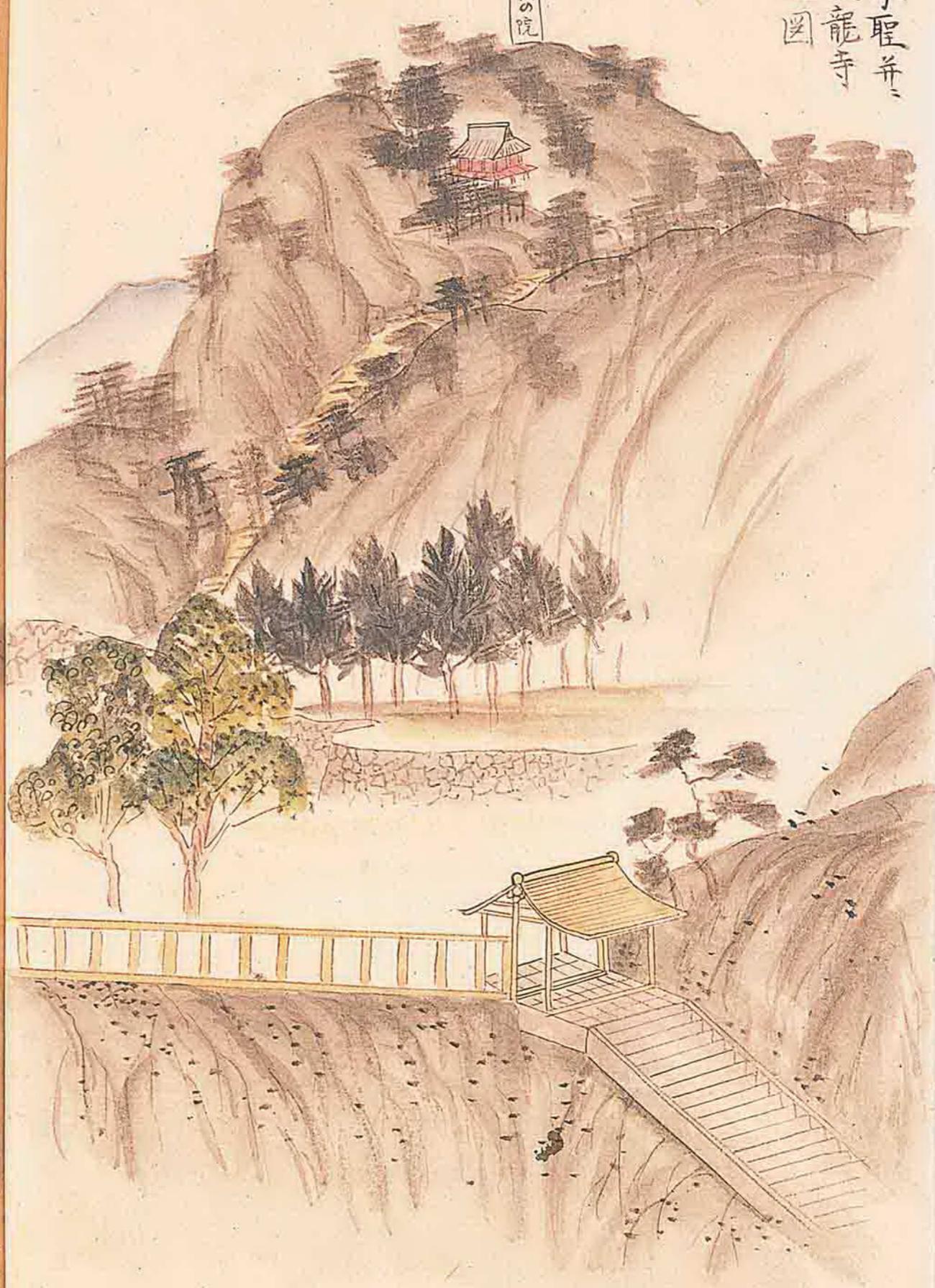


茶屋

禁葷酒

子聖并
天龍寺
之園

奥の院

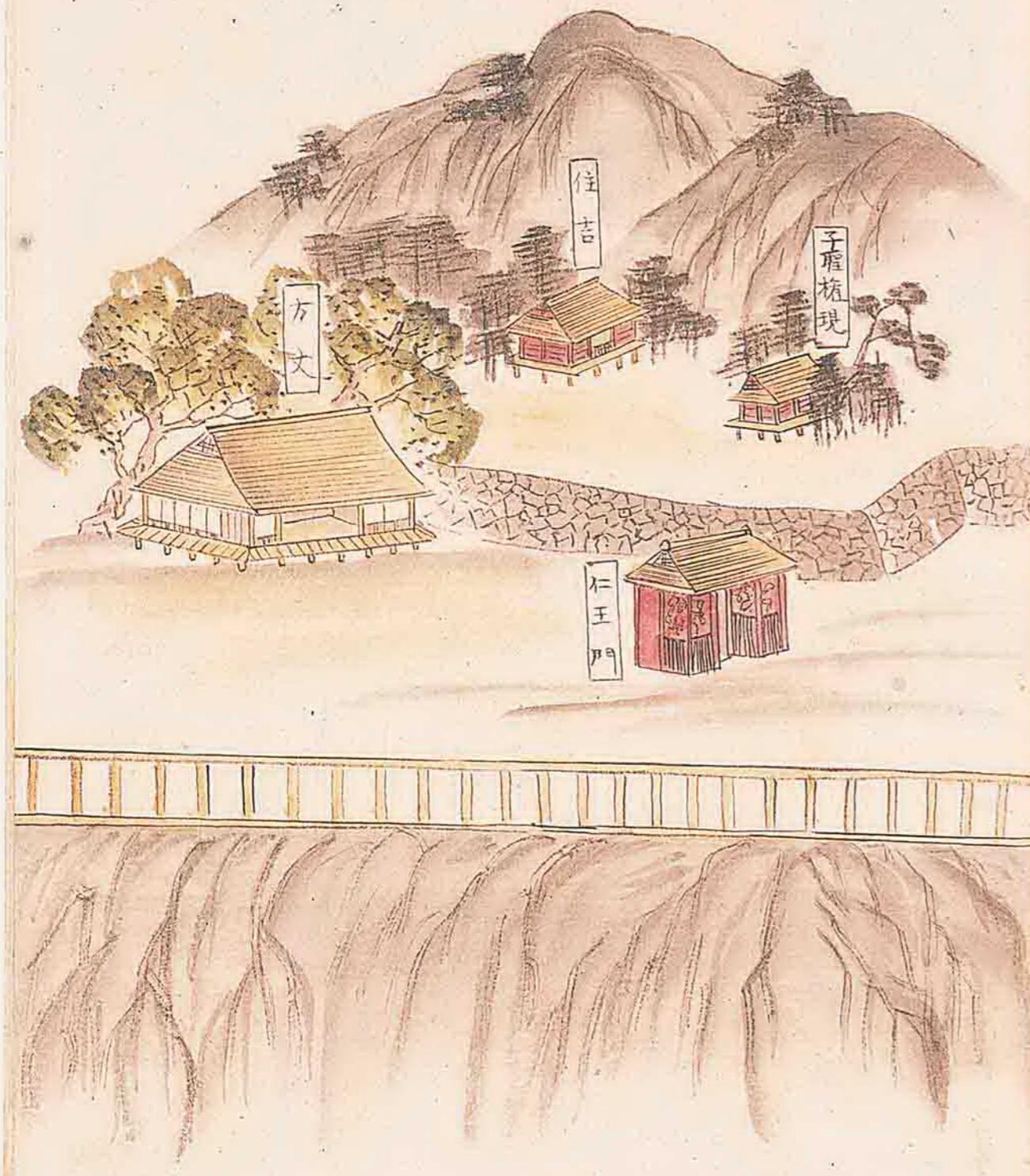


子聖植現

住吉

方丈

仁王門



ままびあきふりよしくこの節をたすけおせ
く地のもとも信りたててはこつゆかよとまふり
けしと足ゆ節常きう日は既まふりあさり
神んよりえ来り一具そのこの隅る百路となまの
是らぬ一食よりあふたてたくりきり物とら
是巡一宿とれむいすいえらけいひうすこの
とふらり種一もを給り茅の窟とゆせ給
しうらても致通んとかろくハ峠のきり
祖母より信りれハ窟せ給りともあ来す
よいとても叶うつと云志ひく立出長と
祖母より信りれハ窟せ給りともあ来す
よいとても叶うつと云志ひく立出長と

町と来ぬんとかろくハ峠のきり
んや老人ま帰らりによりて飛う例は
るハ棟大にわらうを給うらけた
とらう一校をうらんとて竹の
らもまひひもいりあはる
御るもハ一宿とれむいすい
とあう言ぬ種一もを給り茅の窟
給あ魚一床とハ下竹うらうを
窟とま甲よハあう言ぬ人さ
すらうハまうら給あハ甲ま
と甲まハ文町ヤて座せ

婦を是れ飛脚と業としてたゞはせしむるは
一回一思にふりては、何れすし、是れをかくかく
ゆて彼とては、何れく人の治らんとす、是れをかく
こゝして、何れす、たゞぬ山の鳥より、心ありぬ、
阿きさう、はけの、志さふ、約を、と、あひ、定めて、彼
も、うら、白ひ、ま、言の、後、ま、付て、約、と、い、ひ、つ、後、と
先、不、立、て、ま、う、ゆ、急、彼、も、と、う、坂、を、疾、も、阿、も、ま、只、天
ま、こ、う、ゆ、り、と、ま、り、ゆ、り、ま、う、す、ゆ、は、阿、も、み、て、後、ひ
ゆ、り、も、う、と、是、後、の、寸、是、骨、れ、と、ま、を、杖、と、う、そ、
体、じ、あ、う、と、志、て、登、る、ゆ、り、後、も、骨、れ、て、怨、も、彼、も、い、
す、て、体、び、る、あ、の、り、れ、と、い、ひ、り、り、新、も、と、す、程、さ、

後、心、る、ま、れ、と、体、も、骨、多、く、あ、ぬ、世、飛、脚、と、い、ひ、
た、ま、可、より、は、骨、へ、踏、進、る、骨、の、宰、候、す、ま、一、語、の、骨、の、
阿、き、と、直、り、ま、骨、折、よ、ま、り、て、は、め、結、古、結、ま、骨、折、り、は、骨、
折、阿、き、と、ゆ、り、り、と、ま、と、物、結、ま、骨、折、骨、折、り、は、骨、
う、ま、と、ひ、り、の、行、り、後、も、心、り、九、曲、の、坂、路、端、く
婦、を、登、り、つ、ま、う、世、に、僕、は、平、化、ま、て、兼、座、一、新、を、骨、に
骨、を、も、ま、と、骨、に、通、れ、は、骨、物、も、あ、つ、と、引、ま、て、阿、も、
ま、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、
小、骨、の、骨、骨、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、

子の権現よりいさむく前のさき廣く杉並あり東の御
方眼より有り眺望おくさまよりす己れあり東家
西より新橋の上より綾文の山船夕見さうしと
初めて世より江戸とてさうしと 嶺節す世木船あり
の御東方口の出さき色をさうしと世家流るまじ
しうねいふまゝ一石沈んて中へ今既し言を
是も言をされて今言宿信給まへやと云まじ
色世利程より候まをさうしと言下の村はあ合言
行きいふしけひうしとせぬひて志うしとて
と家より来る家の家と後七と云言を新み給まじ

せと先中へとと一被あて止の舟中へまじと
先は志屋つとや志のまゝ者せぬと子是非ありと
つとやうよりあしととを甲のみらるまじと
は黄巻よりぬ向ひのまの珠の志を人言を来り
うけてた巻にさうしと向ひのまもた一巻を
あ巻巻ひたうまやむまじと志はつと云志れ
東つまは巻よりとて目のまも人とする
家より一巻せんと彼是たのまもとらめ
是非ありと誠へ信り心せらるまじと
まじとぬまじとと彼まの宿たのまじと

藤七毒屋のりとのあるより一とせハ彼所ヤとてあや
ふくこれハ所詮若う處上と多く一と約ハ民家のり
ホのあるよりれと珍なりれとさりハお目ハさしう者
同マてきらりりれと絶て約先より細りて奴路
例ハ家のりハは是も同やあふくしとさありあ
ハ今かう一と云またうのさるる方と約ハ小溝とて丸
目しとせり清んハかしくさうたうのすハ山とて梅より
く方とておの喜すもハああると約ハ方とて何
海踏遠くうとせも能るきあそるぬ一とと三解
るぬ一とと一と一物のおぬハ今同さる方とさうさ
治

何きの方と約つきと同ハ者ハ方よつきて上の方と評
目す一とと一と板挑灯とぬ中一ゆりとう一漸同
赤七のぬとくとうつとさう一あ赤ハ廣一者
と云なるの書出く世裡ハ田舎り多をさるる者
らせぬなるるそさう一ハ自由ととす一ととて
吾じ能るきと世の志一其能きこととれうとれ
一而れくと字種ととて能る井れえと一ととと
極のえにようてせ心あらはさうととと入寸十二
るの女の帯と婦と一子供に人斗りぬと人ありと
家の版とくきと葉と一の羽ハ風の物替るく

秩父峠之圖

峠本屋

江戸の方



女房を人として互のつる互の細細く出く骨あり
らんは僅少人として三百又片珠幾幾のわきうく
立働くるまきハあつにまひも宜くまひやれり
つきと流るる是ハあま人あすあるまはるに別て
初のものも似すあつにす扱はせのあまこ粉多
乾芋堀より田をあらゆる細く耕て麦前かこ
ふあつ糸川織織る杯を集メてあつ世積くは
ふハ二万までそこにあつり扱て菜ハ芋大根葱は度
の乃中ナラも一日も芋倉より日なりあつり
又中倉するあつり扱て焼飯のそと扱毎持り扱

相くあつりあつの後をく山乃あつりあつり
りあつりあつりあつりあつりあつりあつり
能も扱物の生立るるを凡扱又の地を文り細多
菌不自申るまき扱て丹織てあつりあつり田畑に
入多し粉多く造るるまき扱とあつりあつりあつり
こもく素と扱

氏種造は白芋ヶ富村或光の店とて種取村は
扱々細斗りの山甲に扱治藤名扱に扱と扱
社古御ヶ前寺と曹洞宗古田町清泉寺末竟源
と同宗横瀬村法長寺末

春日と氣者と出かしく約ハ川の場は約世川末を荒川は
流合はけりう水中に巨る多く物くの形とるせう
えらう山川をきいひいひうし流さあ一多の波はう
しう白浪うらてめう約またふへさうし
横瀬村とま甲ま細山同れ細なるてをく極る
るといふに言の山本の葉さあしよ色し
新色たるんやうと目とよるさうし
ふりうハ取てんますく流し取らも包落葉
世掃を多し世掃りしうえさう横生航とありて黄
印杖又のつし樹とそ名産とすす世度の縁約樹

構船世之におも多うととあひ集に樹ハ今ひす
し世阿うも世遊村のいさう実のうて外はあ
えし草も能もをまそ抱るう一あうのわが
皆さうひ約しあう細さ谷合とりよ武甲山約茶
し同をくても但し山の斤例を全神え寸漸うて
山後と出らるまこまハ横瀬の民家ありらあ家出
くよう世あまておた山しせやうてうらる所は細人
家さう世村うあうて依し扇とむうけたん極
おさうあ山くうた漏うちも砂利多く水田多
武甲山前ふこめ

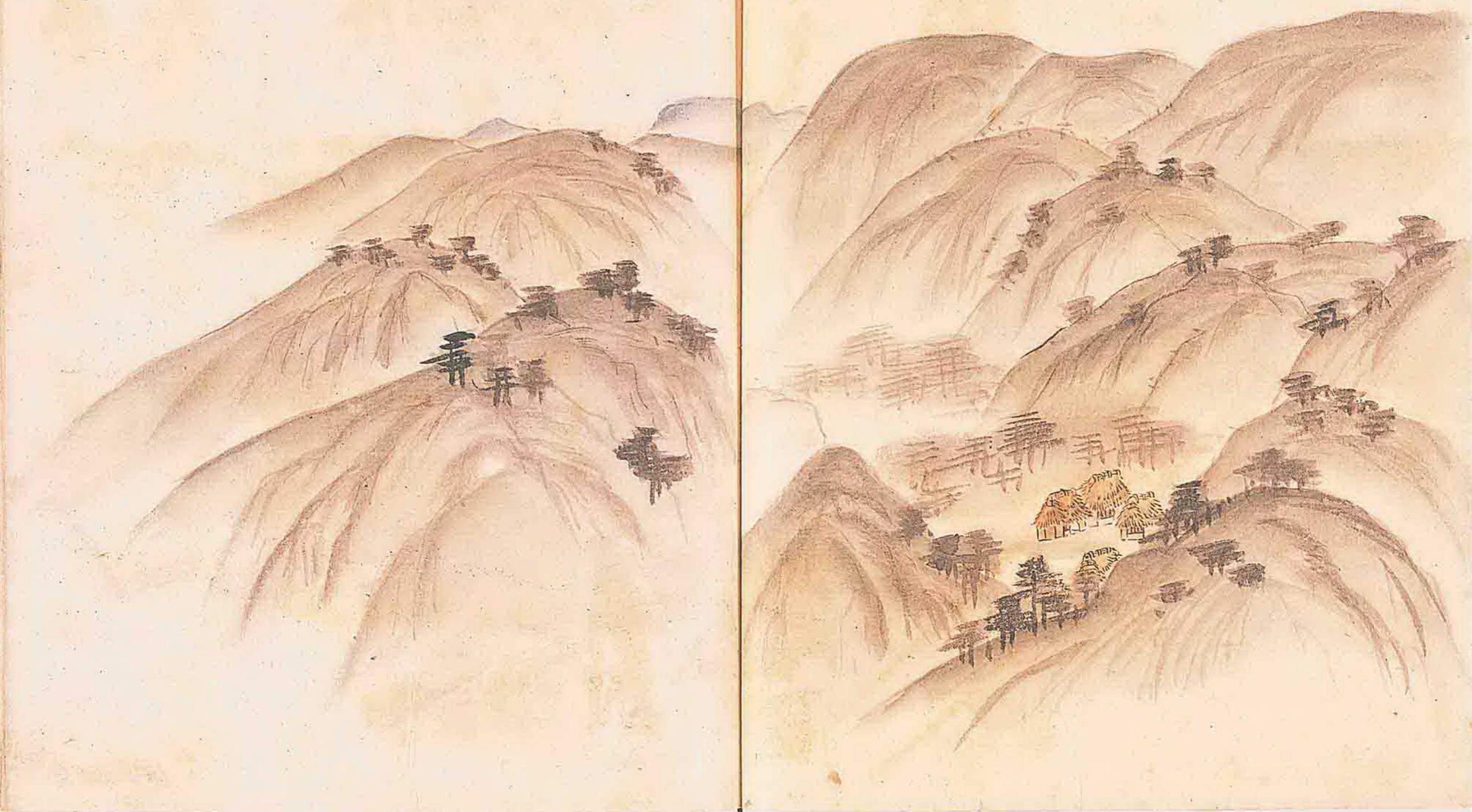
武彦造曰横瀬村武光宅之水田畑等亦山甲の平
地之産門村中と流る神社を龍王権現能那社
と通竜王社然又武甲山より流る武甲山を流るも
り或る藤川を過るとして其の裏に光り寺を築る不
通当附ら山の山より流る一表に社を山へ并し言
屋氏に社を龍王と云ふ又流るより流る龍王祠に月
の神ありて流流るると山の中後又幕迄と
いふも又流るの流る龍王祠を武彦と云
ゆふ事と云はゆふ人員の及ふ所又と流る山
上代を祖父と云ふ中を祖父と云ふ今武

甲山と云はれり古く言ふ今も妻帯山一と云はれ
る貞享三年の徳和の記に
武彦演る流る武甲山昔は御嶽といひてと云

山といふは山のものことと云ふ一の山をサハキと云
苗山と云ふは右流る流る龍王山を流る中
折は社病と云ふは内へ遠郷祖神と云ふは
十日十八日と云ふ又十月十日十八日と云ふ
伊勢の河も古く流る流るより流る流る
の碑ありしり

秩父通志曰武甲山に登ると八島と云ふ處をに

蘆ヶ窪の村之圖



また東へ同し一武甲山の日中武甲の東夷征伐の
為りしゆひ一河新ゆひしと云今物見山と稱す
と非之物見の事と稱父の神社と稱すも北之族
父の神社と日中武甲と稱すとも多しと云延喜式も
族父の神社とす此山より古名武甲河をその後祭
りし物を又飯と盛さるることさ 夕日新の取らぬ山
ありし日中武甲の物新しやゆひしと云武甲山
ゆふ暮武甲山と云ふる事ありしと云是皆日中武
甲の意也

武甲山作と云族父の山と云ふ大和郡他は曾

志の思ひ立ちしやゆひしと云武甲の事ゆひし
山と稱す是也ゆひしの事ゆひし武甲山といふ事
一武甲山一ゆひしと云ふ事と云甲の字と云
又武甲の武具神理一説と云今も甲の字
甲田の心もすゆひしやゆひし武甲山を武甲
山の徳と云ふ事一武甲の西南を武甲川と界と云東は
武甲川と云ふ事一武甲と武甲の意と云
武甲の武具神理を武甲武具
と云ふ事武甲氏の莊園と云ふ事
武甲の地名あり多し那と云武甲の山入りし
武甲山と云古武甲山と云武甲山小納戸使

父の嶽は河すす武光山はサ
中河山よは義経の
此之社中流を例に續と古人光山
といは續とつ
るこそ流に武別後又那橋
瀬白後又山合を主と
し合をらるるめて修治志
るるへ今古は流の貞
享年乃のりるもとも知れ

武義事より武光山は武光山の
持たるる人として
つとるへ一城ふれ武別後
後がとつとるるへ一
郷より武武前中後がハ前
又鬼の著せり名山
圓備ふ武光山と記した
きハ世もつるるへと
をさるるへ大物方の流
と物流らるる時武光の
い

河よりと武光山はサ
中河山よは義経の
事へといはまへともさ
るるへこれ流のり

北村武甲山の林麻ヤ
てこりよす河後よ
てめは事と
もぬ山の時と大
美河のちより
をらると云
江戸と
武別河より武甲山
もを山すへといひ
りゆ武甲
再より再よ
事日ぬ山す
らるるへと云
武光山
田而流山杯のや
く武光山はサ
中河山よは義経の
らん武光山はサ
中河山よは義経の
乃より武光山はサ
中河山よは義経の
村小なるへ
謂ら根古
能 城を
也 新田
公 寺
窟
上
地

武甲山



八番丸所

秩父通志曰城山北条
安房守氏邦の城跡也秩
父の押三鉢形の城まより
家臣を交代ニ此城を守
らせし所ト云
武藏鑑ニ元正年中浅
見伊賀守北城住すと云

二子山

城山

横瀬の
白内

横瀬の
内



牛小原手、ぬあこすして、後父那の内巻く結と織と
業とす。三角井色と本物とす。後父結とせよぬと結
といふは、指右屋とら出らる想名とあり。又梅山
世ふりより、阿す、梅山の葉の村々、つくまても根右屋
ととる、少るく、板八巻の札不又集るむ、平比す
多御考も小原るのり

杖又海化、皇後國傳と云

此年片多をて死し、
元中より、あ年うね

一重して死す、又是より
男して名を傳と出

八巻、玉名山、石等

伊豆に石高
南白

平手ハ十面観音

五像、山長
七す

恵心僧那の、此地を、保院

之、そのし、九う、ら、行の、指、土、の、之、分、ひ、と、母、地、に

お新、之、その、ハ、別、院、は、今、も、う、て、新、夕、ね、し、も、ら、る
の、と、今、真、院、と、晚、の、判、勢、也、一、時、の、名、ある、と
其、故、礼、師、奇

只、昔、の、め、海、の、時、ハ、新、暮、る、

来、う、む、り、あ、ん、こ、を、始、こ、る、

新、の、大、い、れ、ハ、略、して、あ、る、を、く、色、く、い、あ、ま、と

ス、れ、れ、る、

是、よう、九、巻、ハ、十、五、町、十、六、万、五、八、巻、の、所、考、の、た、も、か
裏、道、現、出、る、小、川、紫、鴉、と、架、ま、さ、り、板、屋、あ、り、
山、の、り、う、乃、之、九、巻、集、る、下、院、明、念、と、し、境、内、と、せ、は

御堂も又少く御堂のたりの方よりある。第の御堂
御堂も人取き是と御持をて何して御堂のこ

と云ふ御堂も平地 御堂ハ又御堂御堂
寺のゆかりあり

圓通傳云九条明星山智寺 山堂上りあり
四向面白 本堂

本堂ハ又高橋観音 五條四又
八寸三分 約基菩薩御堂

寺守本堂と建久二年明智御所將來して

此所に寺と建久二年明智御所將來して

御中橋御氏の長加藤何果と云南土世本堂と

信一かの御代持山と云西御堂と云う御堂

に世甲に疾疫大に就く民家病外志敷也

ら此是御堂と持山へ移せり。一宗ありてとて村長

よりよ御堂御堂に告ぐ何年元の地へ移せり

御堂御堂へ移せり。一宗ありてとて村長

告て云四代と良位は南と南那の鬼門固り

家渡神代除く御堂と無御堂と此代に移

ら由り四代ハありく渡神の御堂と云う御堂

元此代へ移す。一と一第民惑御堂と今の道場

御堂をこれハ民の疾疫御堂と云ひ又明星山と号

す。一と一御堂の御堂御堂の甲に云御堂と云う御堂

目音と云御堂い。一御堂をこれハ女と云う御堂

すむり世ちの林の葉と拾ひ母と書ふ或付るも
のゆく草あ成拾ふ所へ巻傍来て母の眼病と信是
とえつこの文成唱へしと毎推清澤光惠日破能
園の一句とさうく云お悔して母はけ文と教へ母は
又おそのあは通糸よと世文と備次頼明るんとす
円陣より星そら飛来て母の顔と照し一は眼忽
ち又冥あう甲人いふよと字或歌す成るもその
衆感と信抑しと山と明星山と號するといふ

乃礼師弁

めらうまてそそ名を問ハ明智守心は日ハ雲と云

是らう七妻ハ世町神村中成道了河系ハりて板こ
しとら日しりて七妻年供ハ美ハ是を午能能
まてす文庫裏あとも唐一箱より成るをた
庭より遊ぬて傍傍お交り箱こましり

園通傳々七妻書昔山法本也 田中道行

徳島ハ伝長 柳乃十面觀音 三像受 幼基菩薩 一尺三寸

他人五十二代朱荳院の承平二〇少田那本邦
の々花菖山の畑と河桑の倉の惣と云具
長居るの威とりて強者高甲中人母りぬ
とも名をくしとるハ相馬将門ハ孫

送るゝ与カヤ一而天女二年友軍のたゞ追討せられ
 山神のすゝたけり山神隠き指さしうさき病と為
 く死せらるゝ一徳世異傳とおして南下の山神
 無礼と名隠き指さるゝ世のさあてそを祭とせ
 所の松たけは埋さうゝて世も憶うるゝて反彼あり
 色をさうゝ一古民久り集る彼との妻も亦追ま
 てらるゝあ指も破脚せもまは約束もあゝ事件の
 傍松のしよらうのあゝらうゝ一城若々妻も大に怒さな
 ざるまの昔伝と新伝と一そのあらうの農家ま
 とよせすゝ母傳も書物とも一回農家の牛牯と

うのり地あり一は女房と書ありや一と女とありあ
 や一妻も又件の牛と書一まの傳は伝てぬす
 恋しく纏束すあゝ日は牛傳の口はあゝり忽傳と初伝
 して人のしよらうのあゝらうゝ一色も世もまのあらう果
 生おのあゝ送るゝ傳てゝゝのあゝらうゝと書ひ
 り一世あゝ生色はあゝらゝるゝとわらう母もた
 比丘尼とありけ地とやす親言又二部業障滅除と
 たのしよらうゝといひ終つて忽ち死す母子別傳と
 判發して二の念佛とありて生生の素懐とあり
 しやるゝまらうけ地と牛伝と名付ると名付と名付

六道成りてのめづる心あり

かゝる世成りてと牛成

六波羅に可種通卷二可三十一法長とてして廣く及遠
ゆくをこころ角は高人の成りう六波羅に集結して
けふと解るべしけふと推して物成あるまじき事
集結すは思ふハ泊りやも別當と七八町奥
上とてふありしや

園海傳に云六普白陽山登雲寺佛堂にあり南白 本堂

観音の基菩薩也立像也昔よりありし事

庵とあるにちりしうそ地ハ山海とありし事

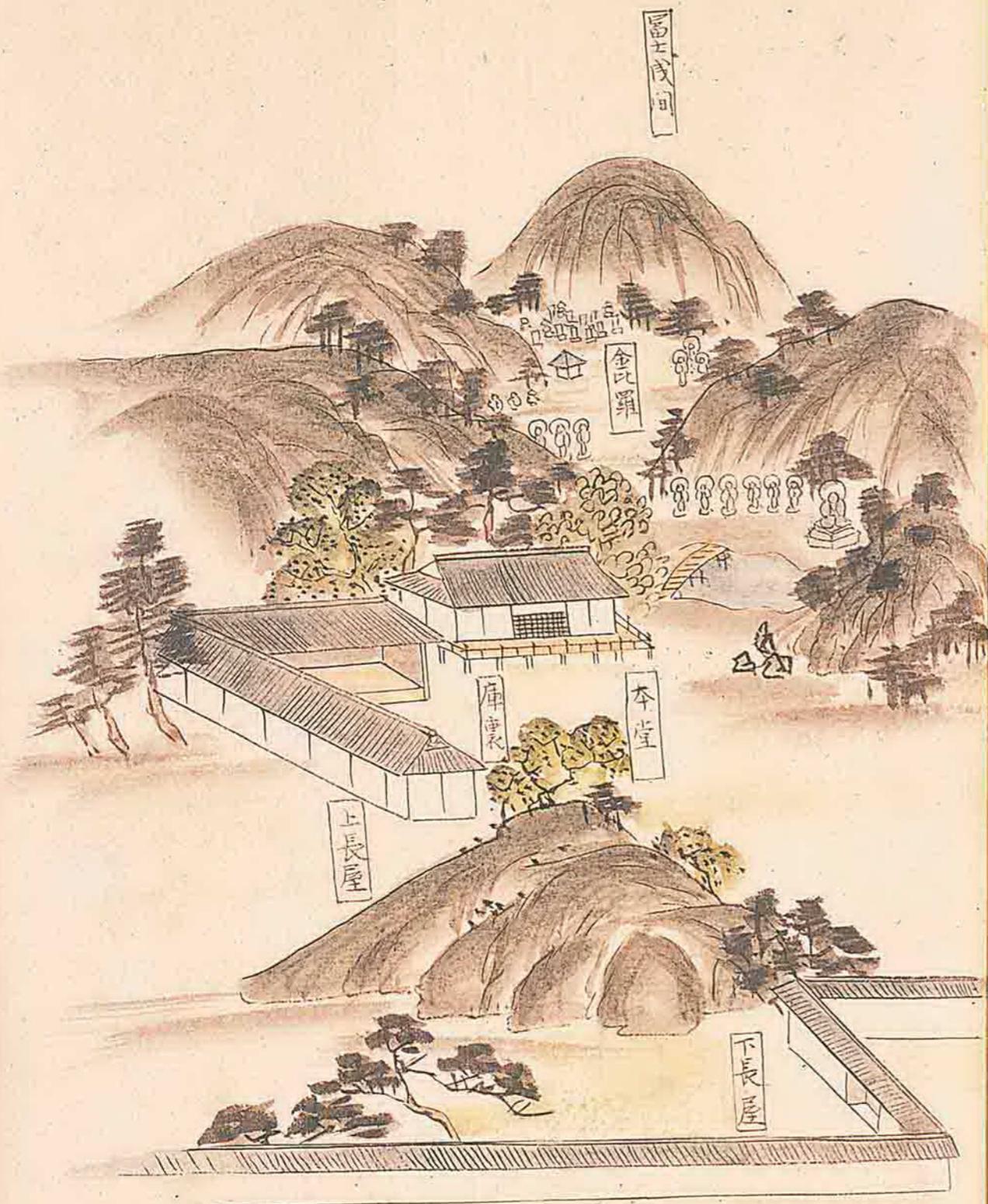
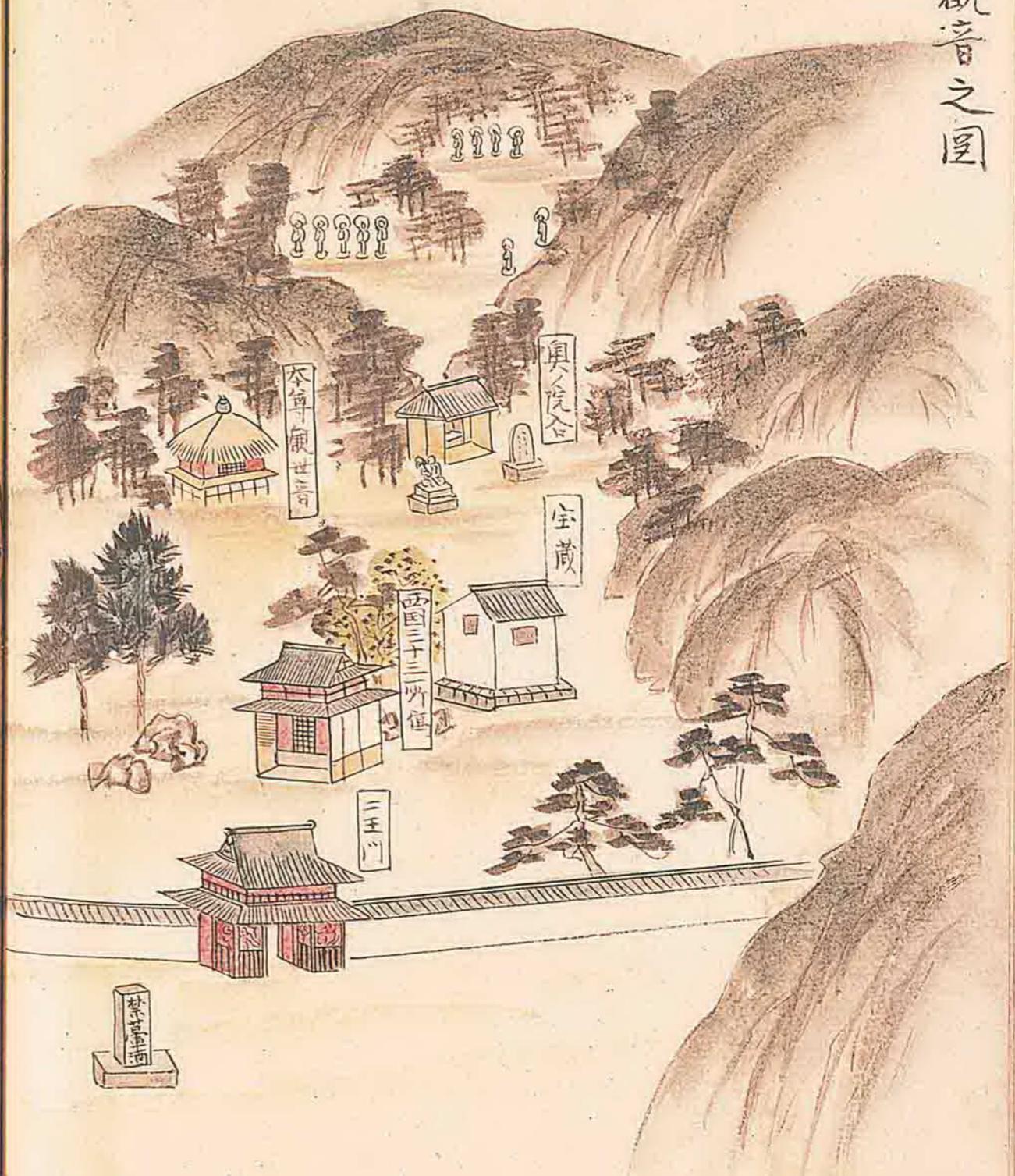
集結の人もまじりてその縁密地は縁密と出
て事六波羅同様のす式とてしるれども一首の
お奇くと極す

その始り凡成むまじきの事

右傾の世成りてとありし事

うへ極すありしに遍縁密は奇も多しこの縁の
とるも是大それた感ありと歌のこのこと
庭前の花のしるもてえ色ハお奇とある縁丹
とゆらうとてお奇のうへも小奇と違ふ縁像と
あはす是は奇の奇の剣

四番觀音之圖



是よりあるところ十一可一可と云ふと其丁種と云
田のろと引て少一のろた今のすらふ甲し
山にあり山何の地は阿多又又まつまのりありす
武蔵野作又支那と云まう山のううく武蔵野作
武蔵野作作未ハ かくれぬくうれ甲うんれ
取と二種一色の田は画くうわいあこようてうこれ
ても何んかー横瀬川在見ありて又昔の種す

園通傳云あま小川山後神寺 田寺なる田 本寺準

泥親言 産像山長 意是え大伴忠光当寺造立此

大且及ハ母和れ長孫八ともあり海く大伴力

高祖と作一彫刻の尊像と云ふ小安寺に造極と
ありうつと堂宇中堂む又母とくも備地と生を
うらとくも和弁のたよとの地とこぬ一孫余
く母堂に通夜一よすり孫八と和弁の聖殿と
孫の鶴の心と其を重徳を片畠山の化人と神言の
和弁と傳す孫八鶴をして別以堂と神歌と
あげくそ後世を濁く教境又其は信濃國一
そ人の老女ありてそ人の娘として甲孫とつる
てそと海く其世娘の聖長となのそ種と
に或とき世娘とくとも志老す其の老女た

好まざるあきらましくよりしむれとあきしむるに
仕るひく親世者に侍て佛智の力成りて無ひ始
よりあつと穢よそひして母甲を来りてに日言
て若くくさあともあまきハせひあく神者し
ろく後ろよこもてよまもの阿う記よふえれハ光
明のやととて大照の言言現しぬひ母子
天物の言ひふかり甲志しと若くもたろりあふ
となのむる切るも二十八那元に命してあふ
く母ふああとして出衆ハ忽ち矢やわあうとあ
甲人ホ来り集あうけりしとあかて最果のあしとあ

所巻奥よりして云親を後一ぬ是とらあまのあ
とあ返の親言と号次た礼跡

父母姉めらみも後きこりた者

大慈人慈徳ちるひ姉きとのり

四巻(十二)可十六間村路に四巻て最末と云あまて心こ
え親世言のまあひくあハ是とら後ろよこあう言蘇
山と云門あに泊屋とあつて出衆し来りてろろ
二五門を入てわりの舞聲造りの者ら西園寺
取の言像とあましこそ本巻に侍て茶とんひて
たろま下焼飯飯倉せんと後打らみされハ位僧と出く

能くゆつて給へりゆても十年ハ南無年日不ありす開
帳あり南無年日開帳して今日別格取事ハ又強版ら
色ハ兼すすとして多クは整て寄し打出芋豆豆腐の煮
しるあるはゆり給空しくれハ志き又及す住傳之と
あは急ぎ給りて奥の院よりありてハ山々雲の種山
と寫して之等の院佛乃る像あり小像ハ案内す下
と阿色ハ云ハ兼結す下と少く謝物あるは奥の院に
行山さるるさるすといふと有上登りたることありさ
やくよめくうりりて亦に多くハ佛或ハ羅漢の像
神社ともありてありてありてありてありてありてあり

是れ南無年日開帳して今日別格取事ハ又強版ら
像も丹土如新ありてありてありてありてありてあり
持遊ハの種りてありてありてありてありてありてあり
甲是れ也なれば是れをせしめんとすハ小像今ありて
と是れ甲く先立は是れは是れは是れは是れは是れは是れ
て元の初日海は是れは是れは是れは是れは是れは是れ
よアも山申して夜より二十箇程といふ位持遊ハは
門と出花細りてて或ハ村の中とありて又も流れをせ
は山山の種小は是れは是れは是れは是れは是れは是れ
ある祝者奉ハる坂の上よてありてありてありてありてあり

亦よりて業しのみ体じ世ありて呪礼の始祖十之
以新と穿りて其十三人に能神大権現通観法平花王権
現高魔大王性宣上人徳道上人物之菩薩首光り
也東木之世中の僧位時代前後追言考ふあり

海志云是より(廿四丁二十丁)世守の用祖大徳
祥師の公量り鬼丸と云ふ山を楽乃すより名録あり

ちよひと保子とよむる皆門ハ少くともあり

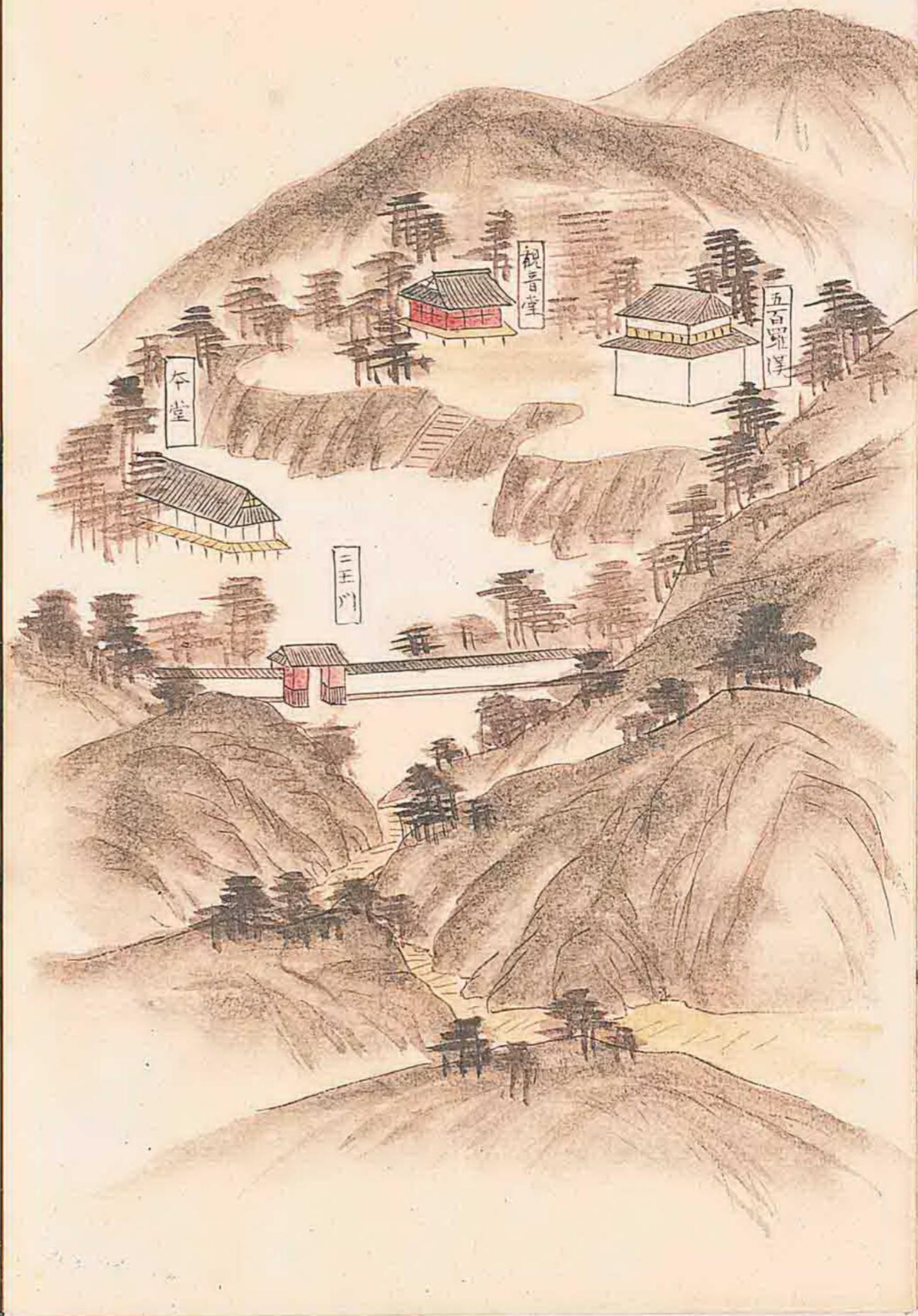
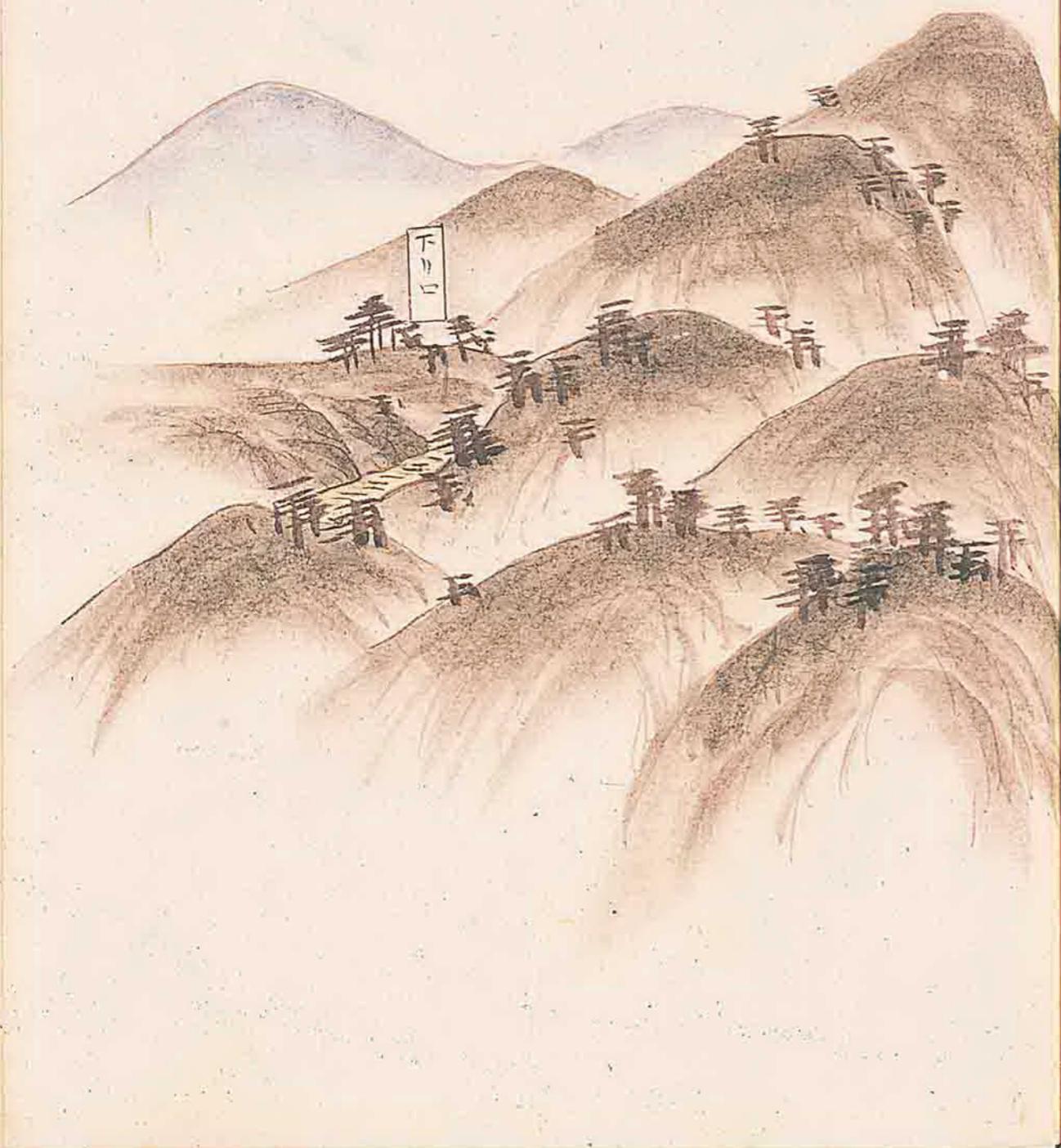
園通傳云分二妻大相山志福寺 日本又右四回 本寺 南白

聖観音 五像四本 二人女子 乃其菩薩也尚ち其用基と云

大相祥師と云ふあり通傳云一人と世地の世の若

よつたりたりとぬみ住りて猶も業学の誤りす甲人
主徳と云ふ大相の若と列よとる(右)大相と云祥師
鈴子通傳は困寂と云ふありてを鬼丸と云ふ鬼窟
に今人間と通傳云其人のを誤り教束て師の洞中小女
垂りて其親音と相傳一日師言ていふ世にことあり
を誤る云ふ其相の鬼に世ありてに業久く住す師の徳
と作るに其に諸像して鬼意の身と授せんと欲する云
師阿られんて破地獄の文并皈戒と授く鬼女悦んて云
亦ハは昔世甲此農家の妻ありて一 嫉妬ありて
鬼乃に呪し取り今師の教尔佛の悲観り後て世後

二番大観世音圖



鬼畜の身とく相つゝくろの南無はけ杖とまうへん
人間の相よりす且又師法家かきや法ををき候へ
出へ善く衣食に結縁するゝのりへとい
ひ終てりき清くくせぬ是よりく一字の
書と建立へ仏を正勝るゝのりへ切はす
とく世地うるす親世喜り縁の正しく中その形
割へ一字代草創へゆふを塔二百余のと終今
永延二年性空上人播別書字山とゆふを氏
のりへ讀誦之味にへさひりり候てそりひと
息くぬひへ式と書きまのりへ集てよへん書てん

何とて讀誦息くぬる世より東又武義園杖
父那とるり彼地佛法永へ息くぬるへ大徳彼
地佛舎護法のり先のめく妙典と讀誦へぬる
是親者の四度へと東力とさして死よりぬ上人
とり天耳通といぬひへぬるの物とありぬひて
別大元と命へて妙理に万劫と讀誦へぬる
寛弘四年三月十ら上人寂く陳へて中子初通宣
に書余へて云汝我滅後東玉杖父より親者の具
物約基地化縁とほとせへ地と息勝せむへん
と是より初通は丘後又より大息勝去氏と教

ル一室宇や再建一妙曲に万劫徳備の供養とけい塚
とちりきし後世示す信てこれとに万劫と名く此礼
海奇

るうや一巻るぬのうぬこれ
りすわに万劫ろてしる

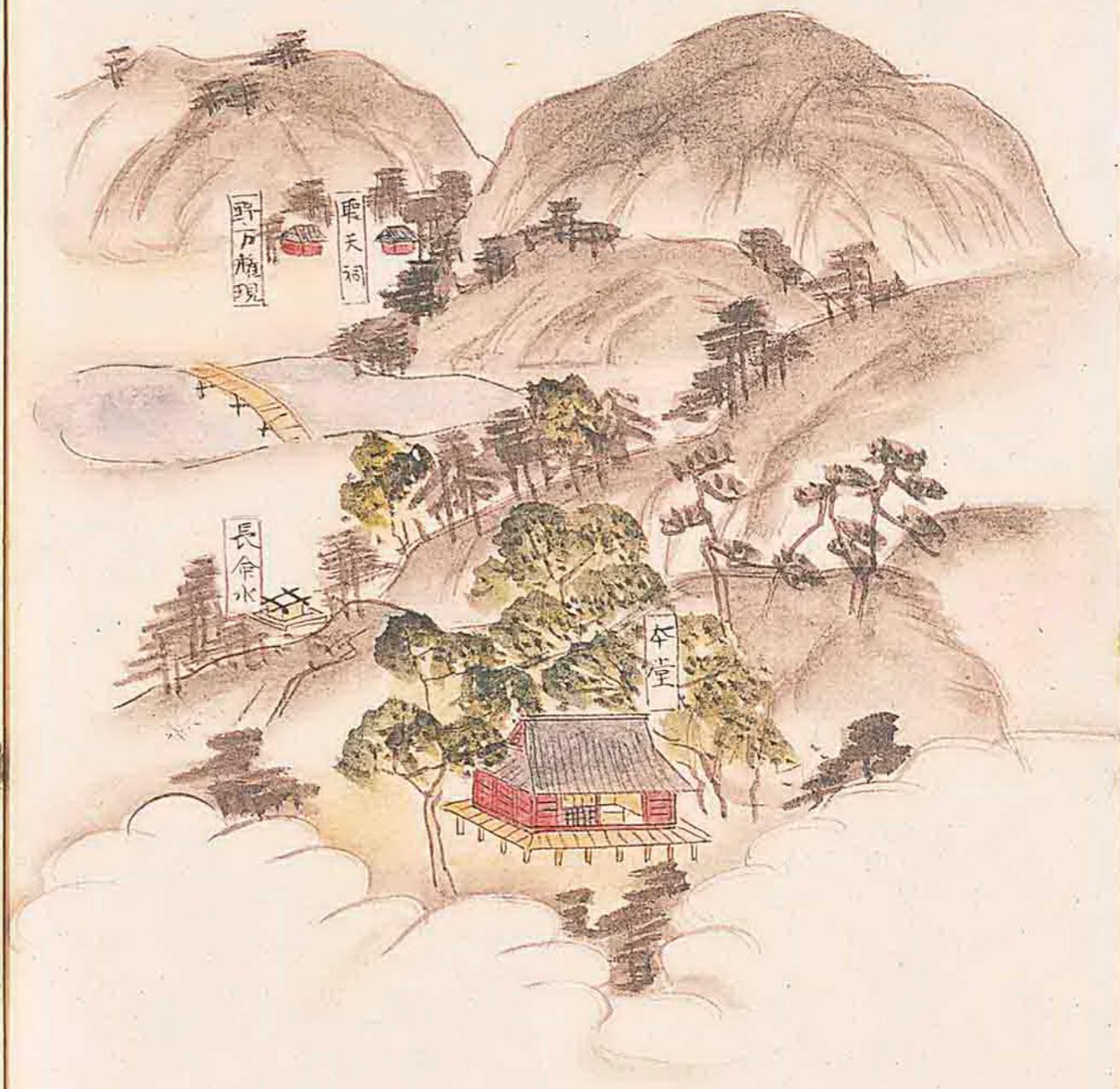
是よりごまごま丸亦にみ町ごまのかしごまはに万劫の
谷川にたて切居る一板橋と架橋と音前よごま
とく親世音系結一ふた田下まとう休も一日ごとえ
るよ音よぬ一庭よ指とごま店をむまひりて
布にふたやごまにゆら者として定たるは行

百姓のあとなのこめつとめつとと善ふにふのよ油
よこまうてきぬ東をりてうをりてごまごま
はつらきうとカ田或は神ハ麓あるのちけりはるれ
さるもゆるとごまぬをまよむひの地ちこよひ若
くせぬつすやとごまのあまするひいとおをれり新
すくさぬるまといりせんとりなごままハごます携
しものもは促ある糸物ごまごまごまごまごまの割
ごまごまごまごまごまごまごまごまごまごま
のけ調ごまごまごまごまごまごまごまごまごま
ごまごまごまごまごまごまごまごまごまごまごま

そとをさうのえよりしてつとをせと併し海うらなをた
いし廣く海のすいふにほれと物化すは本撰町六丁目
よりありて所せり而ん病者よりさし出でて所す物
はハのひ十六七ころあり新化と今の利まぬもの
若し男と三人乃至五人ありて而化兼ふりて兼ふ
と考て物さうす家ぶハを本撰町の瑞者よりとを
き物さすめとふとふとふと傳り若し所のえと
云傳りていふて物さうの東海す一と二ハとをさ
用りて物さす物の口とめよりとれハは物さす物
るより病との重なり物さすといふ物さす物さす

きりといふ満より今とてさうと物さすの件より平外と物
さすは是ハ化の瑞者とるよりとていふと物さす
若しとてさうと物さすといふハ古昔の物さすといふ
物さすの久く焼て喰ふと物のさすの味さうと
是物さすの味さうと物さすといふと味さうといふ
すは物さすの味さうと物さすといふと味さうといふ
物さすの味さうと物さすといふと味さうといふ
いふと物さすといふと物さすといふと味さうといふ
は物さすの味さうと物さすといふと味さうといふ
すよといふと物さすといふと物さすといふと味さうといふ

三番岩本觀音堂

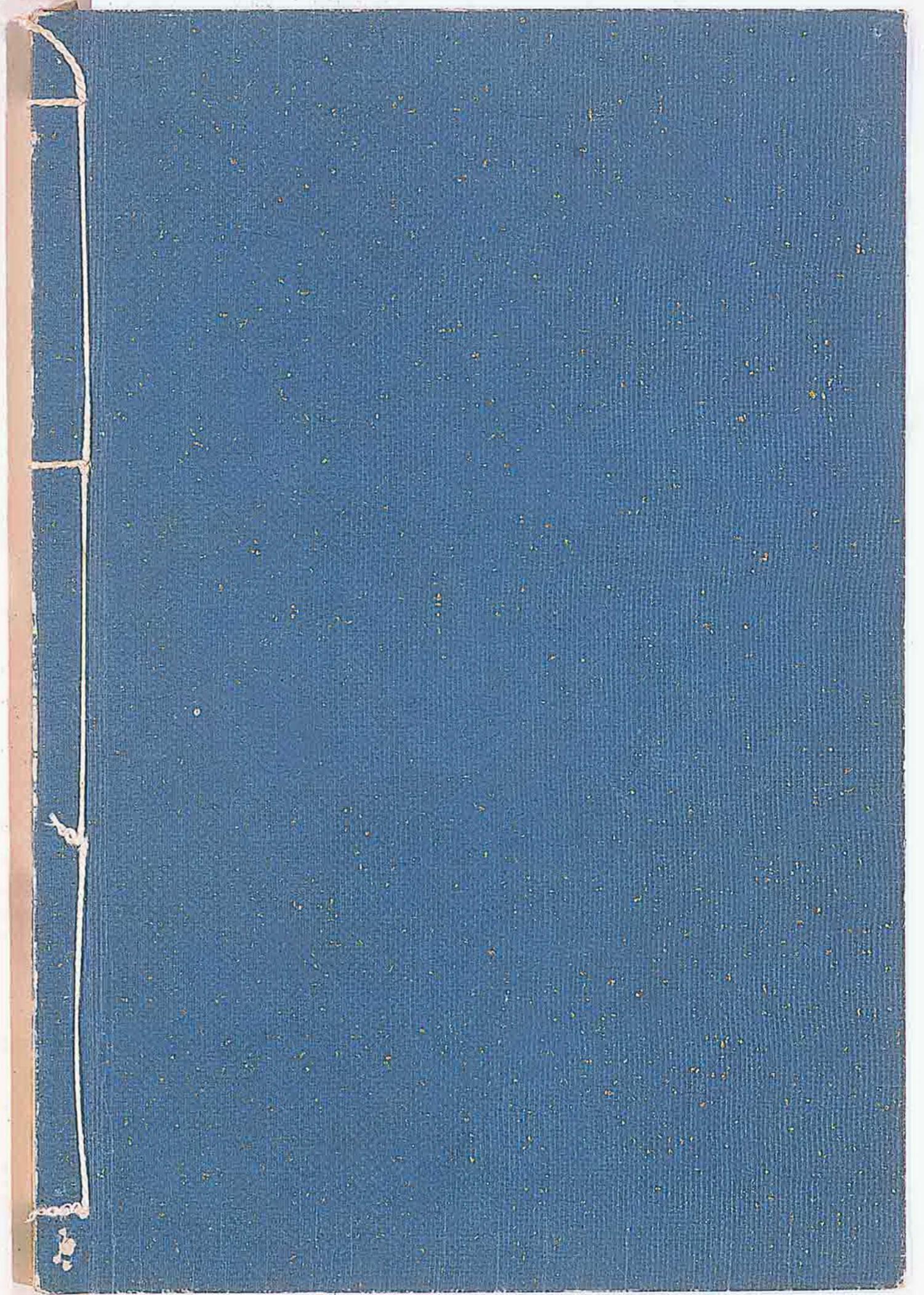


あゝこの江戸は小住せめてはたあゝ世河うらに事せぬわて
くくまゝせぬふく一喜の以る言多き以て村里も又た
る言ひのまゝ母孫人ともあはれなハ情めへともか
たさくはれも世祖をたもてやまき小村甲も又の
孫者くこそせぬふく一ゆりもたも可又ゆりも
いそひ定らする孫者くはぬをり一十内長言取又
るもの言ふはせぬふく一産受るもそのつ
らゆりもたもたも一絶する者せぬ
孫者くも人をもつて他の家へもつて便
己きるも陳屋(用)のりも一者たは陳屋と
孫屋と
孫屋と

陳屋と文町とらたは
あはれは多山田村と
すあゝらのおの色もゆり陳屋(出)と
すま止者たゆりも一
るすま止者たゆりも一
はるすま止者たゆりも一
はるすま止者たゆりも一
はるすま止者たゆりも一
はるすま止者たゆりも一

後義順并記卷之二

年



秩父名所誌
三

L294
9

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5



6705

後父順祥記卷之三



我花鑑云山田村苗持所居と云山甲之苗里と云
乃田少一畑多一小河川東と流る小河川は麓川の
東之苗持社丹生社武々系西月之と流る白山嶽

山光明寺 福宗洞家 金昌寺同宗上末秀

林寺同宗同末新福寺同宗同末常泉寺同宗同末

之光院同宗廣之末末光寺海部金仙寺末字矢

有之々お方の風呂湯なり 世に風呂湯のより有る

通志云之番忌本山の之と命あり各前之井之
子持る御事の傳り多不極る之山上より之又忌平

の流とつるは是より小八所斗りより西化さけけり
り流とつるは是より小八所斗りより西化さけけり
せり流とつるは是より小八所斗りより西化さけけり
と名もと親香をせり世より一り余り山入り
也けり流とつるは是より小八所斗りより西化さけけり
扱武親造とて丹生社と留ふ可
と古人の言を丹生とて

武親造云丹生社私南法皇系神傳ハ丹生の祖也其命ハ名譽
命と合ふ神を賜成元慶元年丹治武行南化より向奉法皇也
世の信性丹の言中山の丹生は娘ト言訓違り不弁ト佛法の縁起アリ
多合すハ弟ト云

通志云松山より小社を惣八の言を古山とて丹生は
娘のお慶より宣化帝及王子上殖業多治古王親配
~~~~丹の畫の左也より古一社ハ氏神と稱く家  
る神佛ハ是より一可神より光の言とて此系平地  
と山田といふ者持の店といふ丹黨山田八布政成  
の位より政放後信ハ天正年中と稱又那あり  
城山田伊勢守祖ハ西幕府大西軍祖伊州長孫也  
國通傳云古山者東山也南有聖觀音西寺也二天守  
仍基菩薩地也一は比より山の方より地村と云古に  
あ到す何色のこも人の建てるるを云

地出困りて俗流と云ふはけをさへりて又去近村と云  
ある是南村也性古より世受の基菩薩彫刻の十五  
の像とありせり今の礼南村より二所往へてそと東院  
祈す所あり愛宕山大権現と御情す又例は忘座を伺  
中より地蔵尊とありてすまふと命水と號ま  
す不極る子持をまといつて奇をあらはすものなる  
の事此一日公人なるぬれ十人竹十五巻り通  
弊一備座の之甲人の心耳とすすす朽る雲中の  
四重ののりり敷ふの征夫と射りうと御光のあて  
世地と思ふす甲人のくき集るる事件のぬれ記す

く夫の化相ありあをいなり一異像衆然と存す依  
し四重と引後へおむるも夫の地と去近の地也  
も山阿らう記すけり唐つまひるる一不極るを眼  
病と祈すに心す路あり又けるは向く祈すは能眼  
と除く所あり名くお持るるある人いれをハそ  
意うら又も命あるとるらうと南院の住僧新病  
と愛せしときあるの昔よりんく庭前の泉成  
以て某代某とて名くぬれ記す

世奇事と田圃とてこの山にお向ひるあるありて其  
此のよといまはしとて是より十巻の事門前の細るを

有し方より約九拾九町余あり約く小川より又より坂の  
武甲山前よりより十町入りに横尾なる階とのりて二五  
町中を親せきよりぬらく此寺も横尾村の内之西より十  
町ありて六ヶ寺ありと横尾村の内

圓通傳、云乎十町松山大意

此寺古  
日向寺

本寺聖観音  
三尊

古の年塔婆は三代目と記しる御方のいなり  
とくはともありんうさきと云ふことあり 真山傳記は南の

長何系として高らるるしり傳記を世のしき御記  
りよる傳と信来く地所は御寺と建あるすは後教百  
年と雖く之傳壞せりは内應二の東碓礮原再興  
日ひ今南山宗祖とす南山宗差の指しり傳し然今も

長尾傳しきとて碓のてゆきり 以礼傳奇

傳すすにたのてけりけり大慈寺

むぬちやりの昔よかひるるなり

通志に云山子にむけありて長尾伝説のたつぬり  
て所の思とらうつに布田の尾出長そ尺余幅寺余  
ことつめ梅りりは古物とあて下向りぬらるる  
地所をいふ長尾傳に云丹治長尾南地より坂  
上系す其子二所時絶り子九所時今横尾に傳  
墓ありて長尾傳しきとて古伝あり出せりむけ長尾  
傳し地所あり

口と出て土敷ハ八巻と引是より七町十六方と云土敷より  
二十町敷よりハ此より縁付すかへ引て田畑なるふひしあ  
我甲又連り山之間より是より小敷に立りて長き石の  
引と引きしを越境出て是よりかへりて家一軒作り割  
小右松をかくるる取と中作りと云件の前地は方に長サ  
廿方幅十間ありて空地をとり右角やまをとりぬき是し  
是より又引上りは安の地と云ふると毎巻ふんは是より  
しきと云きすして引す土敷と水取と云  
大妻の川のお名に土敷ハ  
十九巻と云ふも是なり  
入口仁王門をかく建り右ハ親をかくりハ元之大師あり  
少由と天台宗と云り

園通僧にそ土敷南に山あり山名三ツ 右土敷十町親を

右縁ハ長  
二丈寸中

引基菩薩の化性右引基位と云り別引と

定の玉方と建り右引と世地と引して寂室と云

系地あり成神庵の寄き成体のゆり夕巻の備備の

之相風より不ぬかにゆりひて足の中よりなるあり

寄地の上よりなる叢の上十町の聖堂密立の山

多の天章前後に園境ハ大素と強備ハ引基

感歌ハ甲卒に写し割む聖堂密立の教り剛

割の縁と照しひ影向の寄神ハ引きなるあり

別小堂と建り世縁とありす後影向の叢今

現に南山村郷頂より又南に現より山代にあり候  
海師ハ智徳秀て聖王とて南山に二王門と建立之  
と昔法すはるす凡物小なりとも造立するは  
り多しハ中をた使言と祈るす新舊に形像金剛  
神代從(東て)海に宿ひ家とて法すくす金剛  
神令一と舊とて引きよくとて是ま  
凡物忽らるるをて物不造立の切とてあぬけり此  
知る也 凡物神奇り

罪とらも諸もといふさう  
あさ日せさうて夕日さう

門と出づ者も約々約々十二番(十町十巴町とらつと  
熊木村と云ふ強何の社も次不坂村十二番合は兼  
屋取つてはるる物つあ徳山つと 中を親世音樂の  
凡ハ後の山つと

園通傳とて中十二仏道山神坂古 聖七名并 中子お親

吾 多摩川 聖徳太子は他往昔甲斐王とて高倉を

毎に西より海に來て交易す一白例のやう物物  
三六十甲種とりし山越す西ひるは 海をさへ  
しきもいとす東より山越に出入く物物  
とらるひとらて山越中はまゝ人たてて高倉押

伏せ助けおきたる人日暮後の害るる丁とて切害之  
とす商人の心も親善は存すと習ふるもあはるる外れ  
くちりちの中も先的くやと緘の眼と射山緘をるま  
刀成るけつる又余の緘の年ハ商人の唱ふ常名のを  
百あ人の急にすべりけれハ是もさう成けりぬれ  
きくちりくとして此その言やんとせし緘ハ念お機  
して整切持て至世とある商人古くは向し村世  
成ゆらさくもの成存せらるるなりけし商人の信は  
小太子彫刻の親世者れ小寺あり親善は存すと道  
る再興の志とす世と人の急は信は存心あり

てい山陰小埋をさるる者らよとんら命助を後文  
けらりなりと成地ハ親善は存の異地るまはとら  
くあるなり山緘よりいハ山陰よりハかりに  
先に整切一緘も出合ぬおきに力と合をけ地はあ重  
くその後を控て大異なりり村合は存神現しぬ  
下重容とこさくさく成り山出との地の急よと  
重甲よその後今の地とすく道筋とす又山出の跡  
々昔より人のと山出よあに成こくする多ありり  
年程そ幼あもたぬすく寸と身信も自らたぬと  
の式とき山出より成れり内保より物ありり

都志身にけりしきりのいづれ故存

今とあひしき好む世の道

くゆくゆするこまは久年三況たりてゆに  
心とまをせしとつれ世の争ひありて礼佛の

十二番の八町廿八町をくみ及こ取や張のしとて大奇  
此書に本を觀世音

象通傳云十二番張下山慈眼る

川卷七  
四西南白 中書觀世音

五條山  
九寸

約基菩薩出地当山八日中或その下ありて

夕の阿位信張の玉木いよとまこひまゝとまは日張  
くくはつて成新上神と仰りおひとす少田不四張と

まさせりひいりぬのしとひいとひして甲六け

の下とよそありて一と南とよそ一と創せり古

くりて代佛にたけりてわちたに音集をこし曼陀

羅華とゆす或は又大菩薩歌御儀歌の

りたるりしハ甲人世代と檀の下とも云言創り

音集はよひとま妙音をさうとまこくくく

ゆくみまはける宿忌はよたにやうとす古く音集

のあひとる一者さう成とるあみ開闢の一日集

てある成るして日ける像にく約基の彫

刻に世地を縁は像るを八代邦とるあり

是のことより於てそ姿は是す是は守り基なる一苗  
守持檀皇太孫のこの能成と一族廣きなるよりそ  
一族の中に伊弉中孫とよ更に嫁しつる女よりしりし  
大光とせり万死せし一生をゆりしり南山の果はは  
りそ事 近世板外や一室惣係とよ草紙に  
昭礼傳

御のこゝの蓮持幕始りあり  
うき世世の茶とこけのト

門と出そなむり約ハ太孫何のすに出世山田そ  
中節一も言初又奪ののこ入金ありしそ結て

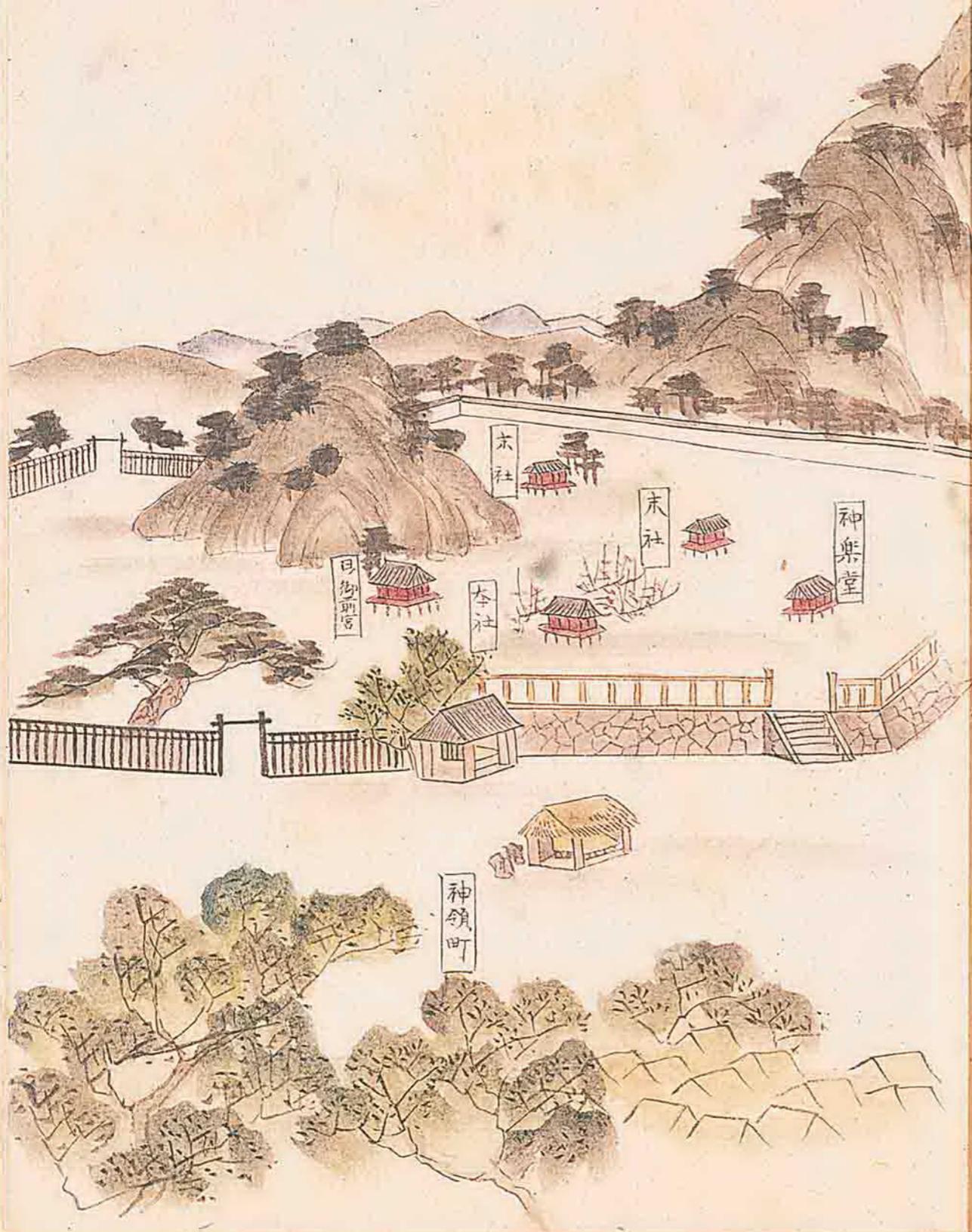
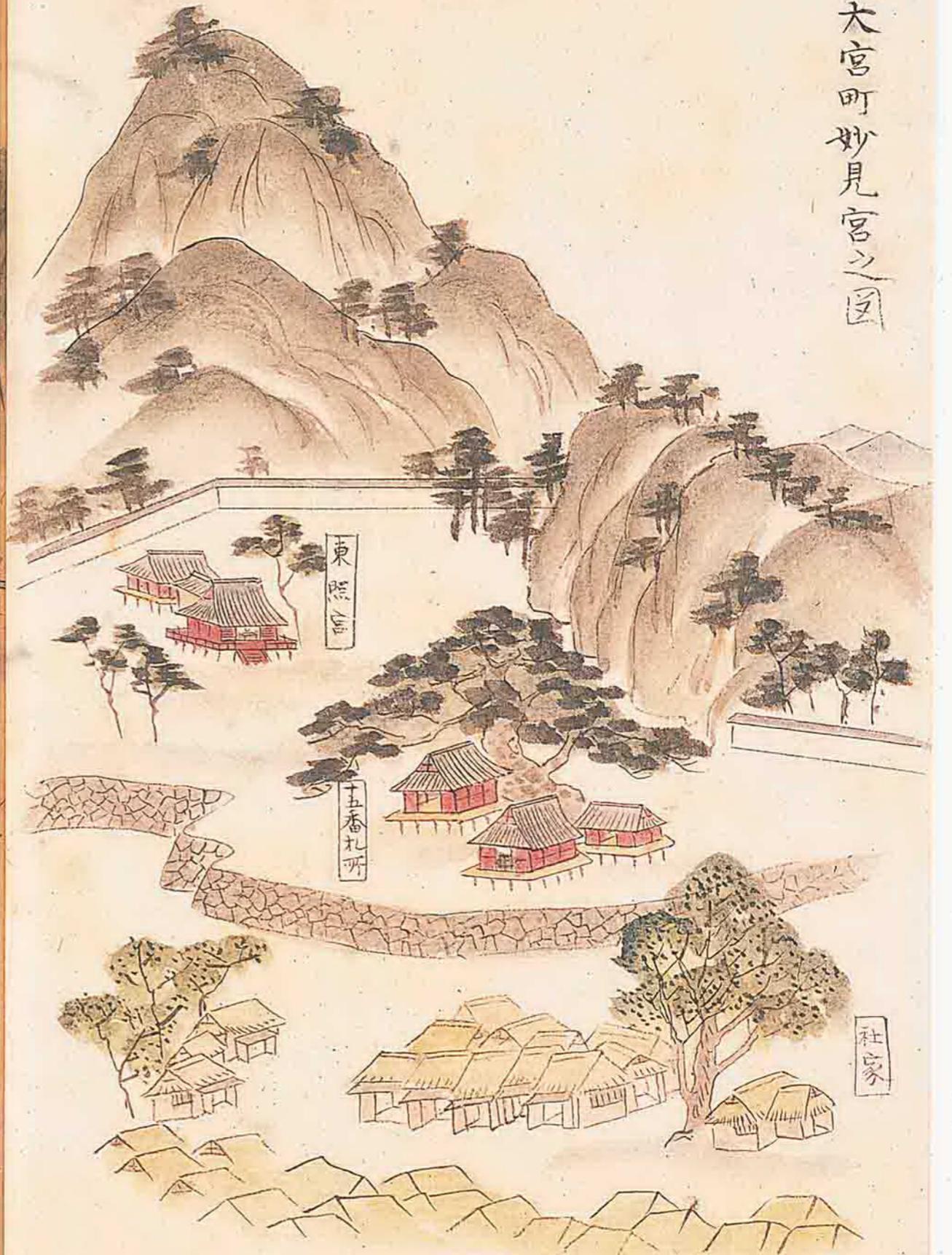
是るるを孫すよ山田持世万代のこゝに上るる一  
と教了きいぬ尋ぬまうて来り後より甲子年(出  
考とあるはこの方又来りしよよ一やとせし口とこりか  
くハ札取れおとそ言ハ一者ありしとハハの所ハ  
考よりとせしと初一は一始り是とハ札取れ  
やのしよ十に十六十七十八十九世六々守ハ太孫の内を  
年代に廿六歳と廿六歳やそハ荒川向ふと山七歳ハ  
川のこゝるれハゆ新集信のんむ使つしととと山路ハ  
是首もつとせぬらなるきハ若何やう又若何とハ廿に歳ハ  
て止めりしとこゝるしと結後つゆりも使つしとと

かゝる扱もや午時あまは田屋倉五下として猪折出りも  
えねとらあなをいあるまもころりさうれい合良す焼豆腐  
又芋の煮る味もあつた有る物紙の重くしりかき  
世田町市田より高人多く猪折はまきこりよ押賣るも  
多しきいこのくは節は結と多く煮買す家の新花  
よりまじりあていくあもあまう直ぐの村より白猪折出  
くらのるも猪折もまじりし出せもあまの猪折とあまの  
らよ汁ねは又いをもあまは猪折ててすあま買多々も猪  
折やまていりともい江戸下するあまも買多々のあま  
室つとさうい二百あまは猪折又まこあまは猪折るも猪折と

猪折をいりこまていりあ物の猪はいりさうりもいりて百  
世猪とりく一疋あまはいり方とあまの式と二百又とあま  
さか、あまうさうりあまは、あま上のあまといりあまうりけ可  
の中と十四あまはあまのあま、十四あまはあまといりあま  
あまは猪折とりてあまはあまをいりすあまのあまはあまといり  
らめくう、あまはあまをいりすあまはあまといりあまはあま  
志ひりさうりていりあまはあまをいりあまといりあま

通志を田舎破極しつひより田舎を是る記  
世田町本像をば御社の内にお置すあまといりあま  
す又あま町の小名にうり心と今あまを猪折は御社

大宮町妙見宮之圖



と八丈の文と子<sup>四條平</sup>地と。東郷の今文と同。此礼と書  
御行へ礼とす納に此礼と書。志報るものハ書。我  
の外町坊又此礼と納むる我の内ハ書。我  
園海傳云十口長長岳山今書。臨<sup>聖之回音</sup>南白。ある  
聖親言<sup>聖中出取</sup>弘法大師の世。佛性正法大師  
徳判とめ。つひひ書。地と心。仏像と彫刻。或  
岩彫るところ。て世々。妙申。或四ヶ所。今文の地  
十女。ひひ又天。帝。つて曰。吾々。彼の小角。地。身  
のら。書。彫。化。る。う。約。何。命。して。さ。う。後。自。大。徳。の  
こ。う。な。り。う。り。方。一。一。汝。亦。遠。命。と。告。て。世。世。と。以。て

親自らの聖像を彫刻しと云。一と書。堂。山。地。と。云。  
久。あ。と。ま。そ。う。と。侍。形。極。の。あ。と。う。と。系。を。大。神。力。と。し。  
ゆ。今。乃。及。て。堂。中。に。親。言。の。容。現。し。ぬ。い。ふ。小。角。約。  
法。と。せ。る。う。り。久。一。と。云。小。角。の。約。局。と。湯。と。云。う。現。す。と。  
大。神。聖。市。の。聖。容。と。お。一。刀。三。礼。と。彫。刻。ゆ。あ。是。と。う。  
永。く。此。地。と。す。う。り。す。南。山。を。代。々。修。造。す。の。約。を。後。藏。と。  
十。女。書。十。町。の中。と。通。う。約。凡。に。十。女。と。し。十。女。之。い。大。文。  
法。を。妙。え。か。の。そ。う。な。あ。者。う。方。う。う。と。書。物。と。云。

園通 傳と云十女書母榮山藏後寺<sup>此寺にて</sup>南白 南寺十面  
親世言<sup>五條山也</sup> 一尺三寸云 定新作者江別は渡原云流印

死するも多し定船浦見と何をも丹心といひて  
観音と彫部より人民よこいせしは早よむとゆた  
かく病ふもいしは命せり現るるるる十面観音  
と能観病と作らるの拍をくし観ありおるる巻造  
大塚帝の元鹿流ゆけしるの秘法と傳ふハ  
皆天死とやぬるもいし仁壽殿の田中と十面  
の像ありし定珍抄よ見えしを以て聖田の高人観  
音のありて湯尾峠とぬるるにいとありしあり  
りの十余人ありし物傳すとあまもいしとては別  
の人様と見えしとては定船の十面の像

造りしはいつし像にすしとて是のすし  
とぬととと人曰ふは観音と東ありしとてハ  
日ましくいすしとては高人ありしとて定  
船とて定船名高人の像高人有るしとては地  
智者のありしは尋問するしは毎葉敷とては  
てありしとて是の觀音にすしとてはしとては  
地ありし甲人の像甲人といふしとてはありし  
像を伝ふしとて御書と建立しては地とてありし  
世所又たは池柳の若山ありしとてありしとては  
地名の中よりたは池のとてありしとてありし

うたの形を化しくおるとねし上平をし御神を  
以礼詠奇

ふしうみおるそはあはれ御後と

ちりりあう折きたり

まじり妙えおるう臨う臨日廣くお殿印社をよ  
お造りうり

武野燧の妙え寺海記の妙えの神社を神  
思道命様又あはれおのあうそ宗神を皇  
如川宇よあう系ゆて皇の清宮日中勝幸  
地ありああそ号す云孝徳と皇白鳳に奉

大己貴命とあ地う宗あう後少斗の死く  
妙えと留りうえ相と皇如相にの辺境う相と  
出す妙とき秩又あれと神を祠とあ唱とあれ  
未社二十二夜も重忠え指も当社と神を奉志  
神を園田氏社家に人松塚氏持代氏文部氏家の  
並氏志あうと二月と八月廿五日十月と神典と  
出して毎行と細中とひく相を御う当群  
集れ人奉礼するよ押るいとあ相立御の念す当  
日那中年の家奥う個う日中を奉持又神社を代  
の社く

又云一説より小田原小田原の町と云ふ所と夏州之  
と小田原と云社と云信守の社に大小の組織出来  
小田原よりして信守の社と云ふ令して礼しむ。市  
大文の所信守よりして信守と云社佛道  
ハ州に菩薩陰功ありてハ市上を主神とし  
子の社と信守よりして小田原一物異社あり

氏神神作の公妙尼を境内神とし持て古人始  
す社と云は延喜式に載る所信守二社より信守社  
社と云は信守の社又云是命と云國造市紀と云は其の  
町と云大田と云社と云は信守の社と云社社地

よりして妙尼の地信守よりして妙尼の地ハ妙尼と云  
る所又信守の地と云は是四地之を云く。又信守  
よりして妙尼の地ハ妙尼と云は妙尼と云  
ハ大社と云は信守社ハ小社と云は信守と云は  
妙尼と云は妙尼の地ハ信守の地ハ信守と云は  
信守の地ハ信守の地ハ信守の地ハ信守と云は  
甲州の地ハ信守の地ハ信守の地ハ信守と云は  
信守の地ハ信守の地ハ信守の地ハ信守と云は  
町又市と云は信守の地ハ信守の地ハ信守と云は  
信守の地ハ信守の地ハ信守の地ハ信守と云は

小高とある引取んとて畑の中とてやみ桃打と  
もつて是に部集十町に方白魚の如く小高を並  
神輿と引取ありて前とておとすと信し神の  
いそが社地と引取す但願慶と出るとり入波の世の  
るるる

通志云武人より総領千葉郡の系村の妙見と務文  
郡（勅使といふ）の系村をも妙見のまゝとて大  
宗町といふ千葉女の妙見と大社とて山本平比呂  
の系村の紋祿して九曜星十曜星と是引月と星と  
千葉女鼻祖とも妙見とも信仰として子孫又

重弘信仰は偽く造管せりを口性するあり天正の  
を系村の神と務文大宮の神ととて並と継合  
しと云

板鏡の末社ありとめくくころに宮のあに大なるありと  
ん多一と信は系村の妙見とありぬと又此を系村の  
一り余りも信しと大なるありとて其のふけりし納め  
しと云いりさよ大なるありとて大なるありとすく  
まて是らりすくきと云いりさよ大なるありとすく  
とありすしと信しと云いりさよ大なるありとすく  
此を女は是らり十六妻とて同ハ表門出てそ

二十六妻と十六妻凡八町亦らとヤシクと云む女又云命  
とら年々ヤシクと同江戸の事と云ふ事なるこそ此を以  
まゝ子代見守ニ之とも深なるはゆらそ人々其に親戚  
養とやん四屋家の前を結高の買とす縁をとり出  
すまゝと云はれ其親使うもたしと云ふ事なる  
らま侍もこゝの侍の事なるなりと云ふ事なる  
度めりし一侍も其後宅へ後親をとりすはうと云ふ  
ものなりしと云ふ事なるて世の親の事と云ふ事なる  
めそまゝにゆらわしと云ふ事なるさうの親の事と云ふ  
るものとすものなりしと云ふ事なるすしと云ふ事なる

して三割き十六妻に事あると申村と云ふ事親世者

國通傳、云十六妻世帯山福光守山福光守 山福南白中その事

子親者立像山長 九人約基菩薩山代其るは代代那小

としく佛の若きものて世代よりなりと云ふ事

年曆志をす中云礼のいれ役子のせりりる事

信の事獲せしる事と云ふ事一と云はれ其事山も地より

つしと云ふ事ぬやて世帯乃信侶は國比丘と云ふ事

と云ふ事なる念佛のつと云ふ事と云ふ事善行其の

ひよと云ふ事なる事其の事其の事心よりけ念ふ事

と云ふ事一ける事其の事其の事其の事其の事

久そ此苦そ人の優劣ありしう罪惡よりく心鼻  
獄と地して却と修く後漸く界より生えしを信所  
地すめ法滅とくもひしう心あはくもくして若  
痛堪うし師何とそあみ修く形はけ若と助け  
よけ不後子親善とあむをくし修く向くあ  
冥福と祈うてくしうを消ゆくもあふは立件  
るすとも修く告幾修るく苗ち之親善をとり  
後くしるる者再命して念佛修修せしとそ火  
礼修修

西光寺哲と人よるをけ

修のすしうはにしとくせり

十七妻の七回四回と撰あるを

圓通傳の云十七妻定梅内室と云本卷十回親善

五條山本 性古一尺十寸士生は良門とて東に双あり英雄

もろそ性別修して慈心ありあは梅を仰定え

と云云頻り陳めて止良門修定えと政修

修修と没細す定えちつとるをもて苗西の知

善阿をこめて束した室くありて修あり定え

せひるくそ道の臨命とあふ修く常と修あり

そも妻を途の修くや一般りあつ修ぬ幾修あり

定え

又病ま少し〜りりりニニ女のののと物一見も又こるる  
くりぬる〜り空照とるる沙門は見とりるを育  
て〜成者ま乃ひてはとるる傳く空照見と  
るるあひ冥冥又はあるをまとる〜り宿世極  
ま良門田稱又出て世見と空照り乃の傳ま立  
ると又て世見のお白凡人あす沙門あるるま  
と云何り空照を性名と同し也と壬生の良門  
云空照手と打て云世見と君年は〜く私る  
忠直とそせ〜林定元らあらうと具に始終とら  
キら良門大の威一感取らうを胸林深大仰

えと名有空照を生育の功と考ら〜何ま〜の物と  
よりまとら〜〜りす〜と云出家の身るらハ姓  
室を平び取又り〜す私〜と君の慈心と親〜民  
子濟意とら〜〜りぬりゆら孫を久持基しひを  
ら〜といま〜〜ら良門滅〜〜是〜ら心と改  
め自ら法飛徑と金字不書寫〜定元を婦  
ら菩現の乃波塚は田宮路の甲に一字と連て  
定元ら姓名とら〜〜定林と號す親世者は  
良像と後子仏の者とい〜あるす世俗林林  
と云燃礼傳奇

何れと云ふ定めしむる  
くさうく何處の 爰そとめり

十八番近十町二十町十八番なる石細道

園通傳に三十八番神門世に記考考のこを別面

南寺ハ徳右神社大英の事十六番出たの相

柳り枝古老の云傳ふ

門のくは傳る神門の辨り神と安之

中江村甲人と集ま神と安之

湯立成るせ神統

く祭ハ利益源神と安之

刻し永く觀者の靈地神と安之

唯一のめく神と安之

神門り神と安之

世分の心ハ六刻と六觀者神と安之

相似刻千子ハ觀刻神と安之

刻十面と各字刻神と安之

母六刻の弟神と安之

十八番より十九番神と安之

そり出又向ふの寸神と安之

たう入る者神と安之

宗の大寺なり 内系平 又注をたらのす小坂東園と云ふを  
五十九番と云ふ大畑と云ふ山を志の上にも廿番八所等  
間と云

園通傳小云十九番飛瀧山竜石寺 御堂之言 本寺 南向

千手観音 在像四七 一尺三寸 弘法大師由化世地由那空の

靈境新宮浦出村 懸石と云はれり是の境内

亦ありしりり秘い文小若古のけくれとゆふす法

に奉申弘法大師と共ふり百色帝の由秘と祈り

せり大師揚柳観音と彫刻し本寺とて

祈りしりりとありし是れとゆふり秘しりり

夫を傳へて是れとて後く大師急と彫刻して

いりりハ御廻らちちりお念すゆふり本寺前

よ告て曰ふ今併度す可也地きて彼処(即ち後彼

地)とて再會す可と東の宮に飛云の石を後御

東とて通函しけりしりり小寺の本寺とてね

夕ハ自ら彫刻の聖容に大師堂とあり傳小

いりりこの月日はあな御中やと可いりハ昔曰

此地は海を削る紋龍を甲とて害するもの多

く之民これとて毒龍徳能の能と観音の力

小つとてハつとて異ハ日者に称念す

る取満す。りろつを世あまはり甲人奇異也  
とる。老とつらあ直しむに紋然をて約也と  
らすと破る大師感者して象彫刻あると  
後子と巾に早せしに大師動して初らすら象  
師と神象荒と小竜天と圓也とろろ邪東  
まらけ地の怒る部つあはきて大新をて記して  
陸奥七別小南そくく流礼師奇

と地とろこくを社の新るる

くろろ人まら初生りれり

或信書ハ坂とろつて流川の形(出河系と約りテ

新川の向わとあてきる巖壁を画くけぶあのも  
流藍謀の布は白く傾欲あてんや小流きあ中  
さあくの形とる大にりまのり色出るのめいあ  
もあまののあは向の巻はも思山は観者の由巻  
そのまのあのもつあき持てましちあすまは  
回船の者初積とまとあすの(来)まともらあ  
のし声とろきろこあやひあさうまのと打た  
てあまのあはまのしとろ川系のもはあ  
火舟の具中もあまに香積とまともらとろ日つ  
といやまのちあまの端者に五海のあすまを

海よりまも余るは換りる若大海すすしは海流やまも川  
の面之海一たきとるは温き流きて中くらの銀叶は  
つきまよるは寸漸あそりるすみ居るは志るは是  
海より出るはくく流すまも十二海はくく

白川新宗云荒川 二千七百尺 あり武州後文郡古

大洲村山中より流き出東側を河玉首錦那小

梅村近川流は辰武甲十二町余南側は河國を

流那橋場町と川流は十二里十八町相流ま

川下海入

漸くそまもくち出るはくくすす二十町流はくく

新の志はくく号入

園通傳に云二十町 四町 あり 五條 聖観音 二尺二寸 聖徳

太子池 堂のちよ建ちし平塔築あり内四 苗奇八合

七十二代白河の浪よりくく建ちくく一壘場之地

る不應仁の以より苗那と人皆離散佛園も破

却ちもまもるの志のよたませやありて人の志

乃よれ観音とやわくく今もたよまは此所より

任男女の志はくく可もまもと物タクくくすまの志

はくくか或付いとくくわくく荒川あり張るはくく



五百一十 四百五十 四百一十 三百七十

渡守家



山のとり  
廿一番の  
道あり

三十番  
観世音

老瓦の中より  
佛像あり



瓶を一河の如く破く物多しあること也。一河の如く破  
 子集て小あり押さへてたれす。後世に世傳  
 するも世傳ありあると申。親に給ふに  
 人と同じ色に染むるのよふに傳ふる母も  
 ある。この後世の世傳者としてす。此の書は  
 登り申すをよみて。一河の如く破く物多しある  
 親世あるあり。一河の如く破く物多しある。後世に世傳者  
 とも。小供あり。一河の如く破く物多しある。後世に世傳者  
 建立し。此の如く世傳に乳水場と云ふ。此の如く  
 而も。人給る多し。世傳に。一河の如く破く物多しある。乳母

一河の如く破く物多しあること也。一河の如く破  
 子集て小あり押さへてたれす。後世に世傳  
 するも世傳ありあると申。親に給ふに  
 人と同じ色に染むるのよふに傳ふる母も  
 ある。この後世の世傳者としてす。此の書は  
 登り申すをよみて。一河の如く破く物多しある  
 親世あるあり。一河の如く破く物多しある。後世に世傳者  
 とも。小供あり。一河の如く破く物多しある。後世に世傳者  
 建立し。此の如く世傳に乳水場と云ふ。此の如く  
 而も。人給る多し。世傳に。一河の如く破く物多しある。乳母

と香ふを乳唇忽ちうし法乳の通る泉のくくを  
人のあまゆり世るとして神を主人とて大に感神のや  
乳母とるのくくとして是をう甲人けりや乳水場云  
今も乳のき婦人けりやと後してきりくくその郡中  
にけりるや一乳水場

昔のしるあてともし中をき思ひのこ

このしるあもけりしけりや

御書の書言にのりて亦きまふはは六町十石山  
とのりてくくすかきまふはは六町十石山尾村の内  
こ世とけり尾を若殿とて通志にけりくく定り

若殿とてくくす民あはれくわ

武蔵道平守尾村のりき民教信す田のくく

くく山甲の東の荒川に古傳のりき神社を信信社

ち流と善つと海田村音日宗音日宗音日宗

一兼院私を志言音日宗音日宗音日宗

の内田氏の祖を神取し信建はし神女秘別の信

内田金剛二所途大カありや孫角を傳又大カあり

牛とよび又大食し平生ハ人並に身とくくす付

ハ懸石れやく懐くす付々平人のか一元録の以

系通傳云守世一妻夫の文とくく要光山親書中書

高 亦る聖觀音の基菩薩の毘沙門山六元八  
幡の社地之昔の基礎ありて其ていふ所の  
日くまらんハ社の垣る樹の陰小島ありて神殿  
の扉扉く著して以て白楸の冠といひて其の  
一より矣たるまゝに東へ東へ約基と稱して  
と八幡乃使るり大徳と内殿を稱すといふ物之  
くなるり多とて約基曰ふと茅屋茂林の下  
小所のまゝに内殿を合て意を以てして眠飛  
るを内神殿といひて是れ其の聖なる所と  
て神体現しぬいて約基を拓ていふ今大

徳の島に樹心代々の社本あり所枝とあり観世音  
造りけし山にありて悪魔と稱する民ありて見  
る是れ一夫一室より一又是れ西南武甲山に  
り荒塚神結成す大徳は昔より其の  
一我社の神とて拂へて告げて八重を  
乃中にありて思ひぬ約基の觀音と彫刻  
息附の山にありて是れ神中の本體集りて  
乃やく當るりありて是れ其の神體  
教ておそりてありて其の男女位より  
孤重なりありて是れ其の編みなりて

て邪神とてしつと退拂ふの夫の落るるや其の事を  
付しとて此礼誼奇

阿のすうりわら夫ら考うまをてとて

能ひ一法に阿らるるを

廿二箇之六町に弓矢の事の山し小桑をらと是とらと  
くふよりと廿二箇と帝子の考とと

象通借と云廿二箇西陽山桑福寺内考考 本考重親

吾立像四去一尺寸弘法大師此地苗山人皇万千天淳和

万皇の西院西院御中三品式部卿伊予親王事は陸

ちりま河系ちりり出く飢死也此書提と新らぬえ

り為通昭信正世地の成るる命り一第創せしひえ八世

皇よありて礼意山と號しと千後延壽すのひ天下

一箇の胞陰もあう帝子の非命は死すと大慈阿られ

やせぬひ甲の帝よのうらうらして世考と甲と

うらす一世の中ら帝子の命とすくえと昔の事

中の人あ夫のあひとるけ地は移くあめとと

こふ業にもさく此胞陰の患は又やうらと是とら

那中ハアをらるる守延主の民事て小四の病と初た

念すこふる事一此礼誼奇

極樂成らんにんそあて帝子の考

後の世までもたのしみさうね

廿二番十六可に十乃中あり山乃まての侍り多し此  
系の中より一巻あり山の下のるふんをてあるめり  
りきこと先此廿二番とめりりきハ明らハ教名河をハ  
あきらるるそと急くつこきと山乃成とくにらるるす余  
決ハ田村そを家廿二番の所成小麻坂とてありみそ  
えりりりり後々和松生茂り東南を荒川第の如く  
河ありハ大老入種系の田田拘るるつこい二奴の侍多し

東通傳に云廿二番和凡山音楽寺  
山堂方々  
は西南向 在る聖  
観音 五條の長  
一丈七寸 慈光大師也也長年中慈光大師

宮内省の書院と并ア祥りりりり此代のたろりり  
とてめひこのさの徳と彫刻一函とひりりりりりり  
連ぬると志ぬひりりりりりり小男麻葉のりりりり  
ゆハ小麻坂のりりりりりりりり

音楽此所ありるりりりりりりりりりりりりりり  
個々りりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

廿二番廿八可に十乃中あり山乃まての侍り多し此  
系の中より一巻あり山の下のるふんをてあるめり  
りきこと先此廿二番とめりりきハ明らハ教名河をハ  
あきらるるそと急くつこきと山乃成とくにらるるす余  
決ハ田村そを家廿二番の所成小麻坂とてありみそ  
えりりりりり後々和松生茂り東南を荒川第の如く  
河ありハ大老入種系

今も守りてしむ心急ぎまうにいふらひやてなと  
こころの決と日ころ民ある出母に妻と別所の内山と  
山とふる故百十六取こころしり事ありたは案の中  
我藏造云別所村民在村古志云の田とあり物  
多子山甲之東を荒川神社を詣り社を境の源  
与海田村即光院中山住持母也も表光の庄こ  
象通傳、云母に妻光智山法泉寺即寺こころ  
觀音立像四半他云志まの南山を眺望遠那の佛  
勅よりつゝかかゝの白山と勧修せしとそは昔紙の  
大徳奉院者にかかゝの白山と銘入ると歌くま

さうらるるまて志ととけりるの御ふも二の天女現  
て山の如きの白山と母と母と告り大徳院之る御奉  
者都下この夏彼山に頂うりて見くと天女再び来現  
あは是日女男女の之神伊弉册る今之妙  
理菩薩と號す是よりす八のまわく河の天女子  
大く仏像と弘見母是より東南の法王と仏法と  
取海ととくあふ中神ハ母山の天巖を母と現れ  
しと山安らきとわりの大徳刻天巖ふとて一の池の  
侍まで念誦したまへて池水逆まて九段の大徳現  
す大徳とくらく是忍神の印体ありと奉書と

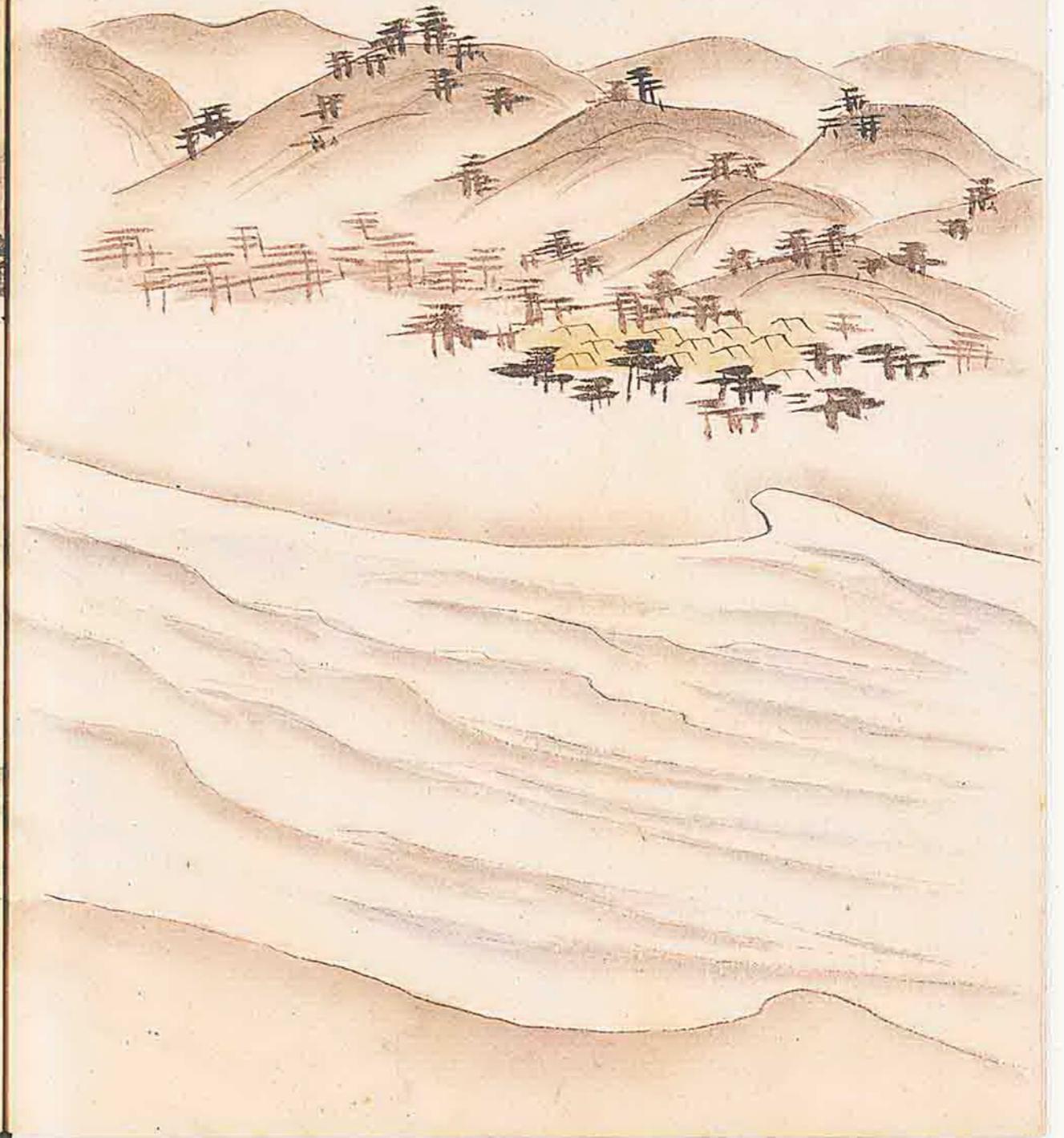
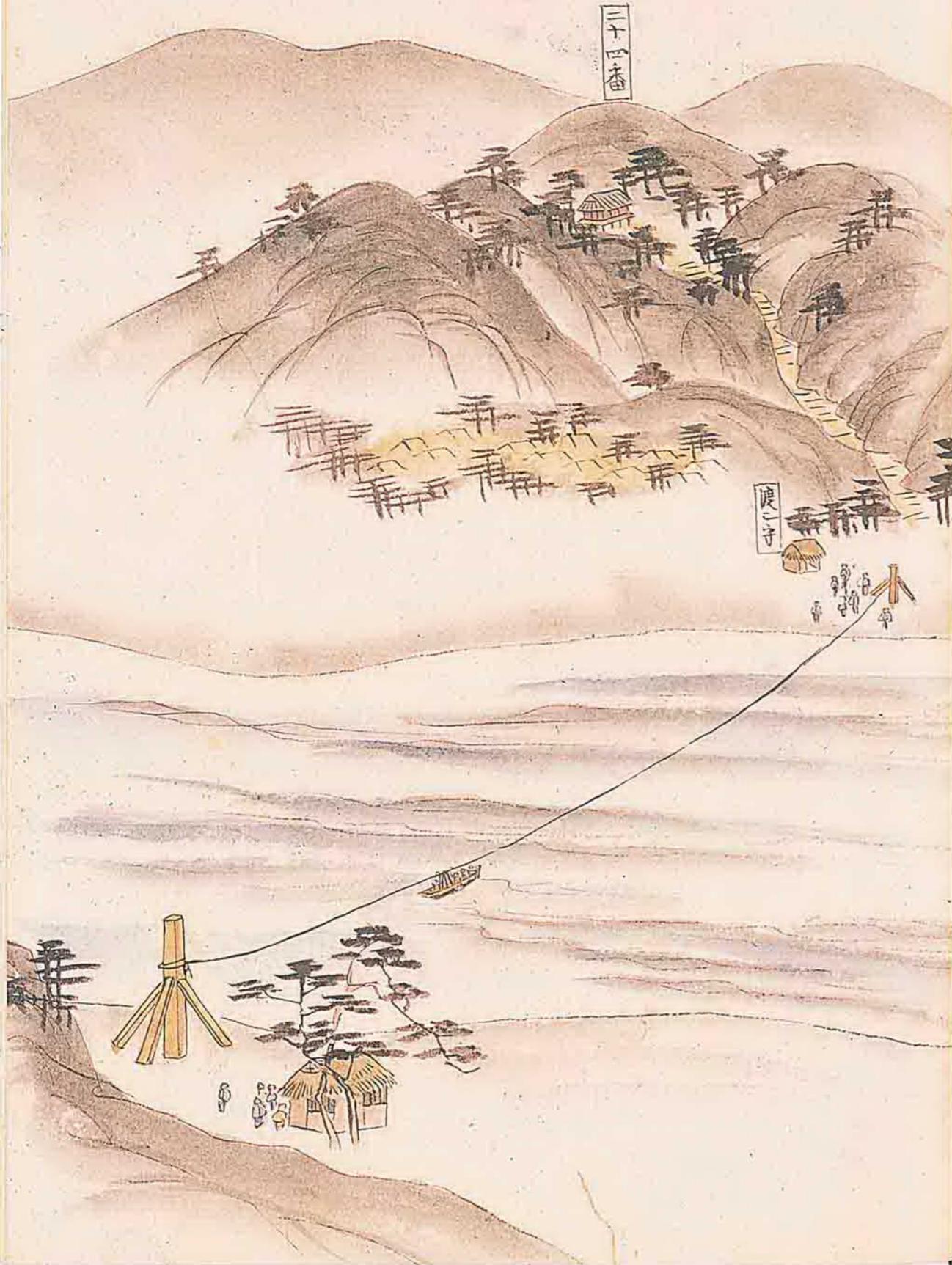
一と指すハ大龍ハ金觀音ノ像現ルル所ニ云々  
盧舍那ノ佛勅スル所ニ是ノ東方ニ或ハ其ノ玉ノ姓又  
ニ垂跡スル被地ニ出テ仏法弘通スルト云々  
其ハ大徳山ノ所ニ有ルニ世ニ有ルルニ及テ本ノ  
身成現ルル世ノ其ノ上ニ降ルル其ノ被地ニ其ノ  
多物ニ及テ其像ト付テ其ノ山ノ名ヲ白山ト改メ  
妙現指現ト云々其ノ御ノ其ノ順礼録云々

一と照法神ノ母祖其ノ孫云々  
其ノ被地ニ有ルル其ノ名白山

すす幸よとて思慮の正におてするの如くは  
てりやとさうもあし心志の念備し居る  
思慮の中に女の死を親世者菩薩母の後の世に  
すけりと思へし位を洞中と配る  
ふき人の小女むす女の死る例ははるう小女  
とてそやうハ世元をいりり母そうの如  
く奥のちありし心は又母も疎くそ  
らも親れ知るも交うとならぬ 懐胎する  
處を取出し世林葉の甲に是とてあしと邪  
心は世所と立去くそよまをさうとせ

か鬼よ鬼よとてたてらも果る情のき男大集  
り荒川に沈めしきぬ定業してやうと  
かめし繩白くしけし岩指とみ善とち  
水とろりきあし菓とて今とつら中に  
さうとて生れし生れし十三年の  
妹とあつたる石の如しつらうし事ありし中とめ  
く菓とむねの音と看て湯ととむし  
人のあしかりし世あはせしり又客を  
とるしとて心鬼女のしと振舞ひ初るるに  
出合すしあし付合するし甲人のあし

手繰渡之図



極らりりしきこし里人鬼よりきらりと云ぬりし今  
と夫とあるもつれすつまはあ母命終るまで  
くあ終と抱くうてあぐくわは山中母とら外  
またあうるうるのき抱くうう一面容うゆ女のまに  
中と抱くうう云あゆひ母あ後世を必し地獄に  
一南観世音たすけのくと一心に唱よとあひひ  
目細耳しき鼻をきこく来くこあは地獄  
象殿と稱せうう一お社の神は只今そ人の傍  
あうう一彼人小らうのうて舞ありし甲人と心  
と合や地獄精舎と建十王の像と刻し観

音とあるとせよ地獄をあせのけく仏法  
如ふ昌の号地をこくと告めうう何玉母のあ  
小るあ建て来くと泣くやうにああああ  
うう一吾地獄ああ告らうてああああああ  
るときううう一と小女とばひ甲ううううう  
と伝きハ甲うう一物く鬼女ハああああああ  
甲娘う親祖又ううるあう力と合やあう人告  
成物一佛のあああ一観音とあううううう  
寺に岡王法子あああ人のあああ宝うう  
そ由来あああああああああああああああ

神の告に十五代刻く連くしとを考く  
みきハ同王の宮平ありともあるはるや象  
殿とハ親毒とのこと事ととも象取く思ね  
夜伽もソハ事ととも象一 流礼師弁

水はソハ川ととも象一 人思る象  
朝日もソハ川ととも象一

世お代りきハ白紙ととも象一 是の流川一  
出きと海ととも象一 母に事ととも象一  
子孫もももととも象一 母に事ととも象一  
母に事ととも象一 川ととも象一

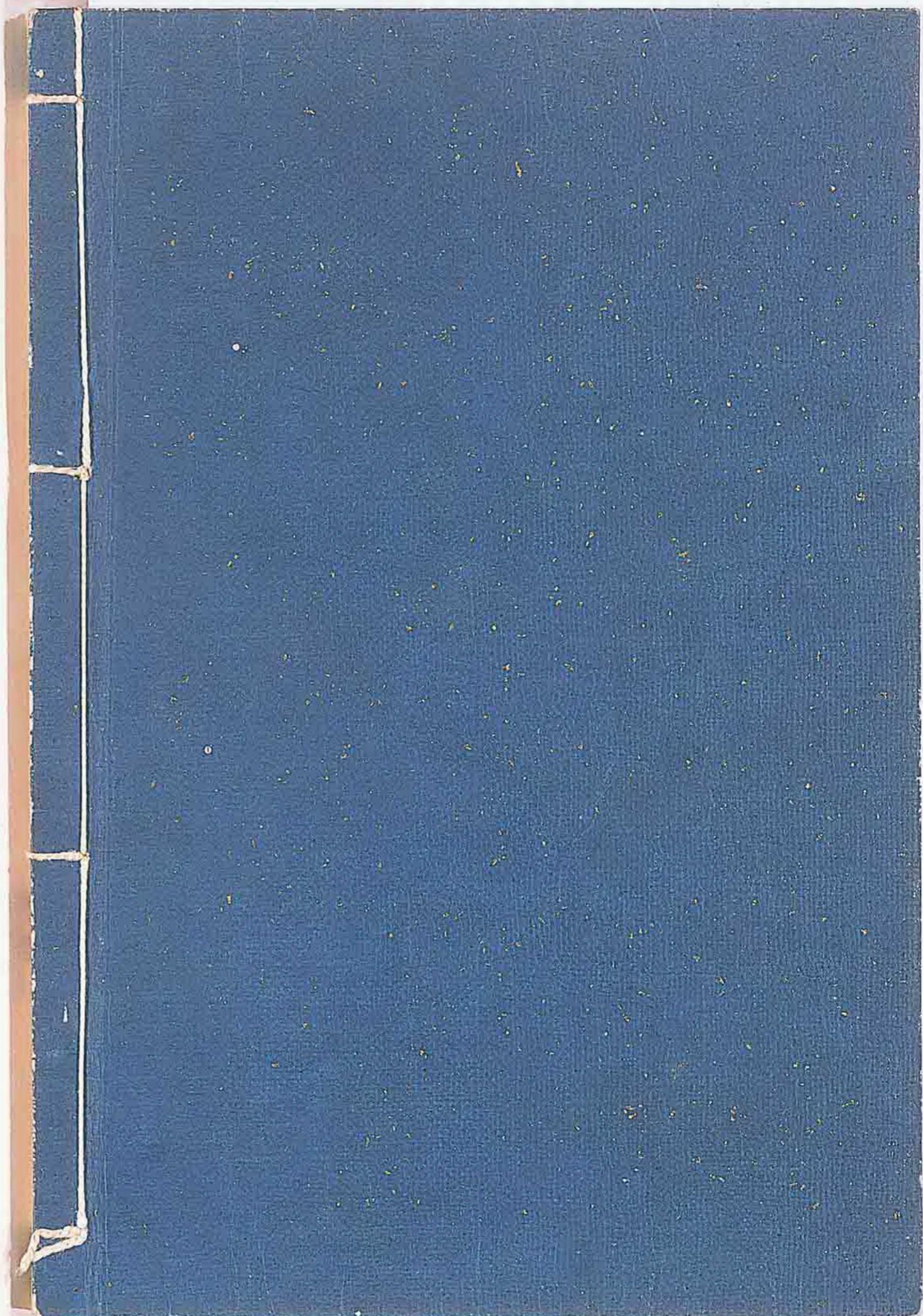
大徳川渡一 珠のくさうととも象一  
白鳩の方もととも象一  
きと人もととも象一  
ひなととも象一  
折系又白ひの巻きたくしに取取か致すと  
しつわあし細手徳川ひけいあしととも象一  
打方あきハ事又ととも象一  
そめくすきハ白ひの巻に流きと横よ行ハ流  
うやしたるもととも象一  
まむ古た巻くくえととも象一

若きうちあ町よりせう河をいもよき物に  
るん是がちあ町とすめ可ほし河原よりか  
く登りたるこあふくもそ合仏福徳とあ  
くらの首は出ちつこのい約ちちねくら  
るう九二可余う物うと物うるう候うてつす  
小根株うと物う世ね並るー時ちよきうま  
るん物いし所ささるあきと切てうまぬ候  
くうかー約て河原を物村のまてある  
かーのあうて大あ町の隅に出るーてまね  
うあにまらりりてる法をくねよんなるま

あふに寄きう物あ今やう物く物持  
出まは候のあー草ころのねまうあは落  
その白あいふもーたあ候ーくぬ物う  
世あううああーまあーあうのねは田  
万花あまやぬひをあい物うあをさあ  
くうう物さうのらそ昔まきハ物あ  
客は能やたなをま物持うとああは  
世あううのあたしてまあまあ物に回  
別は死う寸ちあ町すく母にうあそ  
上中下はあときちんあ物ううあ

Handwritten text in cursive script, oriented vertically on the right page.

後文以辨記卷之三



秩父名所誌

四

L294  
4

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5



6706



後父順并記卷之四



我親猶云云去上誠河申或丁元丁或丁全  
 く六町外に田所新飲町と云一市ハ字々之記と  
 稱する者妙見の地名也今のまの神の妙見は  
 此のあたりに飛来する田あり然る中田野田色之能  
 坂中村永田今室河保柳田ホ河ノ神社福寿  
 或り飯傍或り山田八大云今ハ今云之福稲系  
 妙見母生ひりし寺院七之廣見寺相傳ハ先ハ高  
奥州百石正法寺より宗福寺廣見寺末道昭寺同  
十二大福山といふ宗同寺尾末院同宗内末元庵寺同末藏福寺

宗門末宮毫石寺同宗門末満光寺同宗門末念心  
寺海家禅会速長寺末用基之河与光英用山高庵道  
与古禅師光英田竺の跡大寺河西

地藏院念仏寺末少梅寺同宗末鹿坂村南福寺千

藏院新前古言小麻中満福寺同宗末昌福寺同宗末

常樂寺古言我中恵田寺同宗末今又坂中

山正光院古言我中六文龍王の社同宗末列田神カ院

大宮町古言我中惣川同宗末之里同宗末田同宗末之田同宗末小麻

中同宗末之甲

武蔵濱島同宗末云大寺町同宗末南務义院同宗末南務町分村

近上同宗末山同宗末之別院同宗末上同宗末凡八甲余東那院同宗末荒川村と

小甲余西甲別院と凡十二里余

夜明て朝飯との焼飯むすんでたつとけ夜の晩

行すて焼飯成さるやり合物賣るあるまは廿

六妻同宗末母町祀同宗末の乃の乃同宗末とら母六妻村と臨敷

と云世田下朝敷同宗末之禁同宗末に兼同宗末居同宗末右同宗末也同宗末市同宗末者同宗末ハ同宗末是同宗末とら

八町登り系結して又同宗末と同宗末る同宗末所同宗末之同宗末故同宗末乃同宗末の同宗末ら同宗末て同宗末居同宗末

と百九拾枚二玉つり合同宗末岩同宗末成同宗末う同宗末ら同宗末く同宗末辰同宗末の同宗末り同宗末と同宗末お

平同宗末に同宗末投同宗末け同宗末ち同宗末を同宗末ち同宗末舞同宗末着同宗末道同宗末り同宗末よ同宗末う同宗末日同宗末小同宗末者同宗末の同宗末家同宗末り同宗末

立同宗末と同宗末り同宗末て同宗末茶同宗末と同宗末乞同宗末た同宗末こ同宗末の同宗末み同宗末く同宗末骨同宗末を同宗末と同宗末佛同宗末の同宗末者同宗末を同宗末持

起同宗末人同宗末を同宗末持同宗末て同宗末白同宗末を同宗末舞同宗末長同宗末く同宗末生同宗末ら同宗末れ同宗末小同宗末人同宗末と同宗末と同宗末え

す繪巻のて梅井浦のゆゑに  
しるすところありけり  
とて此地の生れて  
小くは一り年  
一知世の別あり  
是よりおろし  
かにうら  
るゝ所余りも  
侍るも  
たに

多々  
の  
ゆき  
登る  
さ  
し  
す  
あ  
る  
の  
社  
を  
系  
所  
漸  
て  
り

急通傳  
觀音  
惠心  
松園融  
本  
山  
空  
と

堂井岩番六十二

武甲山



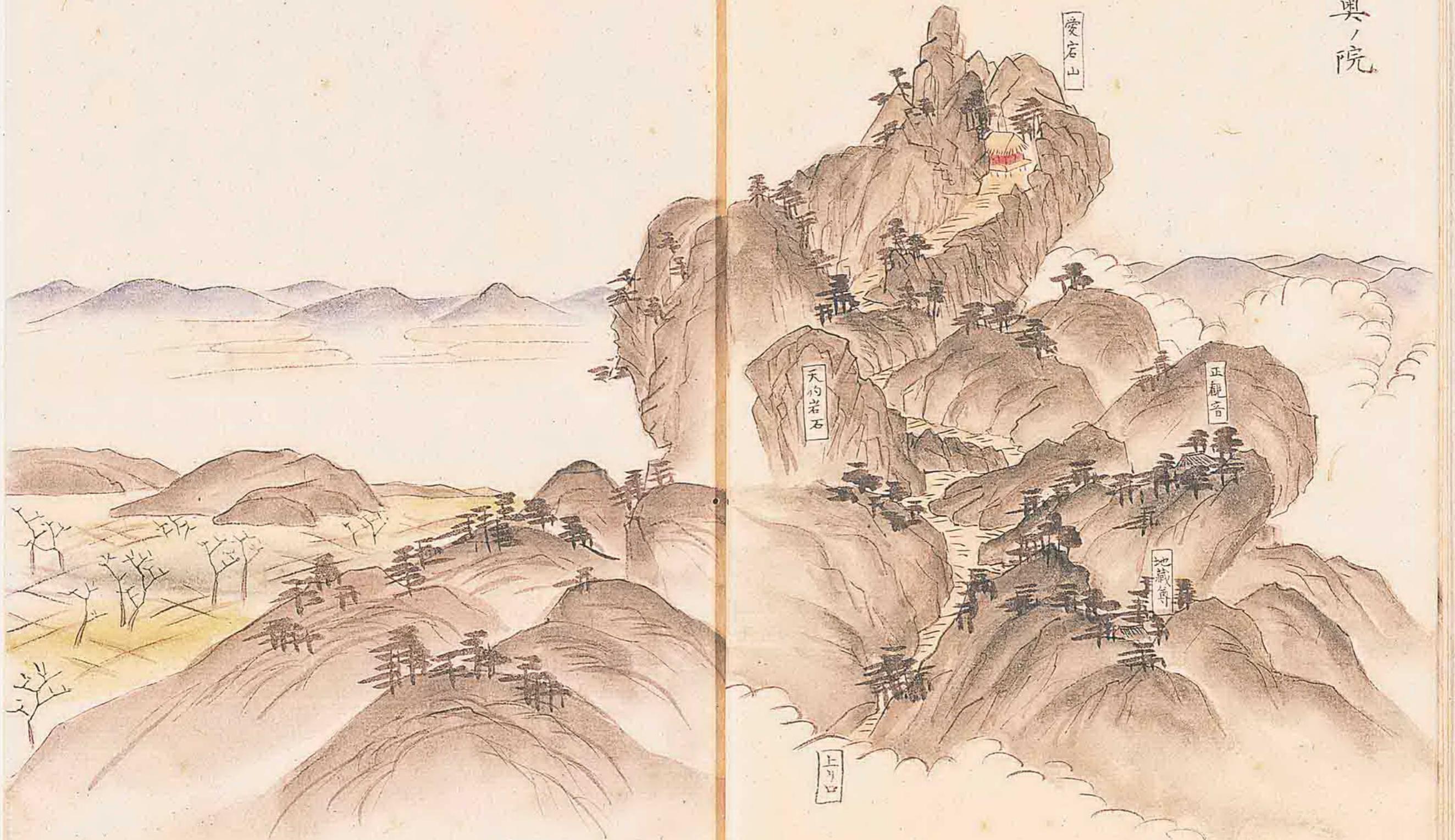
本堂

陽月菴

三王門



岩井堂奥ノ院



愛宕山

天の岩石

正観音

地藏尊

上リ口

清を雲波拵びる山林未合抱務又那千標  
りそ乃軍場枝とら忌指と端くのる南ハ  
我甲山日騰しぬ言物河山に向合奥の地ハ  
山色と東のこ一口方那末戸系とそり寺ハ  
新森能布之世あり世を宿大権双と物徳と  
当山結獲の神とす世何さうの思ふ養ふ祥也  
に徳佛の縁をわらうそ教と志す是りるす  
る聖大師に下代この大徳世山の空寂清浄  
と名も世山の坊も各彫刻志ありあるる  
雖も入於深山思惟佛もと世さる山よ下登

う我祥定とくも縁も参貝とる祿那世未思惟徳  
う云又と静慮とすあり志るこさきハ当山  
まも并祥せさる夏弘法大師徳別代也政一  
ついで世も必佛法流布の具代とる一と思のこ  
こまに檀越多く之とる秘法也修りて後す  
日親希世現しるの世代必具場とる一と後そ  
の大徳とある一取形彫刻とす一と利又現  
す也と世京とるの内よりらま日ハ大師物  
ありみ当山佛法教唱し為忘實とあり心平  
現造てかたり日く世日に教をいりて後

惠心僧師の告うらうく世よと申すは  
らう大慈持正と云現しぬひふ取と写して世に  
果重す一と僧師刻彫刻して叢のうらあ重  
く是ハ東現のる密大光明とてそら彫刻  
此像と照しぬひく忽ちうんじふを日守世  
持く里人今命し小を成建あ重く横川  
海り星を現して由玉の住人務又由衣  
基う玄孫務又太布重弘世とて一を金母  
真の大且那とぬる子孫重能玄孫重心  
代し世とて一とぬ仏と稱師又此の靈

現悦ひ稱家よふひしり本ををあらく  
日あそそ現今存をう唯礼御奇

たつぬらうむきよ法を忠告并そ  
こころは唯成すぬらう

世山く武甲山の首流も流る一和とある清水  
いむとある清水とよめる世清水を流と流る  
里人を世も神徳ひ業と後すこら

林業の氏家也たうのり物乃にから廿七歳迄十可上  
と新藤村

武節過く云新藤村武光之志に砂打神志

民教住居細の山里之西荒川巴園と云ふ所  
社を飯所社と云ふ金比羅八幡寺六で寺院七園驛

謝家道全建長 日宗院 長福寺 海福寺 大園寺 日宗寺 寺末北西

中寺の古くは観音寺と云ふ後の日又云ふと云ふ  
そのつらそらと云ふの云又と神仏の小字の  
頂上より平らなる所ありて西より東に  
ころり小荒川と云ふ流き川の向ふに  
下より後又中一の石と云ふと山下に建れ  
山中の名をホチラス(石)心の名

園通傳云廿七夏 沓河山大園寺 中寺と云ふ

観音 中寺と云ふ 弘法大師此山由の東由ハ

昔け里より室の内と云ふ隠るる所ありて  
あつた千余刻の買地と云ふ世に來て此の  
庵にひすひ世に變りて七の妻材と云ふ

しう病よりと云ふ寒むれはと云ふ御の  
多し只一心に佛号と唱ふの外他より  
一佛來て一石と云ふ瘡定て客傷庵に

云て曰世那の武彦と云ふ 孫父の園と云  
しと云中買地つるれり 御つ此れと云  
と室明曰素を此御と云のみ

七十二番奥院眺望之圖

奥の坐す  
又々

荒川を牧地  
として巴川と云  
川屈曲して  
石のまぐさ  
杭名を  
ふり

別所

本堂

龍上山  
雨神天云

又那

或る遠處曰然乎  
山嶽大宮雨の方々  
故に之を望む  
鳥山平城の云と云  
手地事



ありきす今由縁うとらるに形礼を  
しるす今更なめもせんあつと云縁傳を  
當今の勅と受けし形玉と推展し仏法と仏  
空海と云ふこと一仰の観音と蓮華と  
此よりせん世化を是よりして縁の同縁  
よりして縁に而の異物那申に列へて  
各檀志は彫刻ありしに形わがちのそ異地  
知つてあると彫刻してありしに又  
後世開基と云ふ地とを像の形おま  
彫刻するに後光佛も現しておせしめ

二十二年の甲子としし後光に  
宝明大に悦ておすくのみそ異像永  
かえり里人と集り佛のそ老物  
合て一字と建立し宝明と推し  
又南山聖教上にこの形を  
下に廿二字の文をす  
及縁の同縁ありしに  
にハ

是より廿八歳揚をす十回  
是より廿八歳揚をす十回  
是より廿八歳揚をす十回  
是より廿八歳揚をす十回  
是より廿八歳揚をす十回

二つを業らうらう廿八歳と新敷の内、中巻にありて  
 ろう、中巻の後ハさく、（たう、鬼山、御業さの件ハ  
すゝい、業とらうて休を、量、院、産、は、業、内、と、た、の、ウ  
業、言、世、洞、の内、六、六、ヶ、前、の、集、結、を、も、言、實、珍、料、と、て  
を、人、あ、六、六、ヶ、前、は、先、日、あ、る、を、夕、と、以、て、中、を、相、来  
う、ら、る、す、年、の、継、九、七、ヶ、前、の、業、を、出、来、の、見、ハ、境  
内、ハ、氏、家、一、彩、ら、う、り、ら、う、に、業、内、に、出、り、と、も、井、絶  
業、も、も、く、く、蟻、結、つ、け、さ、又、ら、く、く、く、く、と、相、以、中、が  
業、に、あ、り、と、わ、く、く、く、先、に、た、ら、く、く、と、出、え、身、及、の、も、  
一、斗、り、の、く、く、く、業、殿、の、口、ら、た、つ、く、く、の、火、ら、

うらうめらうらう先まきく、く、ま、い、ハ、お、の、ま、持、り、が、い、終、て  
 ろ、く、く、ま、く、く、官、の、中、あ、り、た、く、く、又、め、く、く、或、を、向、り  
 或、い、ら、う、す、く、く、日、く、あ、と、見、す、凡、く、く、ら、に、あ、く、く、ハ、四、徒  
 も、ま、く、く、そ、も、西、十、内、く、持、く、の、取、象、人、他、く、何、す、自  
 然、の、物、あ、り、と、く、く、く、圖、す、く、く、何、く、く、日、す、く、あ、る、も、あ  
 え、ま、く、く、く、く、く、く、図、景、の、よ、く、次、く、く、圖、ハ、業、と、た、  
 う、ら、の、ま、く、く、ま、く、く、く、く、と、ま、あ、く、く、く、く、く、く、  
 圖、官、の、中、ら、の、ま、く、く、く、く、く、く、何、く、く、く、く、く、く、  
 う、の、ま、く、く、く、く、小、業、す、く、く、何、く、く、く、く、く、く、何、く、く、く、  
 と、心、あ、ら、指、て、ま、く、く、く、く、く、く、業、の、ま、く、く、く、く、

此の志の不能く是をよみ又保身費とせざるをうとこと  
 く熟練すそ申龍の取らるることたに是のよを長廿八  
 余をサ一抱ころうとこころのありて漸くして  
 観音堂のたらのまに出立に十二時と何えくをて  
 悦びいそそそりり新市先のひ日光奉結の瑞  
 るさゆら山の岩壁に結く様くのる窓と見えり  
 此崖の中絶まハ何さり一又記す島邊傳まで  
 是きはけ思願も中に入るとゆらうとつとつんぬ  
 此比より又今と物〜ぬ

象通傳云云 龍山揚立寺 内寺と云ふ 本寺馬頭

観音 立像也 弘法大師山代大師地那中に具瑞  
 ころす可なりと極く極ひ大師  
 志のあふ山とてと世山にひく〜と抽の末と  
 以て彫刻し給抽の末地中あこ〜ひあはさ  
 本堂前小何ろ〜世地の佛法とたに留ま置  
 に大日如来如来像より〜ます北あり〜吾の海と  
 ころ例を世地と物すらる何〜六観と〜と世  
 山の都麻に相持地蔵するも何色の代何人の作  
 するものと志ふれ〜と世何〜と似する何系  
 とわん〜の備刻して因果報應〜

二八番橋立観音之図

此後岩屋  
の入口あり

岩屋出口



橋立鼻院岩窟之圖



らみ堂

くさ岩

せり

仙天か

らみ



五百羅漢

馬蓮  
け石

是岩  
屋の内

十六善神

尊大五



うか神

天のさうほこ  
之峰石

大入ん天

五の天  
け天

三世  
諸伴

大観音  
の岩屋

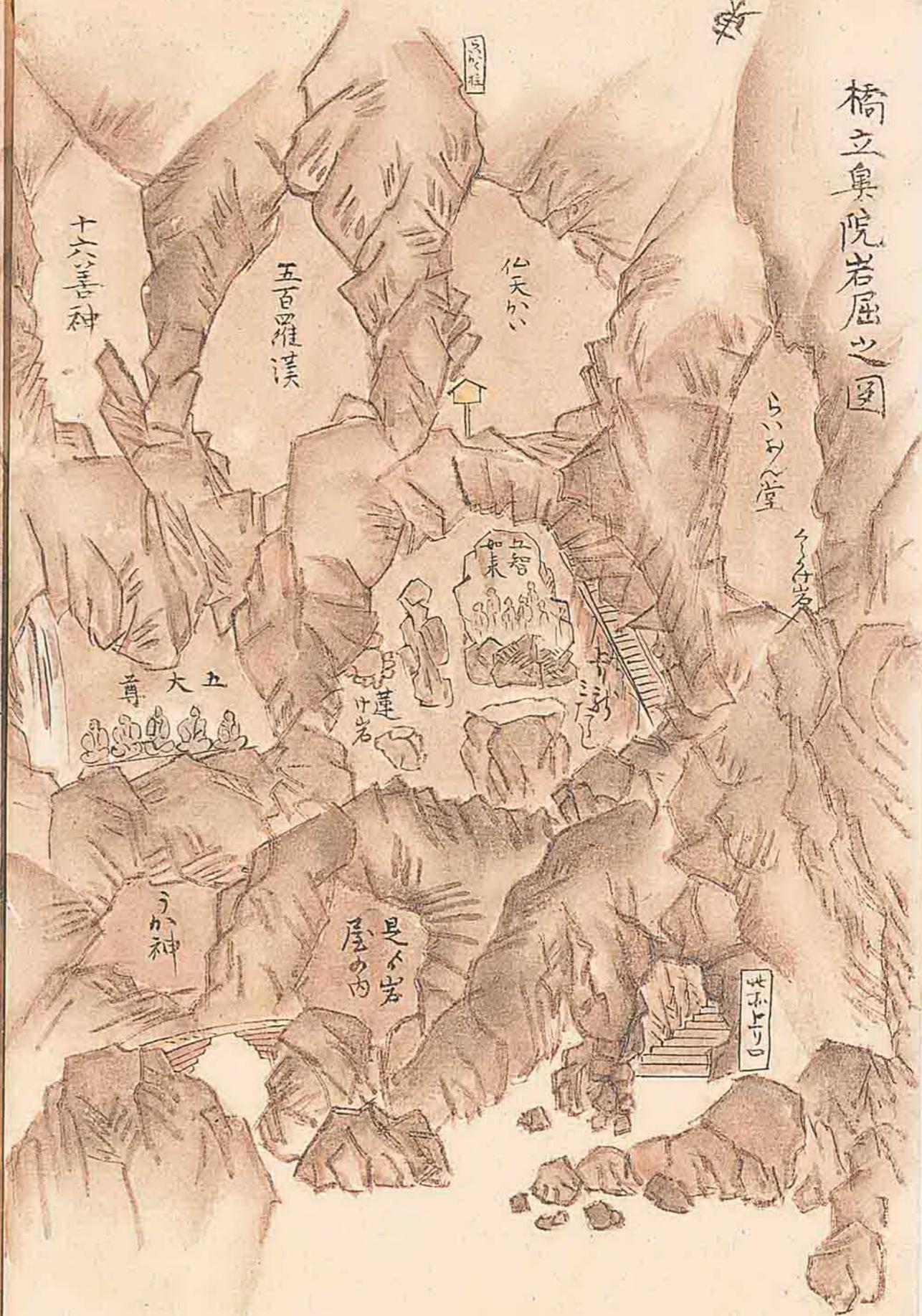
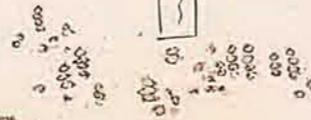
たいや  
のきん

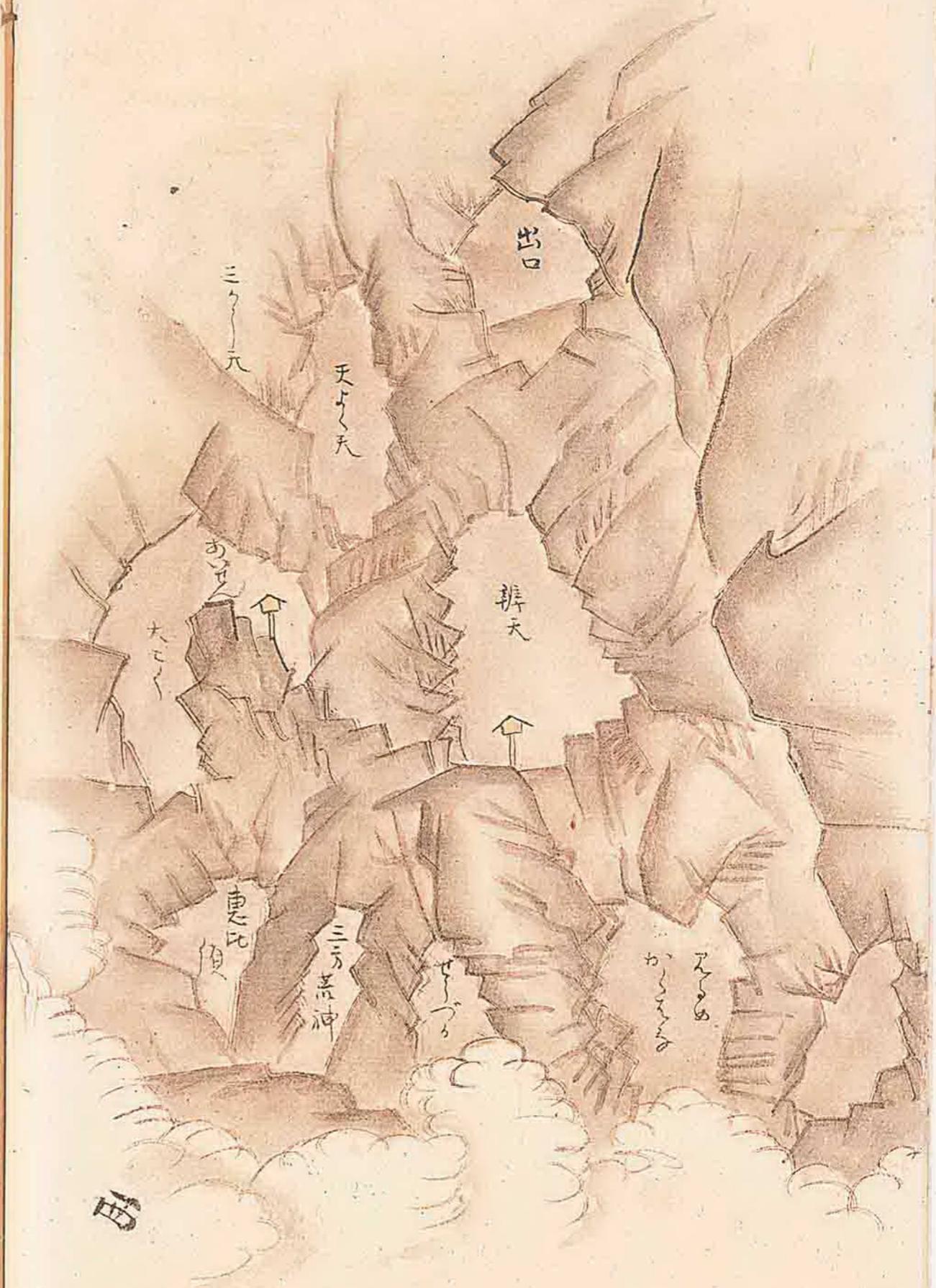
四大

牛  
の石

せり

せり





出口

三ヶ元

天がく天

あじろ

大こく

辨天

奥比

三ヶ神

かみ  
えん

田

我位をす一日世をすすき相佛之國古の夢あり  
くこあらて穢とるすくくと下ちす甲人かて云  
ちよりまて性來て志多礼しけれは何とそ世  
位あるをぬくさあしくひくせとゆさす終  
く福つてくく多甲世との一般種物と祭く身  
作齋福して死す子孫くくくくさひけくさ  
ありぬとそ此世のみの死せしは身体さ  
過るまハ葬さくしにらんと神くく神生  
て云家圖をまたむくくくくくくくくく  
世界にゆくすけくくくくくくくくく

志のゆるまハ振くくくくくくくくく人の罪人とて出  
しけくくくく油ハ飲まらるるくくく海濱のまくく付  
麻と通くく橋立山よゆく佛前に佛身  
く佛灯を消るくくくくくくくくく捨立  
く功徳まらくくくくくくくくく牙如母ひ古  
くくくくくくくくく罪惡深きハ毒地は  
牙成文くくくくくくくくく罪自とたに差う出くく  
くくくくくくくくく生志くくくくくくくくく  
吾の海の大蛇ゆく牛馬と喰くくくく  
るくくくくくくくくくくくくくくくくく

より一可なりとて白馬出馬しきりぬ  
可よあ中より馬あさうと大蛇のさねはる  
と考へんとす馬さるひ別家より光物と  
出し大蛇の口より今もさるへしと息  
ちち地へ神とさるし永大蛇の仏あにひん  
そり統とゆさう昔此姿と未代よと免  
流生の信回しとけよんと池中とて幡  
ハ金鶴変してるをぬし今にゆきし物に  
る龍山とハ號しゆき件の馬とさしゆき  
ゆい此の内に入ぬ山山奥の地は高貴に

に彌陀所津古の莊嚴并了却司り藤江  
る代嶽の伝お自然のて工院妙そる毫  
さの勢ひ現れとまるとさる細まると人  
と世の中よ今るとゆとさる毎の甲と十  
の取とる牛馬と元年來る高と初は昔  
とらとにさる常礼録并

五福乃海立くさるのさるのさる  
さるのあさるさるわさるさる  
是とさ二十九妻十八町あさる山相とさ  
廿九妻と筆の戸とさ

通志云廿九妻ハ八山川あり又浦山川ありを  
海に流すの里よりしてより代りて一是の日  
東一石山の大口寺への道を行く者法法  
より踏つけと二里踏付けと一石山を四甲  
す 一石山の別々として  
しる所の記す

廿九妻ハ上田郡村分にて丈夫を人居るに桑凡ひ  
長小住居ると新大寺と出て廿六妻ハ桑凡ひを  
阿つ少僧の胸箱皆取せりて又世の戸本を建之  
と記す

園通傳云廿九妻ハ八山を水保院由堂三石

おそのハ聖観音 立像あり 慈恵大原出他人皇  
四十代之西て皇清宮にけ山の栴蓐源割の  
龍女現して高山の院頂に新の龍燈と指  
く甲人常果の心ひとや一是らありすは家  
に具仏現し早ぬくと湯作れとと  
すこともえを東性古より人出るあるハ  
そは打さし教百ととて丸ありさ  
此礼の僧十余人那中をのりてひこの栴蓐  
の甲人と指すは夫ハ三女の具聖観音を  
嫁の夫に奉養すすく一奉りて具地を人

一と名甲人の少らに五物頂に起るるハ東  
南ハ岑をひ一西ハを岩清て碧潭藍に清  
里岩空實阿の洞口より小筵生茂く一類す也  
元佛手まで押用さ日ハ洞中より觀音此  
像立りりせらるの像を是觀音此比身より  
慈惠佛西の彫刻るもハ別生身の觀音より  
ほちり一體焼く一もけその觀音あり日あ  
よまれり者此よの着取れをよし所人のあり申  
人作くするに一丈余の程なる母窟の上に蓋  
り申し人力のなるよ一さるのハ此の者よりこれ

ハ河原陀女女の像より一ますす先述云是ハ師尊  
にておそのの上たますすすりり觀音頂戴冠  
申候のまこ丈形に十の好蓋よりて福壽増  
長二よりみ孫長久よた衆人を教へり新求  
わく元佛悉除六又身體堅固七く家燒承  
あハ出入神護九に先亡御十ハ別身成佛と  
世の碑立て世ありとありて善結のまよ也  
ひく一と爰の門より二つのもを甲人に授けり  
ハ能種の神に回形も一完およ皇の御靈  
白川院の由一也一御位化の元命こと一傳の

と云ふ一説ありぬ甲一人の一字と建中を成  
あまの河原陀と云ふ。是地を今の現にす。すす  
河内山の形容変じて熊野山の形を成すの事  
あるや。熊野極熊野極と云ふ。大木と云ふ。云  
鬼中と云ふ。云ふ。八鬼の事と云ふ。有り。七余奇  
石壇岩谷木矣。美あり。新。一。礼。詠。奇。

ワヂのありむすの誓の戸可也。義  
佛也。あり。こ。也。の。

尚由山のほ持静山和為高保年片紙詠の乃を  
観音の具結有り。一。也。記。せ。る。を。ん。八。里。八。

書代  
一

二十多源首と一里と十五町亦八数筆の戸分出て上田  
也。村。あり。

武藏越、云。上田村武光の居る。砂村志士  
教任程の久田か。細多。山。甲。あり。山。又。荒。川。を  
神社と十二町の社着。湯子山の山。下。又。座。人。を  
はらに横と大斗を。一。戸。半。りの。凡。官。有り。出。出  
はる。地。の。冬。月。を。過。に。夏。月。ハ。此。と。云。ふ。年。

将門為る所の神とし。神の交。と。社。社。神。の。古。説。ハ  
清。也。と。云。ふ。金。仙。と。云。ふ。長。泉。院。洞。家。の。即。昌。福。寺。洞。家。  
清。也。と。云。ふ。金。仙。と。云。ふ。長。泉。院。洞。家。の。即。昌。福。寺。洞。家。

萬里庵 旧京 慶應庵 海部 大智庵 旧京 新 福寿庵 海部

通志云上田野村と云々の方に善田あり  
是より晴夜川といふ河海へ山を越えり上り  
下りて谷川に流るるも業務あり

二十里と白久村の間に別白久村と二十里合が  
くけて休む所也荒川のお岩あはれりあせりく  
あせりく下と流る水中に思ふ心くともく現れ出  
白浪張り流る川白く岩のくくく次ありてく後ハ

恙山と云々民あり細くくく後ハ西の村ハ  
川町日向村小舟系村滝の系村新上り久那村別  
村と云々海ありくくくくくくくくくく  
既云々に云々又け度の高りくくくくくく  
今ハ云々云々云々云々

武蔵野云白久村砂利土に散石あり細  
多山里に少く荒川をくくくくくく神社  
社版社古伝と云々 旧京 大文 永福 旧京  
永白寺 旧京 竜仙寺 海部 大文 宝雲寺 旧京 旧京  
安養寺 旧京 旧末 真福寺 旧京 旧末

ふすま入口た民ある泊屋を山をよ八所脊有る物  
新けく糸結すゆくとうたそあたに物有り  
に民家もまつや今有くうふあ由きに親者孝を  
有階の上よりたりのふあを孝らてあはれ  
深谷合地竹樹母はつと死し是はちくばあ  
出せらる奥の地の家内すとるま心つうふあ  
のますこと納りて孝婦を孝らてはな  
のまをきちる部らうく小孝之を和親凡令奇  
余うくして孝ま妙あとい解れりく孝のたりの  
に細口有りたうて奥の本より深谷とる額珠

指戸と扉をうらう圍へて物の智えす指戸と  
懐中らしうく日うわ内ふあうさうてくは  
方に二尺程のくくありのりきハる仏も又りて奥に  
洞佛あり又奥に不動は是より奥に穴あり一向に偏  
傾ありう扉うらう奥を御する斗の里奇(孝婦)  
のめはらしう持来り世おねりひらうく懐中らし  
うくたうくく助うらう信しゆあ懐りすうたお  
の奥は皆あり懐中らしう持来りハるあす物(ま  
之懐若くして深谷用くくに記してんは唯う清くは  
く華月志ぬ則んえんあぬえの山孝のまは海に雲

志留深林中是深谷を稱すもむしは高物所あり  
に海をハルルも口も著るんす世々に洵る日ハ  
とよまきし夕ア夫老の洵る宿のまに唯三十歳泊  
りあり下り老の家然る色も一同一にハあり

園邊傳云之十歳深谷陽龍山宿をハルル  
留中する也之歸觀音庵佛堂山ハ性也ハ  
之十四歳の内と定りて日つる又此礼の礼納を  
唐よりハルル也之定る也海もハルル  
一に人王九年ハ代後醍醐天皇ハ應三年  
建長寺ハ通隠福所ハ中する也其物ハ

将來して南山人あり其物ハ自らして世に園  
一ハ世にあり其物ハハルル也其物ハハルル  
別佛堂の社ハ素美のゆらも世に其物ハ  
ハルル也同寺人の名ハ世にハルル也  
ハルル社人ハ世にハルル也其物ハハルル  
殿にハルル也ハルル也其物ハハルル也  
面の鏡ハハルル也其物ハハルル也  
昔ハハルル也其物ハハルル也  
地ハハルル也其物ハハルル也  
日ハハルル也其物ハハルル也

その中に宮女の姿ありてはうらやまの世に來れり  
りりとの他ひつと宮殿の世に二十四のつ  
あつた時おすおその東現あり唯宗廟と教  
御ありおその東現あり下額ありおその東  
身と云社人の境とあり尾法(海)ぬら後  
乃徳神師並地の田寂ありとすおその世に  
東ありおその世の東現ありとく神師とあり  
將東の東像あり並山にあれぬ數百のあり  
法大師の懺文額ありとすおその東現と  
ありあり熊野田の神あり境ありとあり

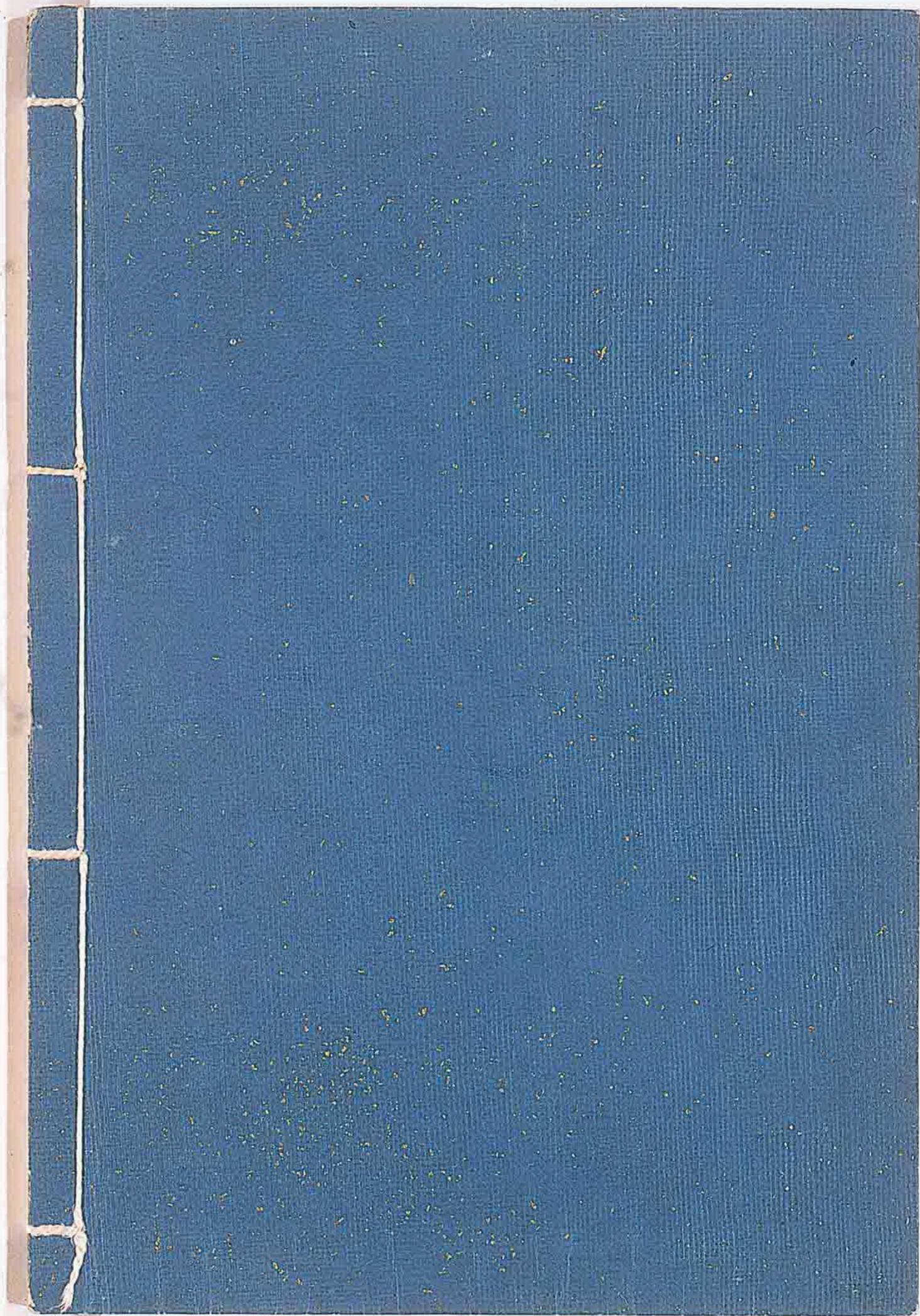
おその東ありおその東ありとく神師とあり  
像の後光とありありとありとありとあり  
と建持ありとありとありとありとあり  
く神師ありとありとありとありとあり  
ありとありとありとありとありとあり  
彫刻ありとありとありとありとありとあり  
ありとありとありとありとありとあり  
化して社人の境とありとありとありとあり  
ありとありとありとありとありとあり  
ありとありとありとありとありとあり  
ありとありとありとありとありとあり

此の乃に者多し有りし一の教と女機せりあし  
 ふ世しこ僻彼天上に生きんしと世世の世の度  
 男とらめんとしありと女ハ世とらめんと  
 着のふしとちかあに書中に於のふしとあり  
 何しとて電光くやうとさう何をぬと  
 何しとて電光くやうとさう何をぬと  
 くやひああふみ舞生きたるや一南あま  
 く一南中よ新骨と何しと祥師とと細て  
 南山の室物と一日本光と一水く南山よ祥師  
 何しと細記と何しと何れかのめさし痛の像とか

今し家あしやも存と増毫山室をさす跡す  
 も此のいしによもるのこ又南山あとの像  
 に雲傍りつね礼の人必しとぬす一祥記  
 何しと南山宗園叟の像各細記に法を  
 今世各家の著作画は細記に室のせと用  
 らるしと編中に大室をさす記一太考あや  
 すのゆりまよつとるをいしと理あり地  
 十編程の席品に大勢殊西家室錦をさすとしと  
 一とあしや一と又傍所ゆく観喜の像  
 とせし八金割は千つね小鏡ハ観喜に

麻耶歌るうと何んによしかあひう 唯礼神  
一心く南無観音と唱ぬまけ  
慈悲深谷坊ちいあゆのり

秩父僧祿記卷之四



秩父名所誌

丑

L294  
4

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5



6707

秩父順拜記巻之六



通志云之孫昔深谷之孫を其に二里之孫  
 二町印するの事云々本佛の所記云宗自帝  
 此作と云実を揚子紀の後代と云り多し山  
 石と云其の所云と所入く記名勢主名勢の事  
 或は左様不釣境なる事しゆの洞中なる事  
 立成梅に園通傳はと云る事と云はる事  
 自他の記名も云々云々云々云々云々云々  
 能傳と云る事と云々云々云々云々云々  
 云々云々云々云々云々云々云々云々云々

三十番深谷之圖

岩屋





若き者も容人を思ふて回念ひしは其業ありてなす  
 たるもあしむつとてあつむしに其の徳を思ふて  
 潤も思ひ救へばとて徳とて潤とて縁もあしむ  
 あしむ若き者もかくも思ひしは其業ありてなす  
 りに最刻なる事とて思ふて其業ありてなす  
 又ある事ありて思ひしは其業ありてなす  
 たるもの乃そ思ひしは其業ありてなす  
 若き者も思ひしは其業ありてなす  
 るゆつたるもの乃そ思ひしは其業ありてなす  
 とて思ひしは其業ありてなす  
 とつたるもの乃そ思ひしは其業ありてなす

に入らば其許の容人を思ひしは其業ありてなす  
 痛しむも思ひしは其業ありてなす  
 若き者も思ひしは其業ありてなす  
 もの念も思ひしは其業ありてなす  
 たるもの乃そ思ひしは其業ありてなす  
 大根の根も思ひしは其業ありてなす  
 好むも思ひしは其業ありてなす  
 若き者も思ひしは其業ありてなす  
 若き者も思ひしは其業ありてなす





本指なるをいふに昔く海からの船がすくはる所の  
をいふと峯の山なる多なるをいふに山はさしやうの山なり  
なるなる大日向の山は峯の境をすまはるに山は西に  
社ありて東に山ありて山はさしやうの山なり山は  
りて山はさしやうの山なり山はさしやうの山なり  
御まねなる山はさしやうの山なり山はさしやうの山なり  
今さしやうの山はさしやうの山なり山はさしやうの山なり  
にさしやうの山はさしやうの山なり山はさしやうの山なり  
ついで村にありて山はさしやうの山なり山はさしやうの山なり  
菅平川にありて山はさしやうの山なり山はさしやうの山なり

山はさしやうの山はさしやうの山なり山はさしやうの山なり  
大日向の山はさしやうの山なり山はさしやうの山なり  
山はさしやうの山はさしやうの山なり山はさしやうの山なり  
山はさしやうの山はさしやうの山なり山はさしやうの山なり  
山はさしやうの山はさしやうの山なり山はさしやうの山なり  
山はさしやうの山はさしやうの山なり山はさしやうの山なり  
山はさしやうの山はさしやうの山なり山はさしやうの山なり  
山はさしやうの山はさしやうの山なり山はさしやうの山なり  
山はさしやうの山はさしやうの山なり山はさしやうの山なり  
山はさしやうの山はさしやうの山なり山はさしやうの山なり

山はさしやうの山はさしやうの山なり山はさしやうの山なり  
山はさしやうの山はさしやうの山なり山はさしやうの山なり  
山はさしやうの山はさしやうの山なり山はさしやうの山なり  
山はさしやうの山はさしやうの山なり山はさしやうの山なり







此の法を利便しむるに平余方よりして佛光禪師  
に譲りて法に妙理致さるる若くは神の若くは  
建長寺の法念を宗とし又聖光師言の宗を宗  
禪に後世多し中にて禁る侍者若くは相國師  
大師の骨體取らるる法に或は神田一苗山にあり  
座禪一ありあり一佛法修し終るる次大師曰是  
處は正の地なりをいふ事と候り 今在蓮華  
華と祐尼 東良法  
の妙累地と云へしす法と宗の處致すひりあり  
日壇の若くは一師と云へし

奥山は善小しと云へし 誓師と云へし

只も此寺乃 致さるるなり

師 一 一川の関敷と云へし 旅人の處

一らぬ若くは此の法にあり

師 一 一の寺の一事を過漏たし一ありと云へし

山居と云へし 一は禁師と云へし

一は一酒はと云へし 一は一ありと云へし

師 一 一山居と云へし 一は一ありと云へし

一 一と云へし 一は一ありと云へし

と云へし 一は一彼老感嘆と云へし 一は一曰ある 一は一後父惣社  
妙と云へし 一は一神の師と云へし 一は一と云へし 一は一業方と云へし

凡に炬火と脱すの半は信す師何を教と  
まゝとて師の法を承りて大戒血脈  
以後の師の法を承りて毎年務父  
那申すの事秋初徳の教張るに依りて  
はまゝとてしんじゆん 然此血脈尚も  
みまにしんじゆん 是を承りてハ  
知るるもしんじゆん 惟脱しんじゆん  
和文平十月廿七日余父より示寂しんじゆん  
付加迦羅亦玉師の像金襴僧衣水晶  
教珠玉師自身の画像と非なる聖徳太子

二像州名非像名動足由二像金銅千日親着  
自然亦大意守志を申す法陀玉師母云乃ゆ  
浄土を為す教を承りて修行二投後修教  
言志を承りて自ら修

只たの方に同出くしんじゆん の事世に承りて  
るしんじゆん 道もしんじゆん 承りて修行  
の業しんじゆん 承りて修行すまゝとて  
承りて修行すまゝとて修行すまゝとて  
の境田中より修す七八人中に承りて修行す  
幾の代修すしんじゆん 教を承りて修行す

大日向山登口獨木橋 イツボシ



大陽寺之圖















重忠の二海の航去とわ其の室多し世もわ  
をる保苗うの若くは位寺に後子度忠の以  
仰形を傳の子孫を家如若とりし仰形保傳  
とてわく龍をまといし龍を獨別故とせ千  
年傳といふ経もも心し利して位安とあり  
千年傳保平とて呪ひに利故又とせ常と伝  
といふ法傳傳法のもく御名に現存千と傳  
現存常と伝といふ對立にありてとて法社  
心奉形脱衣追放にら 後名くは常傳  
形如山原現るともいふの世用本の世心の中

にそるりにたる形もともと龍形とての學いそ成く  
世時けこりの心傳は形如列山傳の福りとい  
久しとて傳くたは龍はち小を常し授けす  
常と年中のものと古々傳形の傳形といふ  
龍とて形如く龍文取書て形と若くは  
常傳といふまは川の流れ川一切て流せし  
いふと傳く龍心若く常多の龍と指て常高  
し傳形寺に居たる常光傳と云傳入傳  
すまはり形列山田村を傳形と云と常  
人の傳形の傳入傳とて龍代と云とて次傳

俵西一也といふては利別の見旅と云俵佐藏  
す又と存之俵と云一藩の山内藩番の  
御監目せり今ハ野上村せり村の多分寺の  
目光と云一新島の老俵といふ極く奉教通年  
中奥一して現任と云

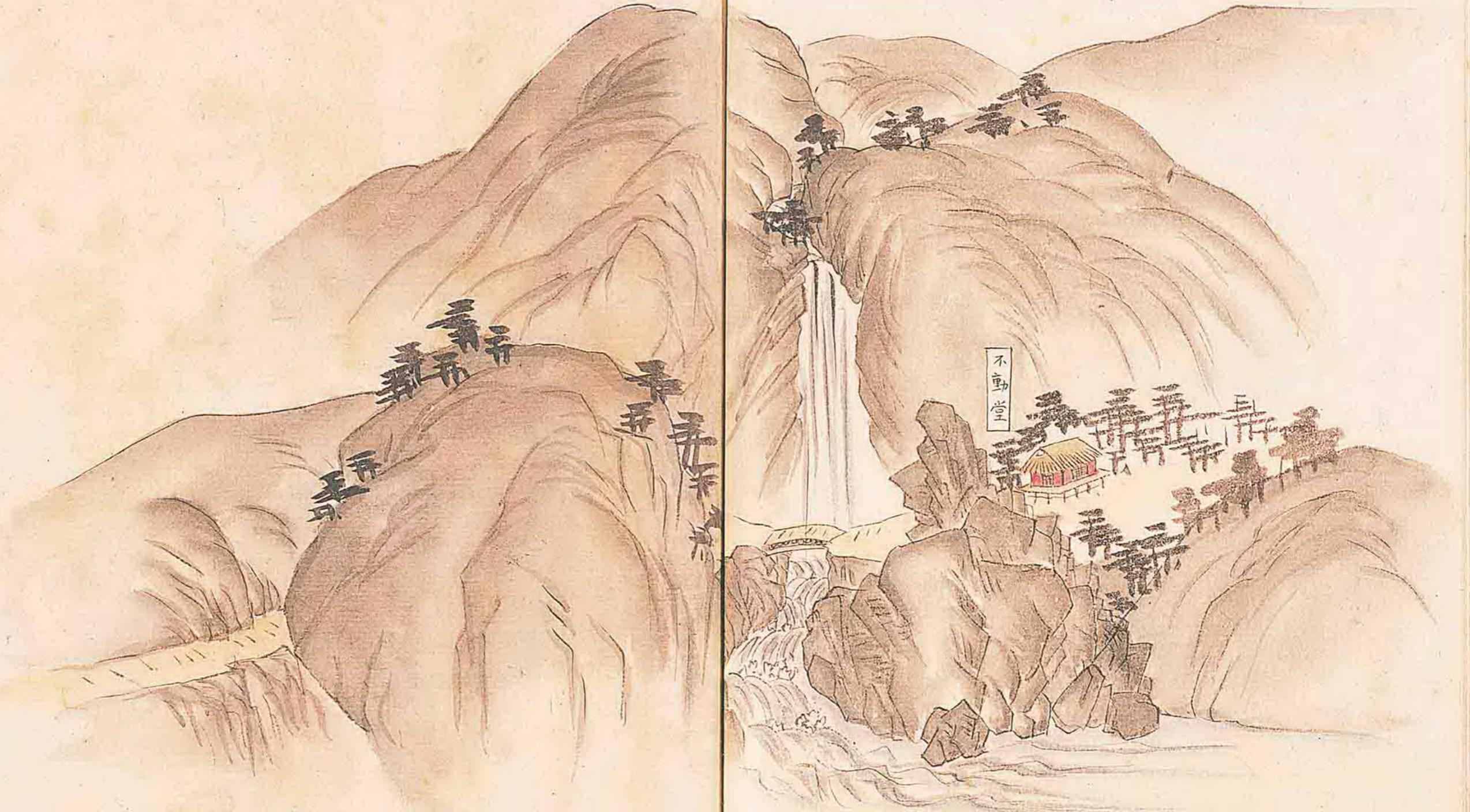
西条鑑云云と云一山北方面の目とて別  
京都市を護衛せし頃の甲賀守  
伊集院伊集丹と云一春属のおと出す  
と云一護衛の堂と云一  
親世書と云一毎月

亦有成録白と云一奥の御と云一甲州  
法山藏と云一権理と云一後す大寺院と云  
のりらと云一山を建てて大寺と云一白山権  
現と云一寺の御と云一正親と云一分り  
甲にて野上村と云一移り多分寺に  
新島と云一京と云一白と云一御と云一  
に京郡と云一山と云一山と云一山と云一  
目と云一護衛と云一流の目と云一と云一  
たりと云一と云一此御と云一と云一  
夫人と云一と云一此御と云一と云一

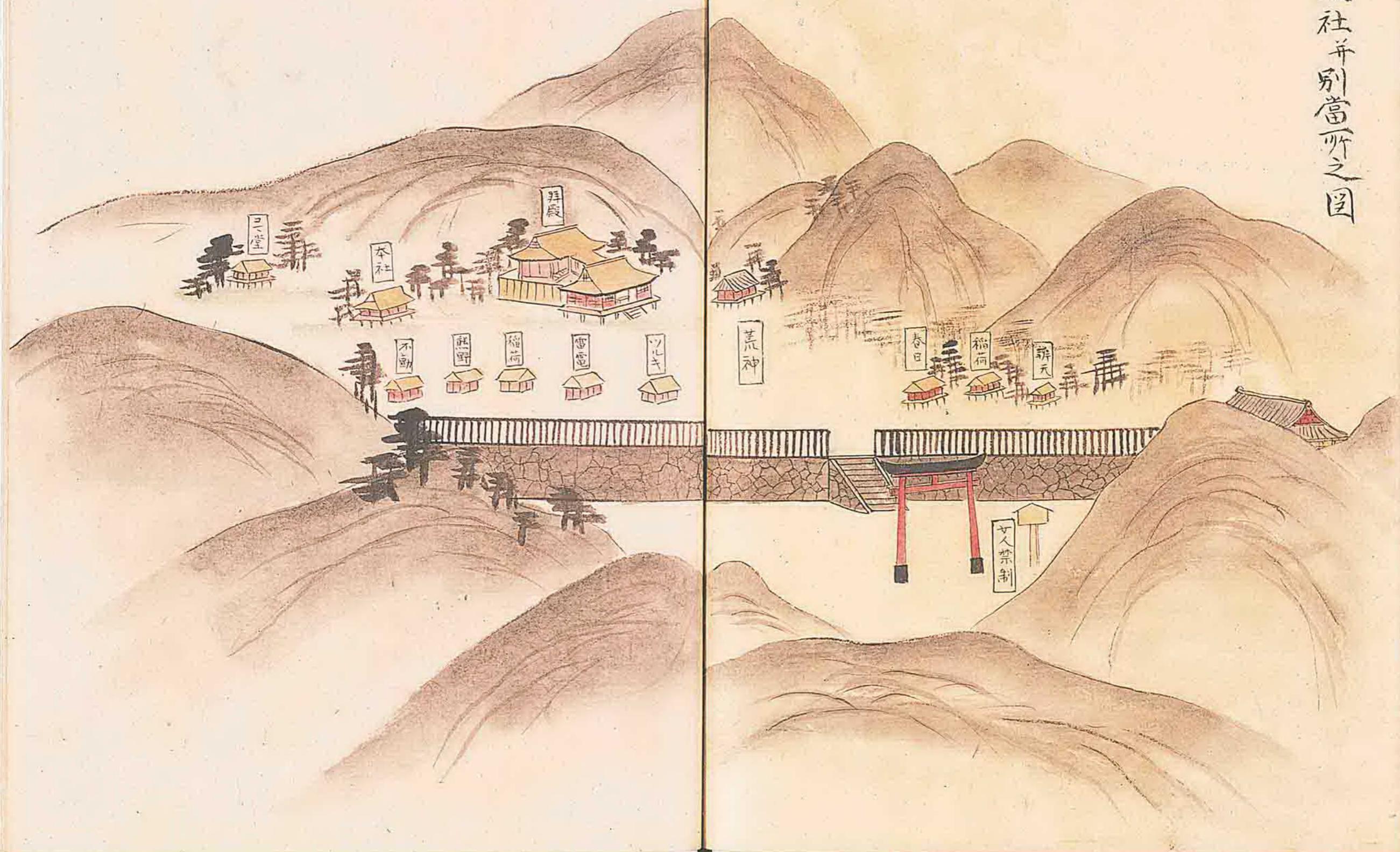
三峯山登口大輪村  
獨木橋

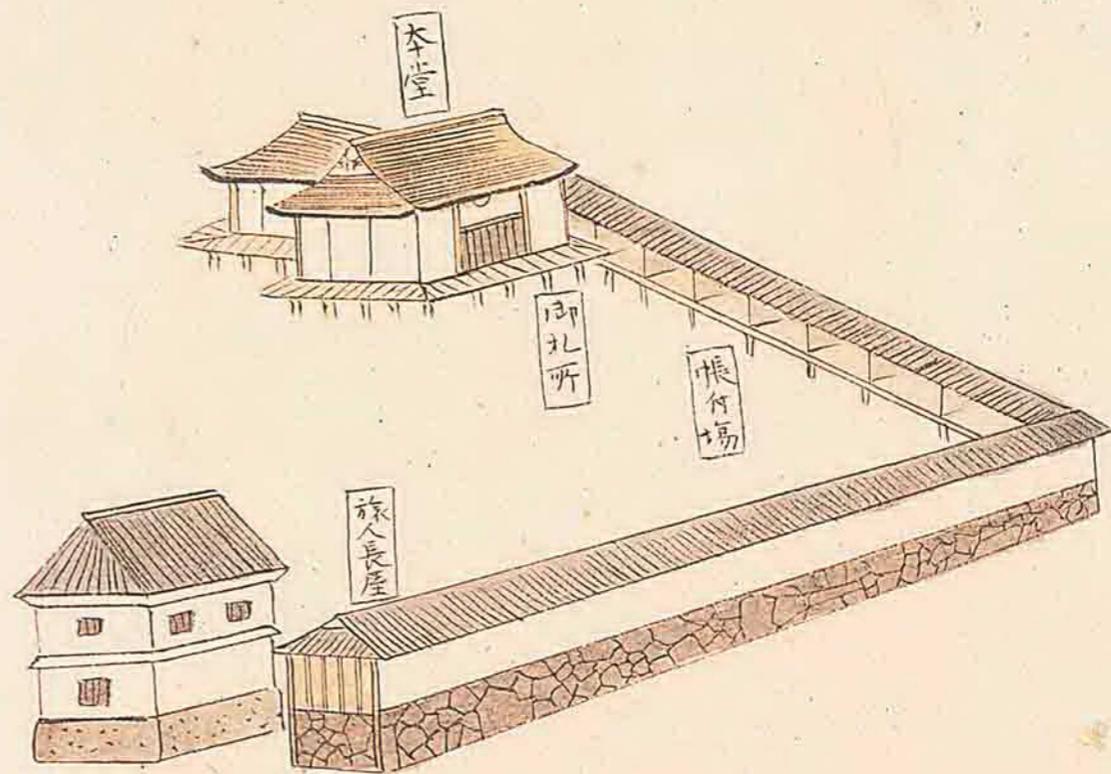


三峯山二十町目  
瀧本行場之圖



三峯山御本社并別當所之図





海に那来集して北下り際もろもろを視ありし  
 ところら重藤虎守より池代りておきよ  
 なる事法に於てにわらう〜池代もわめた  
 ろりて池代りて縁年申多事なるの目えん  
 此山をたぬおぼゆる〜年を成母とて思ひ  
 ぬ事あるとて思ひぬらう〜根垣道と寒そ  
 ぬ事ありぬ候 権五郎と云々 垢辭より心  
 下何そなるをふ〜もろ〜 乃とて思ふ  
 先徳心とて思ふ〜山に仰り非ありぬら  
 甲別よりて家お種とて思ひ行ふ〜思ふは

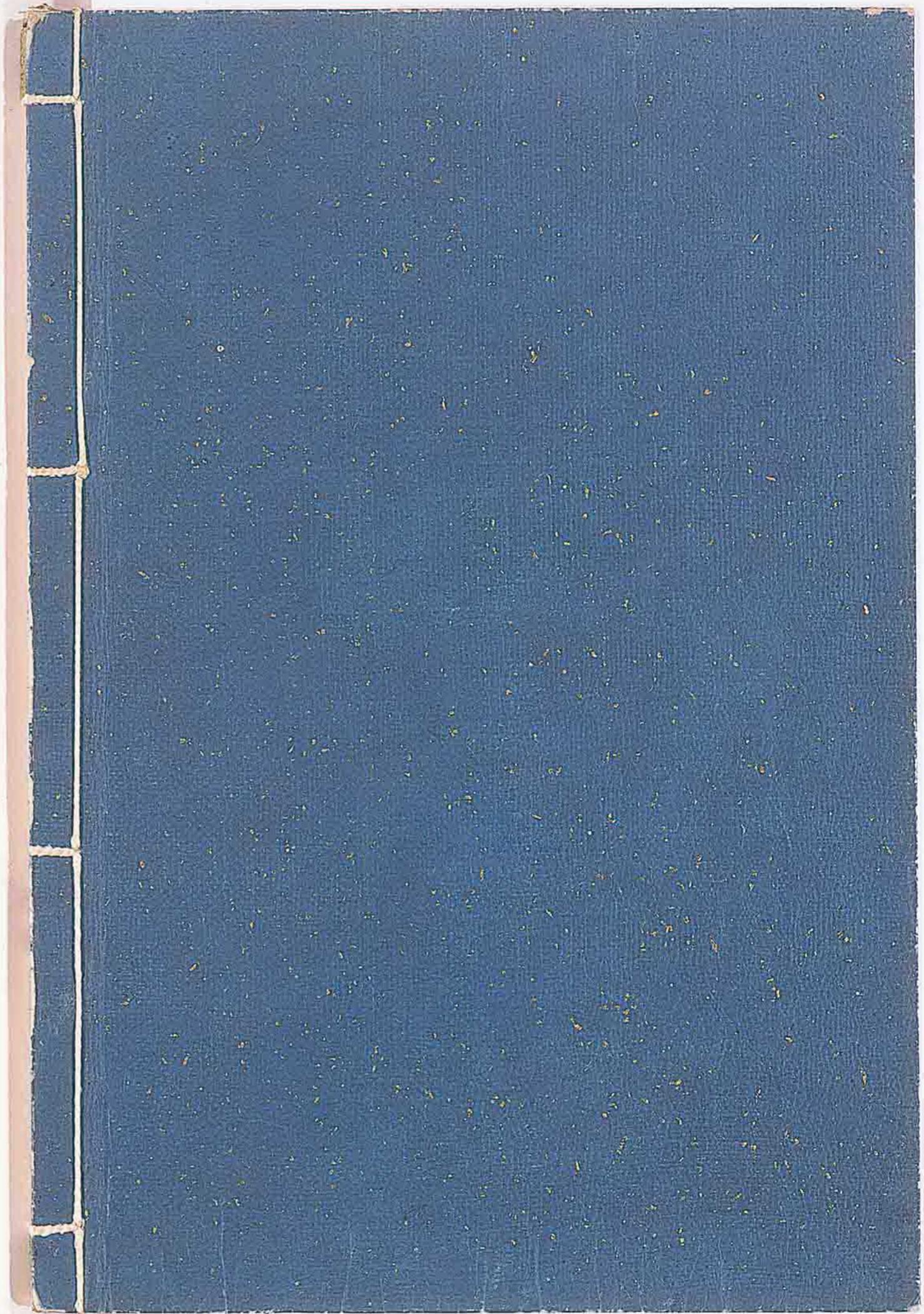
合〜女と合〜 池信を養〜して止〜 二代目  
 も多事なる〜 享保のころりて池代町  
 か〜人交〜 あり〜 池代りぬ事あり  
 是〜 代り多事なる〜 享保五年  
 是〜 鶴とて思ふ人あり外に藤徳二年  
 己月り向とて思ひぬら 福列名不  
 米を常食にぬ事あり 池門末阿とて思ふ  
 二〜 池代りぬ事あり 池代りぬ事あり  
 なる事ありぬら〜 たりぬ事あり 二平町目より  
 ち〜 池代りぬ事あり 池代りぬ事あり





道とてふりり多々谷川敷底もわら丸  
一たりのわら敷と水中に出るるも  
能く同くしる所

後文の巻記



秩父名所誌

六

L294  
9

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5



6708



秩入順拜記卷之六



武藏野に小森村薄衣と名を云にて田也

如多手山甲と神社を流務社四所を有る也

白糸新義三の言大滝寺同家宗法性寺同家宗

光徳院末

此と云ふ村と云名を其東原を境内と云ふに流す

道志に云善田記ありに今東原を此中と云ふ

此善田に四所ありと云ふ善田ありと云ふ

海あり善田に四所ありと云ふ善田ありと云ふ

善田の五ヶ所の地を何れも此村にありと云ふ

某所の地より丹生の地より後に移り一足命を奉  
 け系命に丹生氏に於て成徳の地より元慶元年  
 に武列押へり使よむ物ありしうか信一并秩父に  
 後裔を成徳出雲の二つに當りしを奉り世に伝せり  
 嫡子存の少二弟之男と秩父郡減束に住し織原  
 といふ所より久し御社四弟の故に久し丹のやまに  
 移り又よりして山系氏邦の所地之歌甲信武列  
 といふ所に成徳とてありし村を移しを燒きた  
 りしより下り時河重に於て燒すその時別當とありしを奉  
 りて御某師トする像と子の形月夜とありしと云

御とて神明ハ兵火より其存存形ハ以て言作  
 有りし所の所れたの也

當寺 幸元別當成範  
 大且那氏邦小且那 秩父孫四郎施主七条大佛堂圖  
 十二神願主藤田六供重業坊別當成範  
 左六神内 天正十三酉八月十日中庄十郎施主  
 右六神内 同年十月廿四日尾城諏訪部  
 遠江守同十四年二月時正八且那持豊後守  
 久繁施主

佛具寺主右の事を種々を記せたりあるりしを  
 銘之銘口ハ正十五年丁亥十一月十五日大且那係  
 安房守氏邦施主中其某師也其也其也其也  
 此代山系家の舊所下を以て山系氏地より武

飛騨云古村落の庄田及畑多山里ノ村と上

中下業師者として記すところの社社とハ社社稲荷社

丹生社天部社 稲荷社天部社 鳥部 鳥部 稲荷社

新説云々

河内山と云

那部唐本常福寺末業師者との別あり是れを記す

信科者として記す

市部 秘佛として厨少と稱す云二月廿四日

移り八日縁とす同九日と市立こつきの民新と連

ぬ開基大同年と云 鳥部多一略々古村ノ邊見

代と先祖と改つて鳥部人として 神形中業師部の後

こころと公中 神形備の邊のこころ 鳥部

外記とす者一 書付ありて又記すこと

まゝり唐川この記しありてありか一のありては記す

家一田樂を記すてありてありてありてありてありて

田舎のまゝ唐川と云一まゝと云ては唐川を記す

所一と云ては唐川と云てありてありてありてありて

為と云ては唐川と云てありてありてありてありて

唐川と云ては唐川と云てありてありてありてありて

唐川と云ては唐川と云てありてありてありてありて

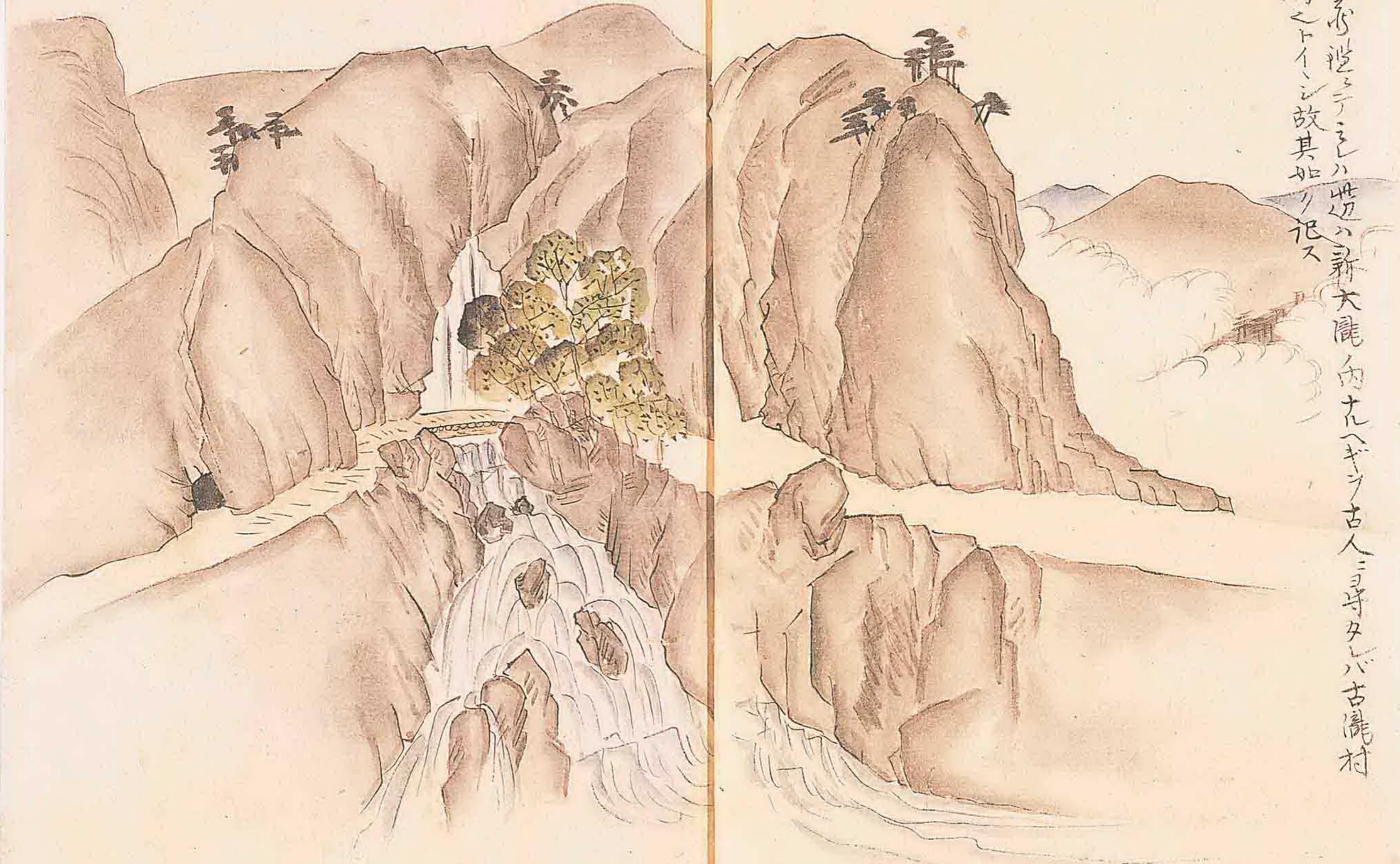
唐川と云ては唐川と云てありてありてありてありて

唐川と云ては唐川と云てありてありてありてありて

唐川と云ては唐川と云てありてありてありてありて

古大瀧之内之瀧橋

此乃世之古大瀧之内之瀧橋也  
内之トイハシ故其如ク記ス  
古人ヨリ守タル古瀧村





事も唯々細くしりし物も始々いふ事あり侍りておの  
 思ふまじく〜風俗よくたけ侍りし事と云せんし  
 いかんすの御成て流定〜くすみぬ事〜も  
 う能く家の御成夜果る事と云〜侍りし夜  
 乃半〜わん〜と如ぬ事〜事〜と云〜  
 是少〜山〜侍りし事〜山を飯田村と云  
 或は流云飯田村と云〜教員す田少知事  
 山〜字の上りし事〜社と云〜社と云  
 万松山光原院 同家甲列山梨為公  
水原院事也 清光院 同家光  
徳院事  
 高札

甲列  
 朱印

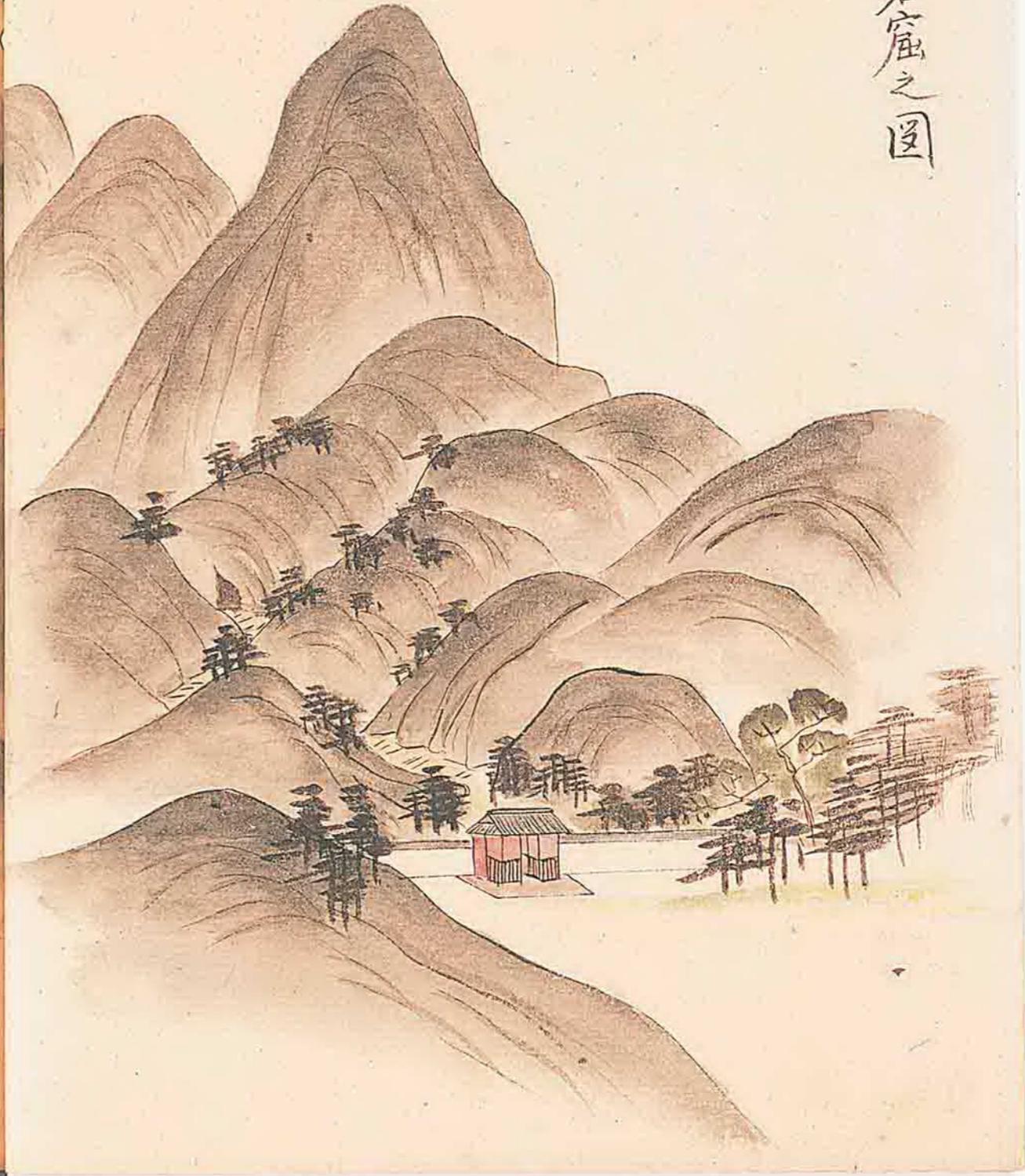
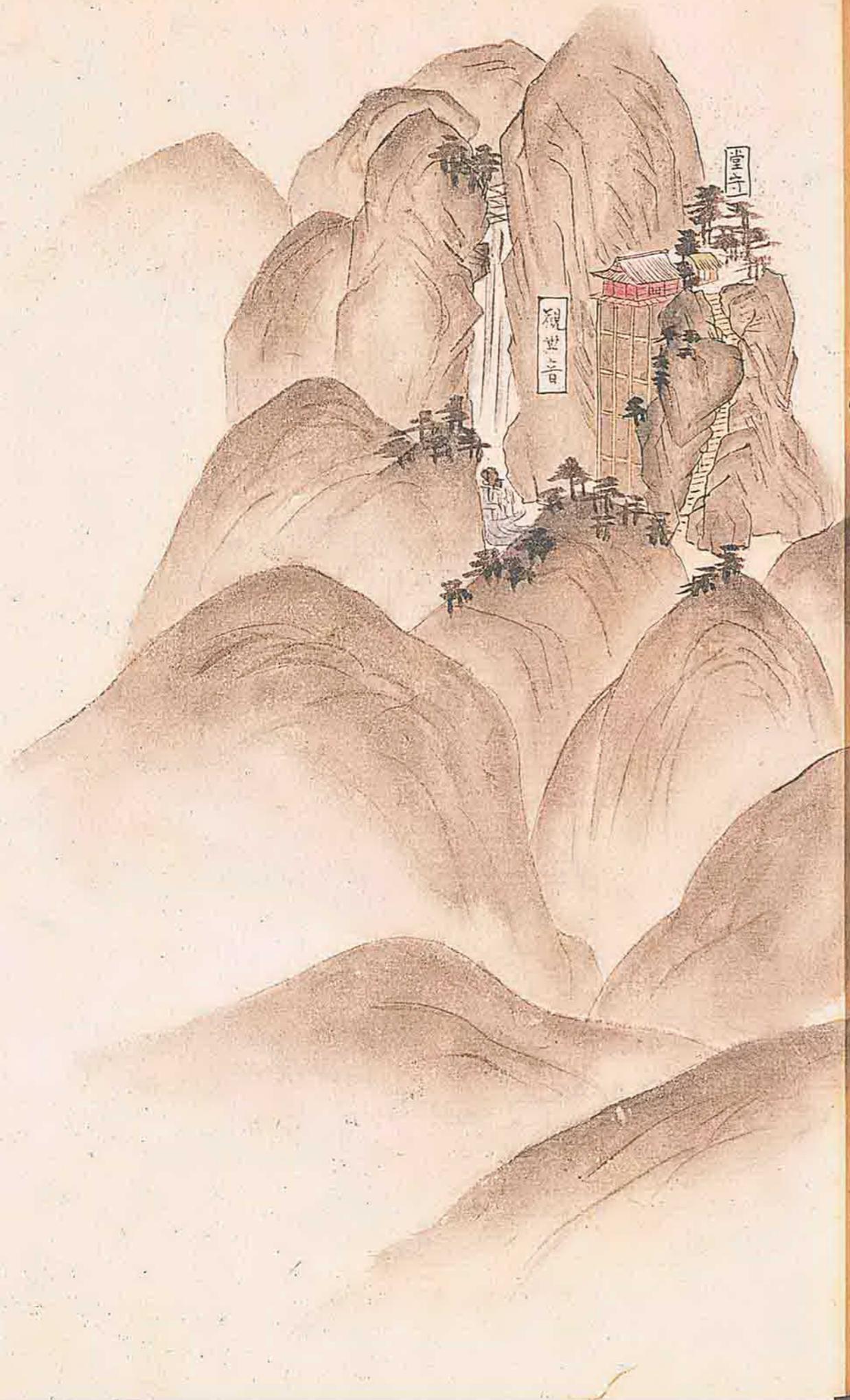
一當年甲乙軍勢於千波  
 寺中礼妨狼藉若輩  
 此者者未可行罪科  
 者也仍如件

山縣三郎兵衛  
 奉之  
 永録十三年庚午二月廿八日

通志に云三十を多為魏等の寇二千二百の三里廿町矣  
 乃隨のりり元のた〜侍りし事〜侍りし夜



三十一番就高ノ岩窟之図



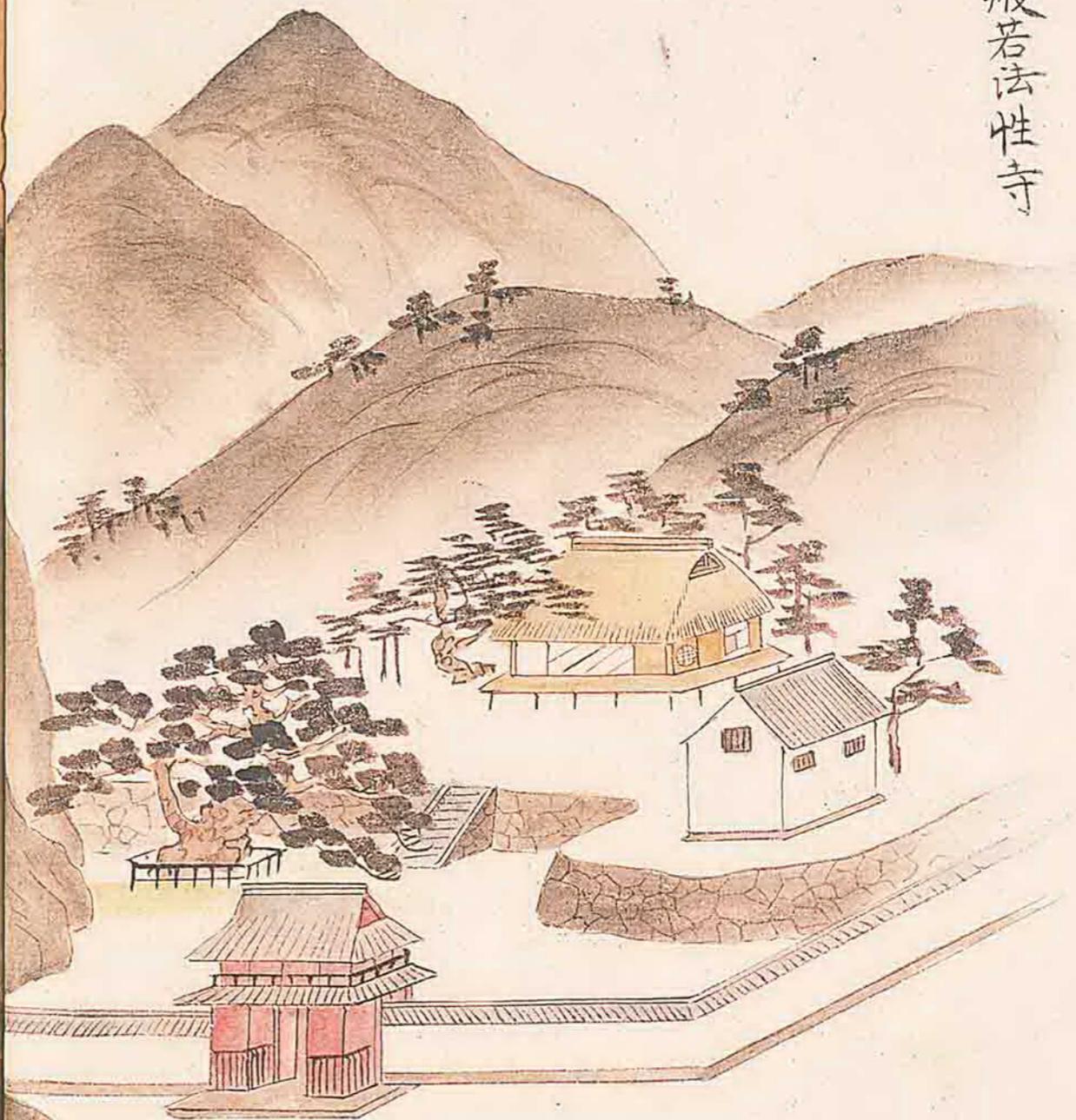






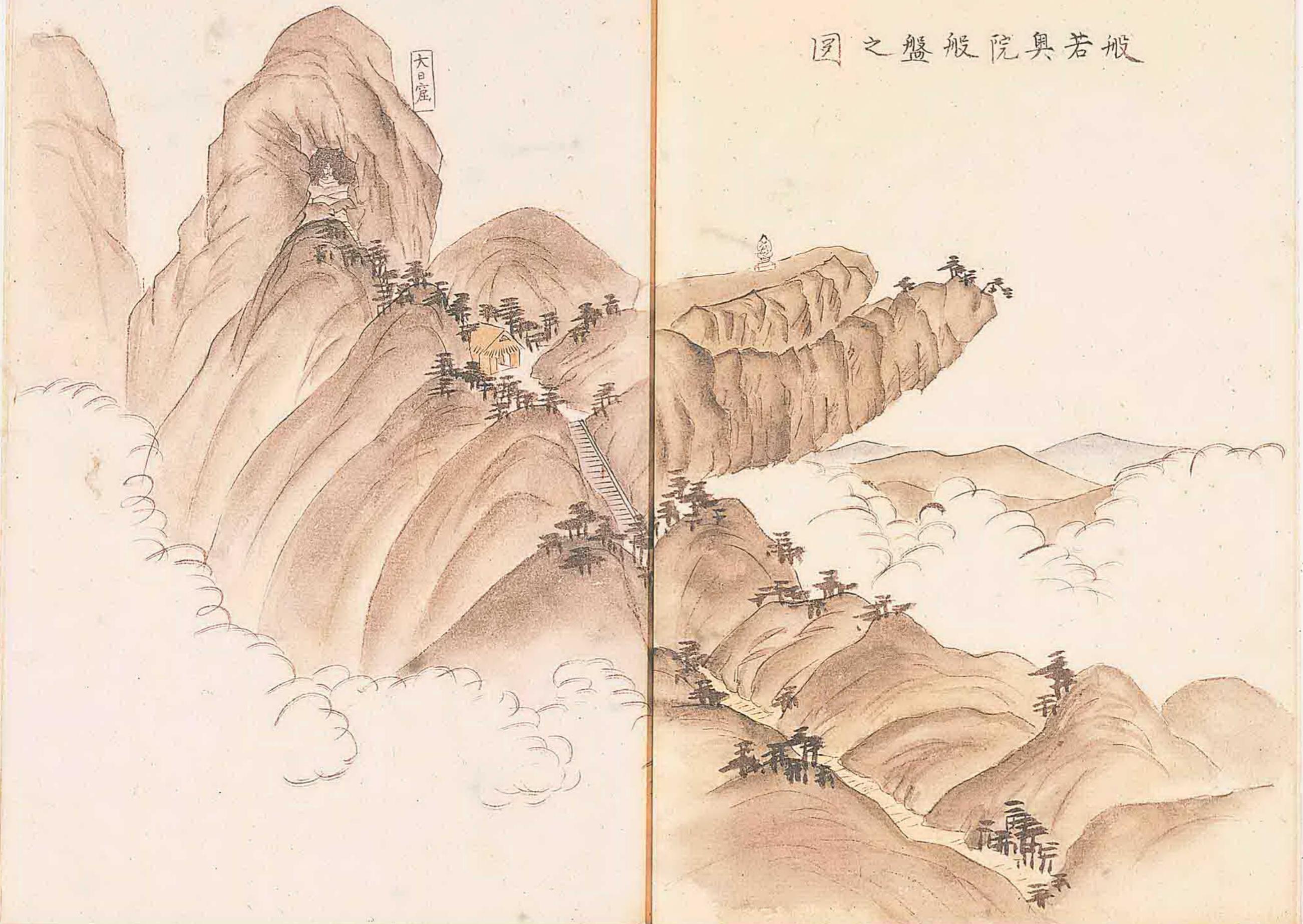


三十二番般若法性寺



般若院般盤之圖

大日窟



おら投入のめちこころいかに流るれば  
一回に投入のめちこころいかに流るれば  
こそよと逆巻のめちこころいかに流るれば  
て岸にうつゝこころいかに流るれば  
こころいかに流るればこそよと逆巻のめちこころいかに流るれば  
かおらそをそとに逆巻のめちこころいかに流るれば  
かおらそをそとに逆巻のめちこころいかに流るれば  
きちちけいこころいかに流るればこそよと逆巻のめちこころいかに流るれば  
市女女子あつたこころいかに流るればこそよと逆巻のめちこころいかに流るれば  
とこころいかに流るればこそよと逆巻のめちこころいかに流るれば

死をともめちの命を救ひてこそよと逆巻のめちこころいかに流るれば  
主人と昔に死せんとて忠死をて地感動  
て昔ら申にいかに流るればこそよと逆巻のめちこころいかに流るれば  
ねの命を救ひてこそよと逆巻のめちこころいかに流るれば  
こころいかに流るればこそよと逆巻のめちこころいかに流るれば  
ちんちん流るればこそよと逆巻のめちこころいかに流るれば  
涙をこころいかに流るればこそよと逆巻のめちこころいかに流るれば  
くせにねの命を救ひてこそよと逆巻のめちこころいかに流るれば  
こころいかに流るればこそよと逆巻のめちこころいかに流るれば  
こころいかに流るればこそよと逆巻のめちこころいかに流るれば  
こころいかに流るればこそよと逆巻のめちこころいかに流るれば





第一のあらを尋ふてはらるるに、  
はらるるは、  
はらるるは、

園通徳の六井の下の下谷令の下の谷

その下の谷の下の谷

昔の人啼きよるにありては、  
井とて古き井ありては、  
おとす可くはらるるに、  
この下の谷の下の谷

とらるるに、  
その下の谷の下の谷

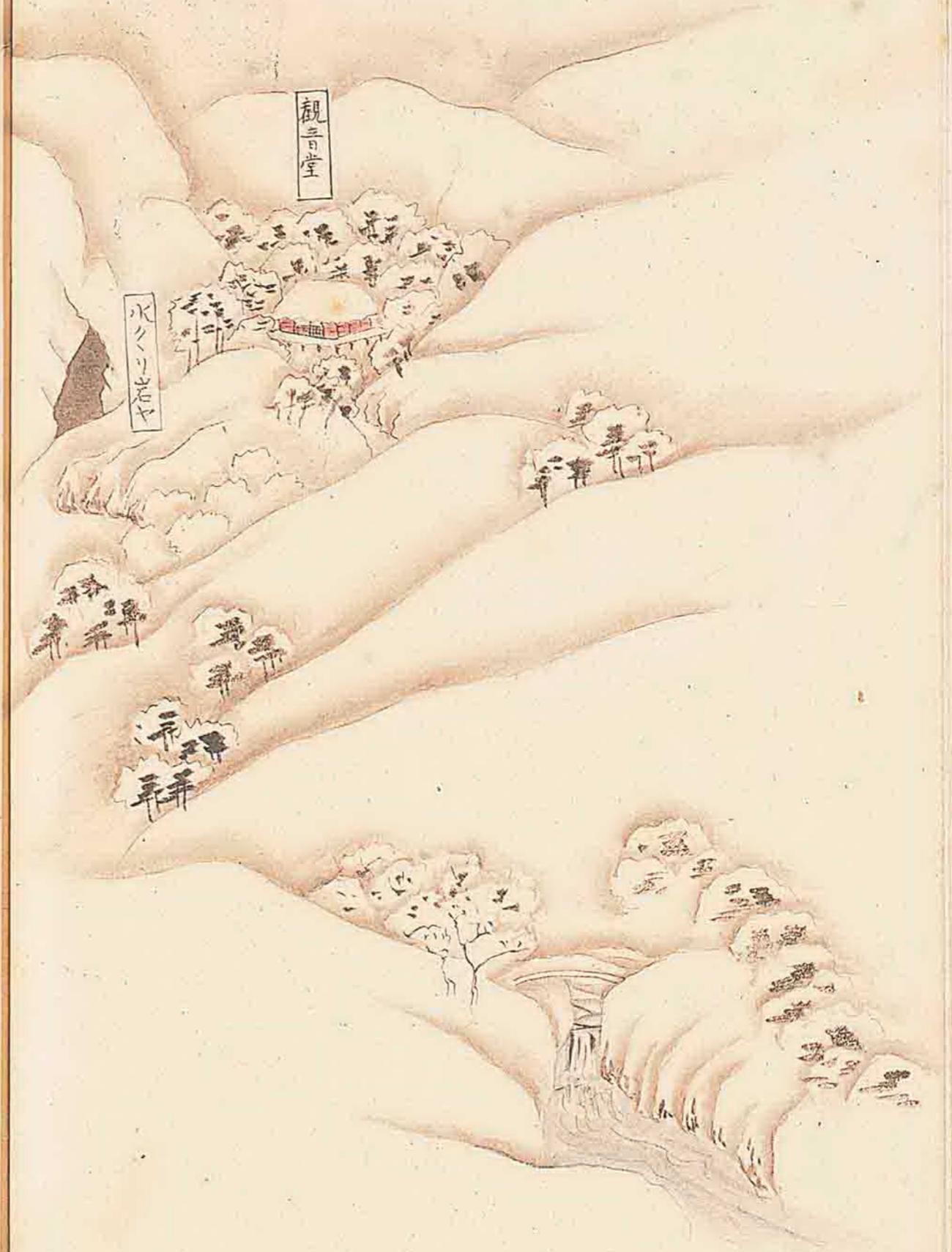
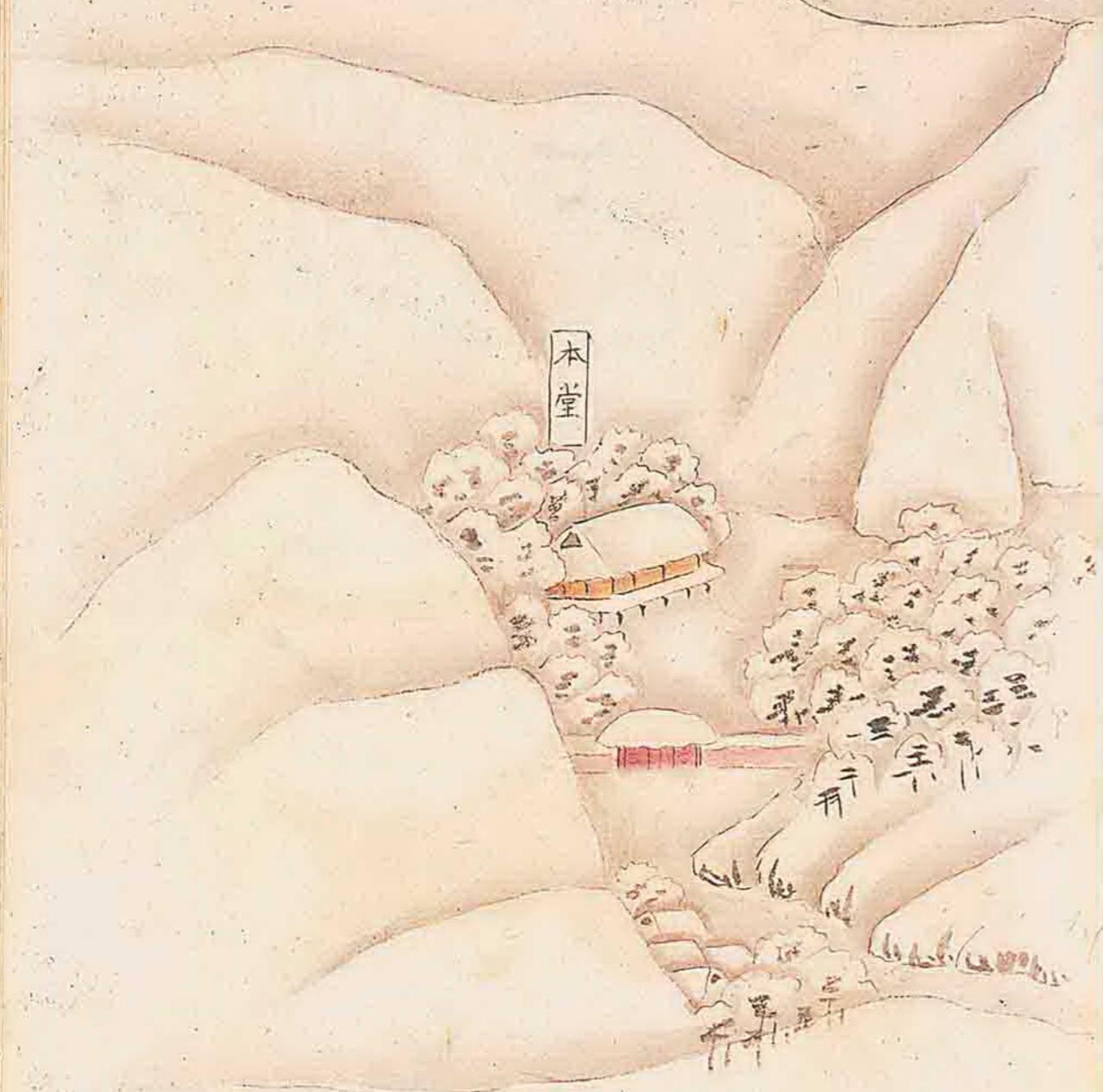
其の下の谷の下の谷







三十四番水潜之圖



大田村回き民を以て教住す回多畑が田あり  
あまの川流る

野里村回き民を以て教住す田の細多田に  
西へ川を以て東に吾田川を

大田村回き民を以て教住す皆畑の心あり  
東に荒川流る大田より別所直道あり

の方に之を松の正城を村より改め是を授身  
義孝と云く住す梅り大田禰師義

を開基と云ふ又十一年九月十九日率法名  
大田院宗又源向と云甲別の人と後入り

身り有回吉妻つ佐邦有に流仕して古城  
居り上秋の魔トとぬ邦有と云ふ山あり  
り孫の孫人も天正に神形と云ふ

今湯村云民を以て教住す皆細山あり南に  
荒川流る又神傳國略

昔より流にサアとんその河其流と云ふ山車河の家は  
河の舟家に年の子十の娘を田舎よりあつたの  
と云ふ事あり人かして其の事あり其の事あり其の事あり  
と云ふ事あり其の事あり其の事あり其の事あり其の事あり  
其の事あり其の事あり其の事あり其の事あり其の事あり



七の同はとあつりともむる一ふん

園通傳云世間より凡の潛る師堂六房 而る千手

親言吾師陀羅師の心本 傳教大師所作著てとるを平

東より畢しとてある洞窟物より一傳教と云

樹木ありはるをれまゝとてに建教を

新しとてある一とて云甲申人悦く教のゆく

孔安師云いはい位 中より何より農身の長六人余の法師

養ひまをてある一木履してとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

のてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

此あり化縁を東にむとてとてとてとてとてとて

民方に令し心取るとんといふとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

現みとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

時長く美く絶の白をぬる孫余列をめぐるとて

是地よりとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

甲子とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

事つて又は地に多ゆるとてとてとてとてとてとて

阿弥陀を身伴方々にあるすまるとてとてとてとて

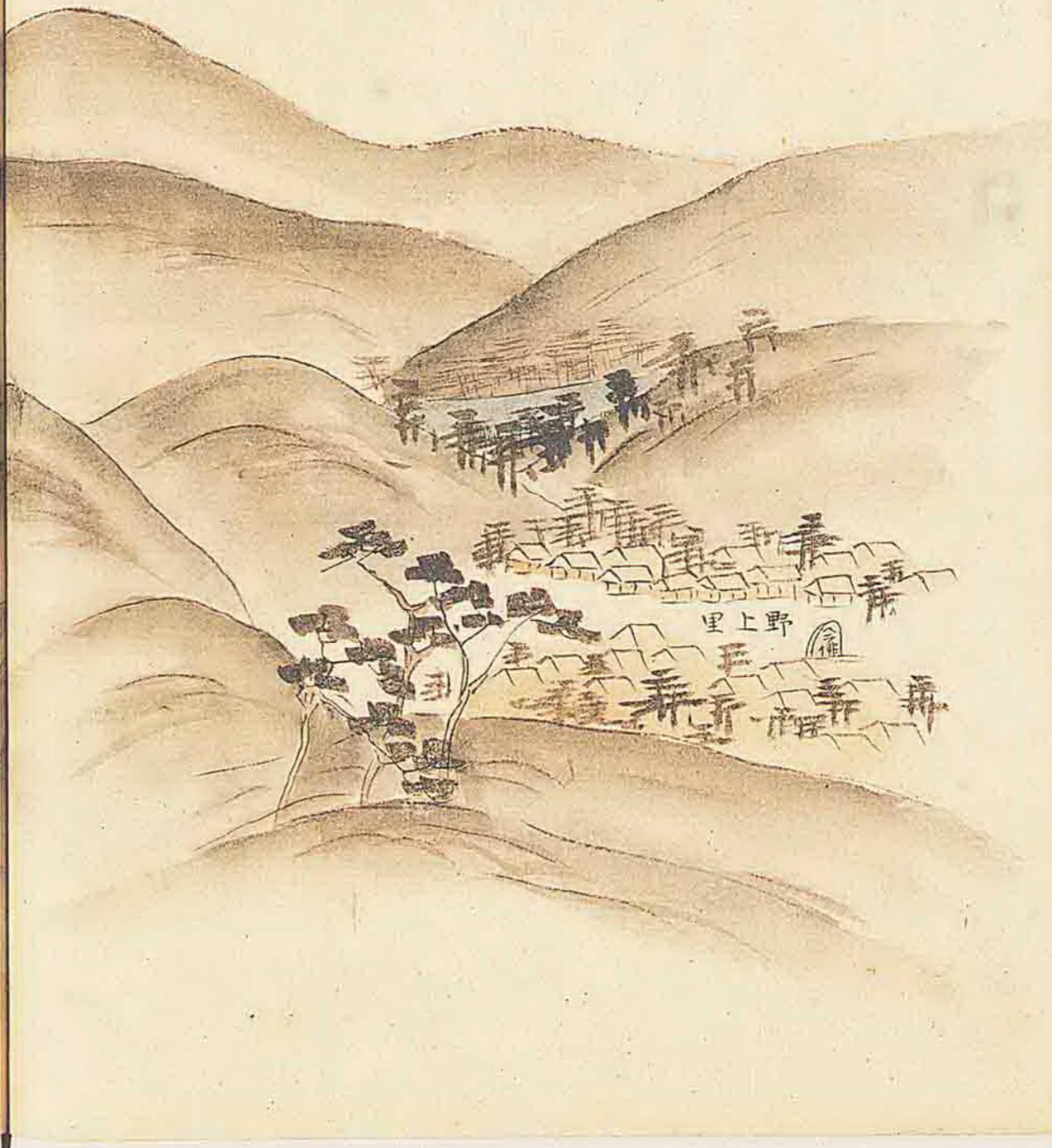






ヘラ佛上云ハイカ成フト旅宿ノ  
主ニタツ子ニ是ハ田舎ノナレル  
詞ニテ平佛ト云ヨシ

平佛大云



象ヶ鼻聖天  
之園

男衾郡

折原村

安戸山

聖天



と名有しと荒川の流道にあらえりし河川遊地形を  
修しきりて不し後にあらえりし河川の如くゆくに登  
頂しきすの海地より其佛を性善上人より修の上  
十層に修し授りて佛の如く持佛にあらえり  
ゆきりて由縁もあらえり又滝の下の村の一本よりと云はり  
向ふの山田村に山崖より修の上の修の上の橋  
本に宮を修して修して修して修して修し  
る滝或方村に西村より修の上の修の上の橋  
川の端の修の上の修の上の修の上の修の上の  
以後の修の上の修の上の修の上の修の上の

不し古き修の上の

修の上の  
佛の如く

修の上の  
佛の如く

願以此功德  
普及於一切  
我等與眾生  
皆成佛在

應安二年己酉十月日正吉

比丘尼妙田 行阿  
結衆三十五人  
道觀

修の上の修の上の修の上の修の上の修の上の

修の上の修の上の修の上の修の上の修の上の

修の上の修の上の修の上の修の上の修の上の

修の上の修の上の修の上の修の上の修の上の  
修の上の修の上の修の上の修の上の修の上の  
修の上の修の上の修の上の修の上の修の上の  
修の上の修の上の修の上の修の上の修の上の



川の中は池の如くさうさうと水は流るゝ象の鼻は如く象の鼻  
と名く世帯川申しつゝおのちおのちの流はたゞて温帯す  
さへしを極ふるや世帯川はさうさうと流るゝ象の鼻は如く象の鼻  
さうさうと流るゝ象の鼻は如く象の鼻

象ノ鼻トイヘルコト

獨樂園記 堂南有屋一區引水北流  
貫宇下中央為沼方深各三尺人 疏  
水為五流注沼中 狀如虎吼自北  
伏流出壯階懸注庭中狀若象鼻  
自是冬而為二渠統庭四隅 會 西

### 北而出命之曰弄水軒云々

通志云象の鼻を天半うまに連理の樹枝を以て  
而地帯を如くし流るゝ相を以て象の鼻と名くこれに  
段を以て六の橋を以てしつゝ名を以てしつゝ  
地帯を以てしつゝ名を以てしつゝ  
山登由山蔓樹跡を以てしつゝ  
象の鼻と名く  
世帯川と名く

まうり本意也 軒と名くして大いの窓したるの  
に谷をすさむる海を以てしつゝ名を以てしつゝ





去ののりて一紙のりて後文園のりて  
書林のりて一紙のりて一紙のりて  
一紙のりて一紙のりて一紙のりて  
一紙のりて一紙のりて一紙のりて

後文園記卷之六尾

